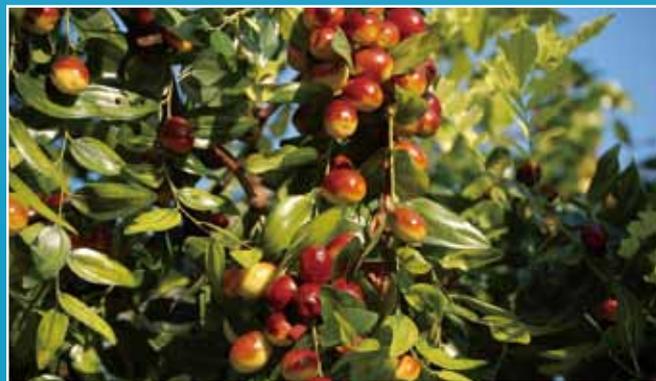


HIROSHIMA UNIVERSITY BHS NEWS

Hiroshima University Graduate School of Biomedical & Health Sciences

目次	
Greeting ご挨拶	2
Activities 活動	8
My Motto 座右の銘	9
Research Frontline 研究最前線	10
Prize Winner 各賞受賞者紹介	11
Prize Winner 各賞受賞者リスト	12
Air Mail 広大から海外へ留学している若手の日記	14
Meeting Report 院生及び若手研究者の国際学会参加報告	15
Going Abroad 若手研究者等海外派遣プログラム実施報告	29
News Digest 最近の新聞記事から	55
Meeting Record 学会等開催記録	59
人事異動	66
Congratulation 大学院修了者一覧	67
平成24年度文部科学省科学研究費補助金等採択一覧	78
平成24年度厚生労働省科学研究費補助金採択一覧	86
平成24年度受託研究受入・民間等との共同研究実績状況	88
平成24年度奨学寄附金受入状況	88
寄贈図書一覧	89
編集後記	90



目次	
Greeting	ご挨拶 「就任のご挨拶と今後の教育・研究の抱負」 …… 松浪 勝義 … 2
Greeting	ご挨拶 「就任のご挨拶」 …………… 花岡 秀明 … 3
Greeting	ご挨拶 「ご挨拶」 …………… 杉山 一彦 … 4
Greeting	ご挨拶 「プロジェクトの発足にあたり就任のご挨拶まで」 森信 繁 … 5
Greeting	ご挨拶 「病理学研究室教授就任のご挨拶」 …………… 武島 幸男 … 6
Greeting	ご挨拶 「就任のご挨拶」 …………… 吉子 裕二 … 7
Activities	活動 「平成24年度大学間連携共同教育推進事業「連携 機能を活用した歯学教育高度化プログラム」」… 二川 浩樹 … 8
My Motto	座右の銘 「アイデアは、それを一心に求めていれば必ず生まれる」 …………… 越智 光夫 … 9
Research Frontline	研究最前線 「味覚研究の次の一步」 …………… 杉田 誠 … 10
Prize Winner	各賞受賞者紹介 「文部科学大臣表彰 科学技術賞（研究部門）を受賞して」 …………… 岡本 泰昌・山脇 成人 … 11
Prize Winner	各賞受賞者リスト …………… 12
Air Mail	広大から海外へ留学している若手の日記 「英国ケンブリッジ大学留学便り」… 細井 徹 … 14
Meeting Report	院生及び若手研究者の国際学会参加報告 …………… 15
Going Abroad	若手研究者等海外派遣プログラム実施報告 …………… 29
News Digest	最近の新聞記事から …………… 55
Meeting Record	学会等開催記録 …………… 59
人事異動	…………… 66
Congratulation	大学院修了者一覧 …………… 67
	平成24年度文部科学省科学研究費補助金等採択一覧 …………… 78
	平成24年度厚生労働省科学研究費補助金採択一覧 …………… 86
	平成24年度受託研究受入・民間等との共同研究実績状況 …………… 88
	平成24年度奨学寄附金受入状況 …………… 88
	寄贈図書一覧 …………… 89
	編集後記 …………… 竹本 俊伸 … 90
	表紙写真説明 …………… 90



就任のご挨拶と今後の教育・研究の抱負

松浪 勝義 医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 薬学分野 生薬学 教授
(薬用植物園 園長(兼任))

この度、大塚英昭教授の後任として広島大学大学院 医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 薬学分野 生薬学研究室の教授および統合健康科学部門 薬学分野 薬用植物園長(兼任)を拝命し、平成24年4月1日付で着任いたしました。紙面をお借りして皆様にご挨拶申し上げます。

私は、平成4年に大阪大学 薬学部を卒業し、同大学院修士課程まで生薬学講座(北川 勲教授、小林資正助手(現 大阪大学 薬学研究科 教授))で海洋生物、海洋微生物を対象にした天然物化学研究を行いました。その後、分子生物学の手法を学ぶため、総合研究大学院大学 博士後期課程(岡崎国立共同研究機構 基礎生物学研究所 細胞分化研究室:鈴木義昭 教授)に進学し、ここでは、昆虫の器官形成に関与する遺伝子のクローニングと発現解析を行い、平成9年に博士(理学)の学位を取得いたしました。その後、博士研究者として大阪大学医学部バイオメディカル教育研究センター臓器移植研究部にて異種移植の研究に従事しました(白倉良太 教授)。このプロジェクトはその後、産学連携で設立された株式会社日本動物工学研究所へ受け継がれました。ここでは遺伝子組み換えと細胞培養技術を用いて移植免疫(補体、NK細胞)に関する研究を行いました。その後、同じ大阪大学内ということもあって、上述の小林先生からお話があり、現在の研究室に平成13年6月から助手としてお世話になることになりました(現在も異種移植の研究グループと共同研究を継続し、平成21年には大阪大学から博士(医学)を頂きました)。広島大学では10年ぶりの天然物化学でしたので当時はかなり苦勞しましたが、逆に大塚先生の洗練された研究手法を一から学ぶことで、この分野でやっていく自信を得ることができました。その後、講師、准教授と責任ある仕事をさせて頂き、この度、このような名誉ある機会を頂けることになりました。この場をお借りして、ご指導、ご協力を頂いた皆様に深謝いたします。

現在の主な研究テーマは沖縄亜熱帯植物に含有される化学成分に関する研究で、ヒトがん細胞やリーシュマニア原虫に対する増殖抑制活性などを評価しながら活性成分の単離・精製・NMRやMSなどのスペクトルデータによる化学構造解析を行っております。当研究室は、エジプト、マダガスカル、タイ、ベトナムといった資源国からの留学生が多く(増減はありますが)学生の国際感覚の育成に多少なりとも貢献していると思います。今後は、これまで培ってきた経験を生かして、分子生物学的な手法を取り入れた植物の2次代謝に関する研究へ展開できればと考えています。

また、薬用植物園をご担当されていた神田博史先生(現 安田女子大 教授)の後任として、薬用植物園関連の仕事と漢方の講義も併せて担当させていただけることになり、大変やりがいを感じております。教授就任にあたり、医歯薬保健学研究院の先生方には今後ともご支援とご指導を宜しくお願い申し上げます。



就任のご挨拶

花岡 秀明 医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門 保健学分野
老年・地域作業機能制御科学 教授

このたび、清水 一教授の後任として、平成24年4月1日付で広島大学医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門 老年・地域作業機能制御科学研究室（旧：作業機能制御科学）の教授を拝命いたしました。広島大学は、作業療法士・理学療法士の養成校として日本で最初の4年生大学であり、20周年を迎える節目の年に研究室を担当させていただき、責任の重さを感じております。紙面をお借りして、ご挨拶させていただきます。

私は、30年ほど前にリハビリテーションに大きな魅力を感じ、作業療法士の養成校に進学しました。卒業後、一般病院で臨床を行っていた時に、愛媛大学名誉教授 野島元雄先生（初代愛媛大学整形外科学教室教授）より指導を受け、その出会いがきっかけとなり、広島大学大学院への進学を決意いたしました。修士課程では、村上恒二教授（初代広島大学大学院保健学研究科科長）、西村良二教授（現 福岡大学医学部精神医学教室教授）から、博士課程では岡村仁教授から指導を受けました。一貫して高齢者の心の健康に対する心理・社会的側面からのアプローチについて研究を行い、平成15年に博士（保健学）の学位を取得いたしました。学位取得後は、広島県と島根県の県境に位置する島根リハビリテーション学院の教員として赴任し、高齢化に伴う諸問題について考える機会を得ました。翌年、茨城県立医療大学助教授として赴任し、作業療法士養成教育に加え、付属病院で在宅復帰に向けた臨床にも携わりました。また、茨城県は歴史的に地域リハビリテーションが盛んで、近隣地域の高齢者を対象とした事業にも参加させていただきました。

平成18年からは広島大学大学院保健学研究科に助教授として赴任し、これまで高齢者のうつ予防、転倒予防などの介護予防や、生活習慣改善に対するアプローチを中心に研究を行ってきました。現在の我が国は、高齢化の進展に伴い、認知症や転倒・骨折、虚弱化などによる要介護者の増加、核家族化や少子化などによる社会構造の変化といった様々な問題に直面し、老いて暮らすことへの安心感を取り戻すことが課題となっていると思われます。今後、こうした状況に対して、教育面では、作業療法士の職域も医療現場だけでなく、介護老人保健施設、通所リハビリテーション施設などに拡大し、地域で対象者の生活を支えることがますます重要となっているため、信頼される、時代に即した人材の育成に努力してきたいと思っております。一方、研究の面では、特に、高齢者の介護予防に興味を持っております。身体機能のみならず、心理・社会的側面から高齢者の生活に対して包括的に介入できる作業療法の特徴を生かして、高齢者の主体的な生活を支援し、健康長寿につながる研究を行っていければ、と考えております。今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願ひ申し上げます。



ご挨拶

杉山 一彦 病院 がん化学療法科 教授

平成24年4月1日付けで、広島大学病院に新設されました「がん化学療法科」の教授を拜命致しました。

私は昭和59年に広島大学医学部医学科を卒業し、広島大学脳神経外科学教室（魚住 徹教授主催）に入局後、広島大学病院と松山赤十字病院にて研修医として勤務いたしました。引き続き県立広島病院、国立療養所広島病院で、頭部外傷、脳血管障害、脳腫瘍等の脳神経外科一般診療に従事致しました。平成4年帰局し、魚住 徹先生、栗栖 薫先生のご指導のもと、膠芽腫、頭蓋内胚細胞性腫瘍等悪性脳腫瘍の診断・治療を行う神経腫瘍治療（Neuro-oncology）部門に所属、臨床活動を行ってまいりました。

魚住教授からは多種の病理分類が存在する中枢神経系腫瘍では最適な治療を選択するためには病理診断の研修が不可欠とのご助言があり、米国ニューヨーク市 Montefiore Medical Centerの平野朝雄先生のもとで神経病理の基礎を勉強する機会も得ました。ここ10年間は髄芽腫など小児脳腫瘍の診断、手術、術後治療、長期追跡（小児脳腫瘍経験者のQOL）に関して、小児科、放射線治療科、放射線診断科、手術室等のご協力を頂きながら勉強を継続することができました。この間、多数の脳腫瘍症例をご紹介頂きました会員の皆様に厚く御礼を申し上げます。

がん治療に不可欠な手術、病理診断、放射線治療、薬物療法の臨床経験をバランス良く研鑽できましたのは、広島大学病院という場所で20年間活動できた賜であると思っております。広島大学病院の諸先生、特に越智光夫前病院長、茶山一彰現病院長にこの場をお借りして、深く感謝申し上げます。

新しいがん化学療法科ではNeuro-oncologyに関する臨床・教育・診療をさらに充実すべくがんばっております。さらに当科は別の2つの大きな使命がございます。一つは院内の各専門分野のがん診療を円滑に遂行するための基盤整備の役割です。既にごん腫別にトップレベルのスタッフ・設備が構築されておりますので、その活動・運用がより高いレベルになるように、中央点滴室や治療プロトコール（薬物治療計画）の管理、整備を進めてまいります。もう一つは県全体のがん対策に係る取組を牽引していく役割です。広島大学病院は県内唯一の国指定都道府県がん診療連携拠点病院であります。他に県内には地域がん診療連携拠点病院（11施設）、がん診療連携拠点病院（5施設）があり、専門医療者の育成と良質ながん診療の提供を行っております。がん診療にかかわる専門医師、薬剤師、看護師、メディカルスタッフの育成プログラムを全16病院で討議しながら早急に立ち上げて行きたいと考えております。特に病院毎の得意分野を研修プログラムで共有できるような計画を立案、実行することで、積極的な人事交流を行い、病院間の連携を進めてまいります。

皆様のご指導、ご鞭撻、ご協力を重ねてお願い申し上げます。



プロジェクトの発足にあたり就任のご挨拶まで

森信 繁 医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門 医学分野 精神神経医科学
ストレス脆弱性克服プロジェクト 特任教授

このたび、平成24年4月1日付けで、広島大学大学院医歯薬保健学研究院・応用生命科学部門・精神神経医科学・ストレス脆弱性克服プロジェクト・特任教授を拝命いたしました。

このプロジェクトは平成24年度に採択されました、文部科学省の特別経費（プロジェクト分）「こころのストレス脆弱性克服のための医学・脳科学・教育学連携プロジェクト」により発足いたしました。この特別経費の主旨には、大学の特性を生かした多様な学術研究機能の充実がうたわれておりまして、霞キャンパスにプロジェクトは設置されておりますが、本学の特徴を発揮する意味で教育学研究科と医歯薬保健学研究科との連携を基盤とした構成になっております。本プロジェクトの提案につきましては、浅原利正学長をはじめ教育学研究科の坂越正樹副学長・宮谷真人教授、医歯薬保健学研究科の小林正夫研究科長・山脇成人教授をはじめ、多数の関係者の皆様のご尽力を賜り、採択されております。この場をお借りしまして、心より御礼を申し上げます。

ご存知の皆様も多いかと存じますが、わが国では1996年には気分障害患者数が433千人であったものが2008年には1,041千人と倍増しております（厚生労働省患者調査）。特にうつ病は、先進国で2020年には障害調整平均余命低下要因の第2位になると予測されております。またわが国のメンタルヘルス上の深刻な事態としまして、自殺者数が1988年以後、毎年3万人超という問題があり、この原因にもうつ病の関与が指摘されております。このようなうつ病の対策には、かつての結核対策や現在のがん医療と同様に、予防が重要な役割を果たすと考えられます。

このような観点から本プロジェクトの目標は、うつ病をはじめとしたストレス性精神障害に対する脆弱性の早期発見と、その修復法の開発を目指しております。具体的には、発症脆弱性バイオマーカーを、エピゲノム・脳機能画像・認知心理学の分野から共同で探索し、これらのマーカーを評価尺度に、医学、脳科学、教育学の学際的研究によりまして、ストレス脆弱性克服のための教育介入プログラムを開発しまして、発症予防につなげることを考えております。医療の現場での治療プログラムだけでなく、学校教育の現場で実施可能なプログラムの開発を目指す今回の取組は、精神医学、脳科学、心理学・学校教育学が連携できる本学特有の機能を活かしたものであります。

同様のプロジェクトとしまして、北海道大学の「ストレスによる心の病の革命的治療を目指した領域融合研究推進事業」があります。研究内容面で互いに昵懇の研究者同士ということから、平成25年1月には北大で合同の報告会を行う計画であります。

浅学菲才な私にとりまして全く新規の企画のため、まだ雲をつかむような状況ではありますが、本プロジェクトが実りある組織として躍動しますよう、学内の多くの皆様のご指導、ご鞭撻を、何卒宜しくお願い申し上げます。



病理学研究室教授就任のご挨拶

武島 幸男 医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 医学分野 病理学 教授

平成24年7月1日付で井内康輝名誉教授の後任といたしまして、広島大学大学院医歯薬保健学研究院基礎生命科学部門 病理学研究室（旧病理学第二）の教授職を拝命いたしました。昭和22年7月に故渡辺漸名誉教授によって開講され、以後、故山田明教授、故徳岡昭治名誉教授、井内康輝名誉教授によって脈々と受け継がれ、発展してきた、この伝統ある教室を主宰させていただくことは誠に光栄であります。その責任の重さを改めて痛感しております。

小生は江田島市大柿町（合併前は佐伯郡大柿町）に生まれ、小・中学校を地元の学校に通い、広島大学附属高等学校を経て、昭和56年に広島大学医学部へ入学いたしました。昭和62年広島大学医学部を卒業後、直ちに、本学病理学第二講座の徳岡昭治名誉教授の門をたたき、多くの諸先輩方から厳しい病理診断学（剖検、生検、手術材料の検討）の指導を受けて参りました。平成2年、井内康輝先生が教授となられてすぐに、2年間、アメリカ合衆国国立衛生研究所NIHのDr. Curtis C. Harrisの研究室に2年間留学する機会を与えられ、原爆被爆者・職業性マスタードガス曝露者に発生した肺癌のp53遺伝子の点突然変異の検索を行い、その際の学術論文により学位を取得いたしました。その後、広島大学において、助手、講師、助教授、准教授と2年間にわたって教育、研究、社会貢献に尽力して参りました。

研究は、前述の学位論文のテーマに加え、病理形態像と遺伝子異常の相関を探るため、肺癌・乳癌の前がん性病変における遺伝子異常の蓄積の証明やepigeneticsの研究を行って参りました。また、平成17年からは、いわゆる「クボタショック」によりアスベストと中皮腫・肺癌発生との因果関係が大きな社会的な問題となって以降は、中皮腫の診断精度の向上に資する様々な病理学的・分子生物学的研究や、新規抗体療法に関する基礎的研究に特に力を入れて参りました。さらに、平成15年からは「中皮腫パネル」という中皮腫の臨床病理学的検討会で全例の病理検討・解説を行って参りました。特に難解例の診断法に関して国内外の中皮腫の病理診断に造詣の深い臨床医・病理医とともに討論を重ねる機会を得ることができたことは大変よい体験でしたが、今後も同会の世話人を継続して務めることになっております。

当面、教室には小生をいれて3名（講師：アマティア・ビシュワ・ジート、助教：櫛谷 桂）で研究室を立ち上げますが、病理学研究・病理診断学の魅力を十分に若い世代に伝承し、一人でも多くの大学院生を獲得し、さらに病理医の育成、広島・日本の医療界に貢献することのできる研究室にすることを第一の使命と考え、精進する所存です。また、昨今の技術革新によるインターネット経由での病理診断・コンサルテーションシステム開発にも力を入れ、少ない病理医で効率的に診断作業が行える環境を整えて参りたいと存じます。

これまでご支援いただいた多くの広島大学の先生方に御礼申し上げますと共に、今後とも変わらぬ、ご指導、ご鞭撻を下さいますようお願い申し上げます。



就任のご挨拶

吉子 裕二 医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 歯学分野 硬組織代謝生物学 教授

このたび、平成24年10月1日付をもちまして広島大学大学院医歯薬保健学研究院基礎生命科学部門 歯学分野（硬組織代謝生物学研究室）教授を拝命致しました。紙面をお借りして皆様にご挨拶申し上げます。

私は将来の食料危機に役に立つ研究を志し、25年前バイテクの潮流に乗って新潟大学（自然科学/農学）に学びました。実際は、細胞や組織の「形」の機能美に魅せられ、初志を翻して動物解剖学を専攻致しました。鳥類固有の「骨髓骨」の代謝を研究し、もっぱら切片の作製と電顕/光顕観察を日課としておりました。骨髓骨は代謝回転が早く、当時破骨細胞培養に汎用されておりましたが、骨はその「硬い」基質特性と長期間のダイナミクスが災いし、培養モデルの確立や分子レベルの解析が立ち後れておりました。その後、平成6年歯学部、平成15年からは弊研究室助教授（平成19年准教授）として勤務して参りました。

弊研究室は平成24年4月の医歯薬保健学研究院の設置にともない現在の名称となりましたが、昭和41年4月、今西市治先生をお迎えして開設された口腔解剖学（第一）講座が嚆矢となります。その後、重永凱男先生、次いで前田憲彦先生がご着任され、平成14年4月、研究室は口腔成長・発達生物学へと改組されました。その間、研究テーマは神経解剖、咀嚼、骨代謝へと変遷し、近年は形態、機能の両面から研究を進めております。当初はクリーンベンチも電気泳動もない大変厳しい環境で、qPCRはラベルした基質を手動で定量しておりました。前田先生とともに分析機器の確保に奔走したことを思い出します。学部教育につきましても、旧講座以来、主に口腔領域の解剖/組織学の講義・実習を、カリキュラム変更等により、現在は組織学全般、発生学も纏めて担当しております。

さて、志ある者は事竟に成ると申しますが、私は後ろ髪を引かれる思いで骨の研究を離れ、様々な分野・領域を経験して参りました。顧みますと、このときの経験はリサーチマネジメントなどのキャリアアップに大いに役立ったように思います。その後、トロント大学（解剖・細胞生物/分子遺伝学）Jane E. Aubinラボに留学し、以来骨形成が私のライフワークとなりました。今やリン代謝は骨代謝研究の主役の一つとなりましたが、私は幸運にもその先駆けの一翼を担うことができました。リン代謝調節の舞台は腎臓ですから、当時、Aubin博士は私がこの領域に心血を注ぐことに懐疑的でした。しかし、ほどなくしてFGF23が発見されると、リン代謝における骨の重要性が広く認知されようになりました。現在、弊研究室ではリン代謝の側面から骨（歯）と他臓器の連関を橋渡しする因子を検索しております。遺伝子改変による機能解析はもとより、オミックス解析に基づく病態との関連、創薬標的を目指し、研究室一丸となって力を注ぐ所存でございます。もとより浅識非才の身ではございますが、どうぞ皆様方の暖かいご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



平成24年度大学間連携共同教育推進事業「連携機能を活用した歯学教育高度化プログラム」

二川 浩樹 医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門 歯学分野 口腔生物工学 教授

本補助事業全体の目的は、歯科をとりまく社会環境、国民・学生ニーズが大きく変化している状況下で、現代の歯学教育で喫緊の課題となっている歯学教育の質の保証を目指した教育内容の改善を図り、歯学分野における人材育成に資することです。3大学は同時期に設置され、地方政令指定都市に位置する国立大学歯学部であり、各大学ともに歯科医師養成課程に加え、少子高齢化社会に対応した歯科衛生士+社会福祉士養成課程（新潟大学）、歯科技工士（東北大学）、歯科衛生士（含養護教諭）+歯科技工士（広島大学）といった他の歯科大学・歯学部にはない教育資源を有しています。また各大学は特色ある教育を実践しているものの、現代の歯学教育ニーズに対応すべき課題も有しています。このため、本補助事業では、これまで国立大学法人歯学部で構築・運営してきた教育研究ネットワーク機能を活用し、3大学の特色ある教育資源を提供し合い、特色ある歯学教育の補完により3大学歯学部教育の高度化を目指します。また、得られた成果の情報発信、厳格かつ客観的な相互評価により日本の歯学教育の標準化を図り、将来の歯科医療の質の保証に資するとともに、我が国の歯学教育の国際標準への適合を目指すものです。本目的達成のため、特色ある教育システムの提供・共有化、学生の交流実習、客観的教育評価法の開発・試行、情報発信による歯学教育の標準化の事業展開を行う予定です。

また、平成25年度からは、教員の相互乗り入れによる講義・実習を正規授業科目内にパイロットプログラムとして一部組み込み、実施し、アンケートなどによる評価による改善を行い、3年かけて共同教育科目をブラッシュアップし、完成させます。これを平成29年度より正規科目として導入し、歯学分野における人材養成機能の強化を図り、1. 臨床能力を具備した歯科医師の育成、2. 次代を担う歯学研究者の養成、3. 国際性と社会性の涵養、4. 評価と教育能力の開発を行うことを目的としています。

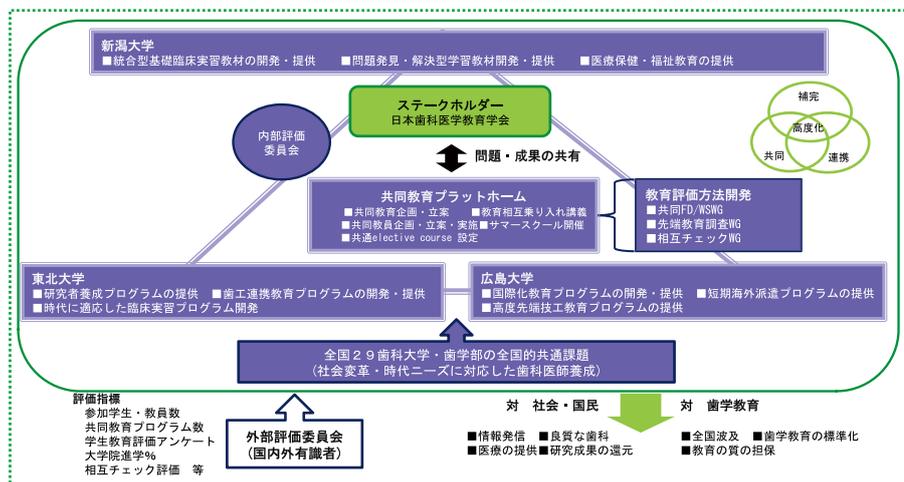
広島大学歯学部は、その教育面で特に秀でている■国際化教育プログラムの開発・提供 ■短期海外派遣プログラムの提供 ■高度

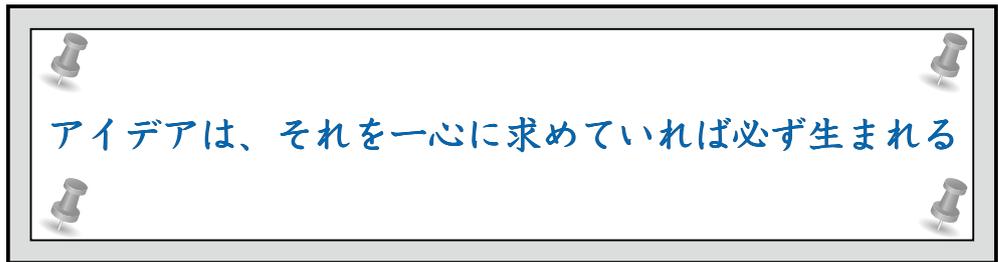
平成24年度「大学間連携共同教育推進事業」選定取組

先端技工教育プログラムの提供を行います。これらのプログラムは医歯薬保健学研究科でも行われているツイニングプログラム、頭脳循環プログラム、バイオデンティストや情報医工学プログラムとも密な関連性があり、研究科とも連携しながら発展をさせていきたいと考えています。

取組名称：連携機能を活用した歯学教育高度化プログラム
取組大学：新潟大学（代表校）、東北大学、広島大学

これまで構築・運用してきた教育・研究ネットワーク機能を活用し、3大学の特色ある教育資源を提供し合い、3大学の歯学教育の補完により高度化を目指すとともに、情報発信、相互評価により日本歯学教育の標準化を図り、将来の歯科医療の質の保証に資するとともに、我が国の歯学教育の国際標準化への適合を目指す。





越智 光夫 医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門 医学分野 整形外科学 教授

膝に幾つかの小さな切開を加え、その穴から膝の中に関節鏡や小さな曲がった器械を挿入し、靭帯の解剖学的付着部に穴をあけ、その人自身の腱を移植し、靭帯の代用とする。これがスポーツマンの膝の靭帯損傷に対して私が行っている手術です。簡単なようですが、長年やっても、いつもいつも完璧というわけではありません。手術が思うようにいった時は何物にも代えがたい高揚感に包まれ、外科医である喜びが実感されます。日本の整形外科医は、間違いなく欧米のどの国の先生方よりも手術がうまいことを、海外で望まれて手術見学をするにつけ、学会でlive surgeryを見るにつけ、常に確信します。押し並べてすべての外科領域で言えるのではないのでしょうか。何故でしょう。「箸文化の中で育っているため」。これが私の答えです。手先の教育をしようと思っているわけではありませんが、小さい時から知らず知らずのうちに手術に必要な手先領域の脳が強化され、メスの使い方、空間認識等が強化されているのではないのでしょうか。箸で茶碗の縁に残ったごはん粒ひとつを取れるのですから、手術の際のちょっとした操作はいとも簡単です。私達日本人の手先が器用なのは箸文化のおかげです。この技術で満足するだけでは日本の未来は明るくありませんが、紙面の都合上これ以上の記載は控えます。

一方、世界人口の0.2%に過ぎないユダヤ人のノーベル賞受賞者に占める比率は化学で16%、物理で25%、医学・生理学賞で27%です。ユダヤ人の思考教育方法はスパイラルシンキング、すなわち何に対しても疑問を持ち、それに対する答えが出そうになっても次に浮んだ疑問に対して再び思考し、際限なく考え続ける思考過程を幼児から学び実践している方法であり、これがノーベル賞受賞者の高い比率に寄与しているのは間違いありません。

グラッドウェルの1万時間セオリーではありませんが、やはり費やした時間に応じた果実しか手に入れることはできません。彼によると世界的なバイオリニスト、ピアニストが幼少期からその稽古にかけた時間の合計は1万時間を上回っており、6千時間の人はその成功しか手に入れていないと述べています。

新しいことを生み出すためにはどのようにすればいいのでしょうか。手術の際に浮んだ疑問に対する解を見つけるためには、アンテナを高く張り巡らし、整形外科領域のみならず多くの情報を収集し、上手に処理しながら、前後左右の空間軸や時系列を入れ替えながら辛抱強く、どこまでも考え続けることでしょう。まさしく、「アイデアは、それを一心に求めていれば必ず生まれる。」です。My mottoと言えほどのものかなと疑問に思っていましたら、とある本に、チャールズ チャップリンがすでに述べていました。



味覚研究の次の一歩

杉田 誠 医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 歯学分野 口腔生理学 教授

ヒトは塩味、酸味、甘味、苦味、うま味の5つを基本味として認識し、5基本味の組み合わせで食物の味を認知します。口腔内の味細胞に発現する味覚受容体により感知される味覚情報は、複数のニューロンを介し、脳内の各種ニューロンに投射され識別されます。さらに味覚感覚は、特定の神経経路を活性化することで、対照的な、嫌悪性・嗜好性の行動的反射や、快・不快の情動を惹起します。味覚は単純な5味質の情報として脳内に送られ識別されること、また対照的な行動と情動を（苦味感覚は嫌悪性の行動的反応と不快情動を、甘味／うま味感覚は嗜好性の行動的反応と快情動を）惹起することから、「感覚識別・認知」、「嫌悪性・嗜好性行動の惹起」、「快・不快情動の惹起」が、いかなる細胞機能のもとに遂行されるかを解明するために、非常に有効な感覚です。

2000年以降、味覚受容体遺伝子が次々に解明され、末梢（味細胞）における、味覚受容・識別機構が明らかとなってきました。苦味受容味細胞はT2Rファミリー（ヒトでは25種類）をいっせいに共発現して苦味を感知し、それとは異なる味細胞のうちでT1R3を発現する味細胞が、甘味・うま味を感知することが明らかにされました。そしてこれらの味覚受容体遺伝子を用いて、「味覚誘発行動・情動がいかん生成されるか」を発生工学的手法により解明する道が開かれました。我々はこれまでの研究で、トランスジェニックマウスの作製を通じて、苦味受容体（T2R）もしくは甘味／うま味受容体（T1R3）を発現する味細胞に、それぞれ選択的に経ニューロン性トレーサー（WGA-DsRed）を発現させました。そして味細胞から移行したWGA-DsRedにより標識されるニューロンの脳内局在を可視化することにより、苦味情報および甘味／うま味情報を伝導する脳内神経経路を解析しました。可視化された二種の神経経路構成ニューロンの異なりによって、苦味と甘味／うま味は脳内で識別され、苦味感覚は嫌悪性行動と不快情動を惹起し、甘味／うま味感覚は嗜好性行動と快情動を惹起することが示唆されました。

現在は、味覚経路を構成する個々のニューロンの種類や性質を探究しています。今後それらのニューロンのうちで特定のニューロンの活性を制御した際に生じる情動行動の変化を観察することで、味覚経路を構成する個々のニューロンの役割を解明することを計画しています。そして「好き（快）・嫌い（不快）の情動はどのように生じるのか」「好き・嫌いの変化はどのように生じるのか」を少しでも理解することを目指しています。また本研究から得られる知見を生かして、情動障害、味覚障害、異常嚥下・異常嘔吐、拒食・過食の治療をおこなうこと、糖分・塩分の取りすぎを制限すること、苦い薬を飲みやすくすること等ができるようにしていきたいと思っています。



文部科学大臣表彰 科学技術賞（研究部門）を受賞して

岡本 泰昌 医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門 医学分野 精神神経医科学 准教授
山脇 成人 医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門 医学分野 精神神経医科学 教授

この度、沖縄科学技術大学院大学学園・神経計算ユニット銅谷賢治グループリーダーとともに「精神疾患の病態解明に関する脳機能画像解析研究」に対して平成24年度文部科学大臣表彰科学技術賞（研究部門）を頂くことができました。この賞を頂けたのは、長年一緒に研究を続けてきました研究チームの力によるもので、チームを代表して頂いたものと考えております。また、私たちがこれまで研究活動を続けてこれたのも、医歯薬保健学研究院の先生方からの暖かいご支援があつてのことです。厚く御礼申し上げます。



紙面を借りて、今回の研究内容と受賞理由を簡単に紹介したいと思います。うつ病の中核症状は、抑うつ気分と興味・関心の喪失とされています。われわれは、機能的MRI（fMRI）を用いた脳機能画像解析により、短期・長期の将来報酬予測に関連する神経回路機構を解明し、脳内セロトニンが長期報酬予測に関与することを

証明しました。また、脳内セロトニンが低下しているうつ病では、長期報酬予測機能が障害され、抑うつ気分や無気力となることを報告しました。さらに、不快な身体イメージに関する脳機能解析から、「太る」などの不快な身体イメージに対する扁桃体活動に男女差があることを発見し、女性に摂食障害が好発する脳内基盤を明らかにしました。精神科医が計算神経科学者の理論を基に、脳機能画像解析技術を用いて、「こころ」のメカニズムとその障害であるうつ病や摂食障害などの精神疾患の病態を解明しました。さらに、精神医学と計算神経科学が連携した世界に先駆けた学際的研究で、精神医学研究におけるパラダイムシフトを呈示する研究であることが評価されました。

これまでの研究成果を受けて、本年度より、うつ病を対象とした新たな大型臨床研究（文部科学省脳科学研究推進プログラム）が広島市内を中心として始まり、学内では文部科学省新学術領域「精神機能の自己制御理解に基づく思春期の人間形成支援学」において「新入大学生を対象としてうつ病の発症予防研究」を開始しています。先生方のお力添えを頂き、何年か後には真の臨床に役立つ研究へと結実していきたいと思っております。引き続きのご指導、ご支援をよろしくお願い致します。



各種表彰等の受賞について 平成24年4月1日～平成24年9月30日

賞の名称	受賞者			受賞理由	授与者	授与年月日
	専攻等	講座等	氏名			
平成24年度 科学技術分野の 文部科学大臣表彰 科学技術賞 (研究部門)	副理事	(医療企画担当)	山脇 成人	精神疾患の病態解明に関する脳機能画像解析の研究が高く評価されたため。	文部科学大臣 平野 博文	平成24年 4月17日
	医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門	精神神経医学 (教授)				
	医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門	精神神経医学 (准教授)	岡本 泰昌			
他学外者1名						
第25回日本消化器 病学会奨励賞	医歯薬学総合研究科 創生医科学専攻	先進医療開発 科学講座 消化器・代謝 内科学 (博士課程4年)	長沖 祐子	研究発表は学術上貢献するところ大なるものと認められたため。	財団法人日本消化器 病学会理事長 菅野 健太郎	平成24年 4月19日
日本リウマチ学会 奨励賞	病院	脳・神経・ 精神診療科 (助教)	中佐 智幸	リウマチ学における研究、とくに関節リウマチ、変形性関節症の病態解析における研究の業績が評価されたため。	日本リウマチ学会 理事長 宮坂 信之	平成24年 4月26日
第50回 日本小児菌科学会 大会優秀発表賞	医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門	小児菌科学 (助教)	大原 紫	小児口腔内より分離したStreptococcus mutansの性状を検討した結果、酸性環境下での不溶性グルカン合成能及び耐酸性能に關与する遺伝子の mRNA 発現傾向や耐酸性能を把握することが齲蝕リスクを推定するうえで重要であることが示された。	第50回日本小児菌 科学会大会大会長 高木 裕三	平成24年 5月13日
2011年度 日本菌周病学会 奨励賞	医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門	健康増進歯学 (助教)	岩下 未咲	アンジオテンシンII受容体拮抗薬valsartanのインスリン抵抗性改善作用に関する研究Valsartan, independently of the AT 1 receptor or PPAR γ , suppresses the inflammatory response of macrophages and thereby improves insulin resistance in co-cultured adipocytes. (Am J Physiol Endo Metab) により菌周病学の発展に寄与する学術論文を発表した若手研究者と認定されたため。	特定非営利活動法人 日本菌周病学会 理事長 吉江 弘正	平成24年 5月18日
第53回 日本生化学会中国・ 四国支部例会 学術奨励賞	医歯薬学総合研究科 展開医科学専攻	病態制御医科学 講座整形外科学 (博士課程2年)	泉 聡太郎	第53回日本生化学会中国・四国支部例会において学術の向上に貢献する 優秀な発表を行ったため。	日本生化学会中国・ 四国支部支部長 森山 芳則	平成24年 5月18日
2011年度 日本菌周病学会 奨励賞	病院	口腔維持 修復歯科 (助教)	松田 真司	受賞者はBDNFを使用した新たな菌周組織再生療法の開発に携わり、組織再生に不可欠な血管新生に着目し、BDNFの血管新生促進のメカニズムを詳細に解明したことが、今後の菌周病学の発展に寄与すると評価され受賞した。	特定非営利活動法人 日本菌周病学会 理事長 吉江 弘正	平成24年 5月18日
第36回 日本口蓋裂学会 優秀ポスター賞	医歯薬学総合研究科 展開医科学専攻	顎口腔頸部 医科学講座 歯科矯正学 (博士課程2年)	沖 奈苗	顎骨骨髓由来未分化間葉系幹細胞を用いた顎裂閉鎖治療に関する研究発表について評価されたため。	一般社団法人 日本口蓋裂学会 理事長 川上 重彦	平成24年 5月25日
村上記念奨励賞	病院	遺伝子・ 細胞療法部門 (臨床検査技師)	小松 真由美	日本輸血・細胞治療学会が2011年度に行った認定輸血検査技師試験において、実技・筆記試験が総合的に成績優秀であったため。	日本輸血・細胞治療 学会村上記念基金 選考委員会代表者 高橋 孝喜	平成24年 5月26日
The Society for In Vitro Biology (SIVB) 2012 Fellow Award (In Vitro Biology学会 2012年フェロー賞)	理事・副学長	(社会産学連携・ 広報・情報担当)	岡本 哲治	In Vitro Biologyにおいて優れた業績を上げ、その学術社会貢献と人材育成が認められたため。	William J. Smith, President, Society for In Vitro Biology (In Vitro Biology 学会 会長 Dr. William J. Smith)	平成24年 6月5日
医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門	分子口腔医学・ 顎顔面外科学 (教授)					
社団法人 日本肝臓学会 織田賞	理事・副学長	(医療担当)	茶山 一彰	研究課題「肝炎ウイルス感染の病態解析と治療法の研究」これについて、特に卓越した研究課題と評価されたため。	社団法人日本肝臓 学会理事長 小池 和彦	平成24年 6月8日
	病院	(病院長)				
医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門	医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門	消化器・ 代謝内科学 (教授)				
第5回 日本蘇生科学 シンポジウム 優秀演題賞	医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門	歯科麻酔学 (助教)	清水 慶隆	心肺蘇生法における胸骨圧迫に関する研究発表について、学術性が高く評価されたため。	日本蘇生協会会長 岡田 和夫	平成24年 6月9日
日本TDM学会 「TDM研究優秀論文賞 (大日本住友製薬賞)」	薬学部	卒業生	重枝 二美子	日本TDM学会の学術振興の上で優れた業績を上げ、Therapeutic Drug Monitoringの発展に資すること大であると認められたため。(対象論文：TDM研究 28 (4) : 85-91, 2011)	日本TDM学会理事 長 上野 和行	平成24年 6月16日
JGES中国支部専修医 奨励賞	病院	医系総合診療科 (医科診療医)	岡本 真由美	第108回日本消化器内視鏡学会中国地方会において発表した演題が優秀と認められたため。	日本消化器内視鏡学 会中国支部支部長 田中 信治 第108回日本消化器 内視鏡学会 中国支部例会会長 吉原 正治	平成24年 7月1日

第25回 日本顎関節学会学術 大会ポスター発表 優秀賞	医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門	歯科矯正学 (助教)	藤田 正	下顎骨の成長発育に対する関節円板の重要な役割 に関する研究発表について、学術性・独創性・表 現法が高く評価されたため。	一般社団法人日本 顎関節学会理事長 久保田 英朗	平成24年 7月14日
日本歯科医学教育 学会国際学会研究 発表奨励賞	医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門	国際歯科医学 連携開発学 (特任助教)	岡 広子	15th Ottawa Conference (2012年3月)にお ける発表、"Innovation of educational program for undergraduate dentalstudents at Hiroshima University"(共同発表者：峯 裕一、ウディヤン トテジョサソソコ、内田 隆、丹根一夫、栗原 英見、高田 隆)が日本の歯科医学教育に関す る優れた発表であると認められたため。	日本歯科医学教育 学会理事長 俣木 志朗	平成24年 7月20日
日本プロテオーム 学会2012年大会 ポスター賞	医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門	医薬分子機能 科学 (准教授)	木下 英司	ポスター演題「改良型Phos-tag Biotin の開発と リン酸化プロテオミクスへの応用」の内容が特 に優秀であると認められたため。	日本プロテオーム学 会2012年大会大会長 高橋 信弘	平成24年 7月27日
平成24年 防災功労者 内閣総理大臣表彰	原爆放射線医科学 研究所	(所長) ゲノム障害医学 研究センター 部門 分子発がん制 御分野 (教授)	神谷 研二	福島原発事故に際し、地域の住民の安全・安心及 び放射線防護に大きな貢献をするとともに、住 民の健康を護るための活動など、災害時におけ る防災活動について顕著な功績があった者とし て内閣総理大臣から表彰された。	内閣総理大臣 野田 佳彦	平成24年 9月1日
中国・四国支部 第49回学術集会 最優秀演題	医歯薬学総合研究科 展開医科学専攻	病態情報医科学 講座法医学 (博士課程4年)	鳥越 愛子	麻酔科学会地方会で発表内容などが評価された ため。	公益社団法人日本麻酔 科学会理事長 森田 潔 中国・四国支部 第49回学術集会会長 横山 正尚	平成24年 9月8日
日本歯周病学会 学術賞	病院	口腔維持修復 歯科 (講師)	藤田 剛	歯肉上皮の細胞機能制御に着目した新規歯周病 予防法の開発の基礎的研究に関する一連の学術 論文を発表し、国際的に評価される多大の成果 を挙げたため。	特定非営利活動法人 日本歯周病学会 理事長 吉江 弘正	平成24年 9月23日
学術大会 優秀発表賞	病院	口腔健康発育 歯科 (歯科診療医)	林 英貴	「機能的矯正装置による下顎頭再生過程の組織学的 検討」第71回日本矯正歯科学会大会において上記 研究内容のポスター発表を行い、当該分野におい て高く評価されたため。	一般社団法人 日本矯正歯科学会 理事長 後藤滋巳	平成24年 9月27日
			他共同研究者6名			
学術大会 優秀発表賞	医歯薬学総合研究科 展開医科学専攻	顎口腔頸部 医科学講座 歯科矯正学 (博士課程3年)	角 明美	第71回日本矯正歯科学会大会において研究内容 の発表を行い、当該研究分野において高く評価 されたため。	一般社団法人 日本矯正歯科学会 理事長 後藤滋巳	平成24年 9月28日
			他共同研究者8名			
日本矯正歯科学会 学術奨励賞	病院	口腔健康発育 歯科 (歯科診療医)	松田 弥生	「矯正歯科治療に伴う歯根吸収と宿主要因の関 連性に関する臨床調査」Orthodontic Waves- Japanese Edition 70巻1号Page21-31 (2011.02) 2011年に発表した上記研究の原著論文が、歯科 矯正学分野において、学術上、臨床上優れたも のであると評価されたため。	一般社団法人 日本矯正歯科学会 理事長 後藤滋巳	平成24年 9月28日



英国ケンブリッジ大学留学便り

細井 徹 医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門 薬学分野 治療薬効学 講師

私は現在、ケンブリッジ大学 Institute of Metabolic Science (IMS) の David Ron 研究室に留学しております。ケンブリッジ大学は、ロンドンから北へ電車で約1時間の人口11万人程の小さな町に位置する総合大学で、ノーベル賞受賞者などの著名な人材を数多く輩出しています。大学構内や町のいたるところには、中世の華麗な建築物が保存されており、万有引力の法則を発見したニュートンの肖像やDNAの二重らせん構造を発見したワトソンとクリックが議論を行ったという逸話の残る店なども点在しており、歴史が感じられます。気候は夏でも暑過ぎず、図書館、博物館、公園も充実しており、勉学に励むのに最良の環境が整えられております。また、家は一軒家が主流で、それぞれの家が花や庭木などを熱心に手入れして趣向を凝らした庭を有しており、道を歩くだけでのどかなイングリッシュガーデンを楽しめます。

David Ron 教授は、小胞体関連遺伝子を同定、解析され、糖尿病の原因の一端として小胞体ストレスの関与を明らかにした、著名な先生です。当研究室では主に、小胞体ストレスの分子メカニズムを解明することにより病態の原因解明を手がけており、私も関連テーマで現在研究を進めているところです。研究所に初めて行って驚いたのは、研究室ごとの部屋はなく、すべての研究室の人は、一つの大きな部屋で実験を行っていたことです。従って、隣の研究室のメンバーともごく自然に交流が深まり、研究の相談から、他愛もない会話まで気軽にできるような環境にあります。このような環境のためか、多様な研究室間での共同研究も多く見受けられるように感じます。さらに各種実験機器も、実験効率が上がるように配置されており、とても良い研究環境であると言えます。また、イギリス人だけでなく、ロシア、インド、中国、フランス、イタリア、オランダ、イスラエル、ブルガリア等、実に多くの国から研究者が集まっており、国際色豊かな研究所だと言えると思います。もしかしたら、このような環境が、独創的な研究やアイデアを生む所以かもしれません。研究室のセミナーも充実しており、とことん議論を重ね、様々な視点からじっくり緻密に研究を展開していく姿勢が感じられます。したがって、研究の進め方、考え方について、学ぶことが多く、視野が広がるように感じており、毎日充実した日々を過ごしております。

最後になりましたが、このような留学の機会を与えて頂き貴重な経験をさせてくださっている小澤孝一郎教授ならびに関係者の皆様方に、感謝致しております。



私の所属するIMS外観



CHEST 2011 (ホノルル) に参加して

見前 隆洋 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 創生医科学専攻 腫瘍外科研究室 (当時)
原爆放射線医学研究所 放射線災害医療研究センター 腫瘍外科研究分野 助教

この度私は2011年10月22日から10月26日にHONOLULUで開催されましたCHEST 2011に参加して参りました。ポスター発表ではありましたが、私にとっては初めての海外での学会発表経験であり、やや緊張を感じながら臨みました。発表のタイトルは「Steroid Receptor expression in thymomas and thymic carcinoma」で、胸腺腫および胸腺癌症例におけるグルココルチコイド受容体 (GR)、エストロゲン受容体 (ER α 、ER β)、プロゲステロン受容体 (PpR-A)、アンドロゲン受容体 (AR) の発現について手術標本を用いた免疫組織学的染色にて調べ、臨床病理学的背景とその発現との関係を検討した内容です。上記に列挙したステロイド受容体の中でもGRについての報告はほとんどなく、GRの高発現の有無と胸腺腫瘍の予後が相関しているという報告は初めてのもので、実際のポスター発表時には予後因子としての可能性について意見交換ができ、大変有意義な発表となりました。また、今回の症例では胸腺癌症例数が30を超えており、比較的稀な腫瘍であるため、これまで30例を超えるような症例数でまとめたものは我々の知るところでは皆無であり、そういう意味で興味を持ち、写真を撮っていかれる参加者もいました。今後は更に意義のある研究に繋がる努力をしたいと思える経験となりました。



16th Congress of the Asian Pacific Society of Respirioly (シャンハイ)に参加して

Andika Chandra Putra 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 創生医科学専攻
放射線医療開発研究室

The 16th Congress of the Asian Pacific Society of Respirioly (APSR) held in Shanghai, China on November 3-6, 2011, attracted nearly 3000 participants from 21 regions of respirology community around the world. The congress organized by the Chinese Society for Respiratory Diseases and conjunction with Shanghai Medical Association. This congress provided a forum for clinicians, researchers, policy makers to discuss emerging issues, share ideas and knowledge in the respiratory field.

I had oral presentation with title "Exploration of the genes associated with cellular immortalization in lung cancer". In this presentation, I talked about the way to identify additional molecules involved in indefinite life span of cancer cells and tried to explore the genes that are specifically and commonly overexpressed in immortal cancer cell lines compared to normal cells. The final goal of this research is to find novel anti-immortalization drug.

The happiest part of this congress was my abstract research chosen as the best research and APSR committee selected me to receive as Young Investigator award. It is so proud since selected from over 1000 submitted abstracts. I dedicate this award to Dr.Keiko Hiyama and Dr.Keiji Tanimoto for their supervision. I also thank to Prof.Yoshio Hosoi, Prof. Toshiya Inaba, Prof.Nobuoki Kohno, Prof.Eiso Hiyama and all members of Department of Radiation Medicine for their continuous support and guidance on my researches. Other important thing is I also appreciate support from Hiroshima University.



Neuroscience 2011 (ワシントンD.C.)に参加して

松本 康貴 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 創生医科学専攻 精神神経医科学研究室

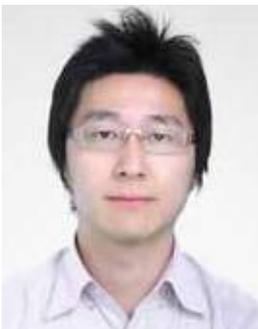
2011年11月12日から11月16日まで、アメリカ合衆国 ワシントンD.C. (Washington Convention Center) において開催されましたNeuroscience 2011 (Society for Neuroscience 41st Annual Meeting) へ参加し、ポスター発表をして参りました。海外の学会には初めて参加しましたが、参加者数3万人を超える大規模の学会であり、様々な分野の研究者が世界中から集まっており、コンベンション・センターの中は大変賑わっていてその迫力に圧倒されそうでした。

中は大変賑わっていてその迫力に圧倒されそうでした。

私の発表にも興味を持って質問してくださる研究者の方がいて、質疑応答の中から今後の研究の課題も見つかりました。また、色々な企業からの最新の研究機器も展示されており、刺激になりました。

これは論文を読んでも分かることですが、発表や質疑応答をする中で、言葉は違ってても着眼点や発想や考え方は大きく違うことが無く、研究を行う事で世界の人々と研究の話で繋がることのできるという喜びを覚えました。

学会中は緊張しましたが、参加して良かったと感じています。このような機会を与えてくださった山脇成人先生、森信繁先生をはじめ、皆様に感謝します。この場を借りて御礼申し上げます。



Neuroscience 2011 (ワシントンD.C.)に参加して

土肥 栄祐 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 創生医科学専攻 神経薬理学研究室(当時) 病院 脳・神経・精神診療科 医科診療医

2011年11月12日から11月16日にかけてアメリカのワシントンD.C.で開催されましたNeuroscience 2011 (Society for Neuroscience 41st Annual Meeting) へ参加し、『Contribution of chaperone-mediated autophagy to the survival of cells under hypoxic conditions』という題名でシャペロン介在性オートファジー (CMA) と脳虚血に関するポスター発表を行いました。オートファジー領域の中でもCMAの研究

者は少ない為、今回は研究者間でのディスカッションと交流を目的に、大規模(参加人数は約3万人)かつ学際的な学会として知られるNeuroscienceで発表を行いました。

学会全日程で見てもオートファジー関連の発表は10数個ほどしか演題は無かったのですが、神経変性疾患、脳虚血など幅広い領域の研究者から多くの質問を受けました。特に、一細胞レベルでのシャペロン介在性オートファジーの活性評価法に関して説明を求められる機会が多く、この領域への関心の高さや研究方法の困難さを実感致しました。さらに、LAMP-2Aの元の遺伝子であるLAMP-2のKOマウスの解析を行っている研究者とも交流を持つ機会を得て、その中からKOマウスの供与に関し相談することが出来ました。その他、神経細胞内の局所における物質輸送やタンパク合成/分解に関する発表から、今後の研究に繋がるアイデアを得たことを含め、大変有意義な学会となりました。

今回はこのような有意義な機会を与えて頂き、諸先生方、本学大学院生海外発表支援関係者の皆様には心より御礼申し上げます。



16th International Congress of World Muscle Society(アルマンシル)に参加して

倉重 毅志 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 創生医科学専攻 脳神経内科学研究室

2011年10月18日から22日にかけてポルトガル南部のAlmancilで開催された16th International Congress of World Muscle Societyに参加させていただきました。この学会は世界中の筋疾患を研究する研究者が一堂に会する学会で、発表も基礎から臨床まで多岐にわたっており、最近の大きな研究成果や大規模な臨床試験の成果など、自分の専門外の分野についても多くの内容を学ぶことができました。この学会ではポスター発表の時間はお互いに英語でフリーなディスカッションをするようになっており、その中で優秀な演題がadditional oral presentationに選ばれることから、他の国際学会と比較しても活発な議論がされていました。

私は成人の難治性筋疾患である封入体筋炎に關与するautophagy関連分子の分子病理学的検索に關してポスターで発表してきました。封入体筋炎は高齢化と共に増加してきており、世界中で病態解明にむけた努力がされています。今回は日本の先生の外に、イギリス、韓国、チリの先生方から多くの質問や率直な意見をいただきました。これらの先生方のご意見も参考に、さらに研究を進めていきたいと思ひます。

最後に、このような機会を与えてくださいました松本昌泰教授に深く感謝申し上げます。



The 7th Korea-Japan conference(ウルサン)に参加して

奥村 俊哉 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 創生医科学専攻 歯科薬理学研究室(当時) 病院 口腔再建外科 歯科診療医

この度、大学院生海外発表の御支援を頂き、平成24年2月17日から18日まで韓国の蔚山市にありますUlsan National Institute of Science and Technology (UNIST)で開催されましたThe 7th Korea-Japan conferenceに参加して参りましたのでご報告させていただきます。今回、私はAnalysis of PRIP roles in lipolysisという演題で口頭発表を行いました。

私の所属している研究グループでは、IP3に結合する分子として見いだされた新規分子PRIPの機能解明を中心に研究しており、私は脂質代謝におけるこの分子の役割というテーマで実験を行っています。今回、その成果を報告させていただきました。

私にとって海外での学会発表、英語でのプレゼンは初めての経験であり、とても緊張しました。至らない点もございましたが、何とか質疑応答もこなす事ができ、無事に終える事ができました。海外発表を経験できました事は、私にとって非常に大きな収穫でした。

最後になりますが、このような機会を与えて下さいました先生方、ならびにこの度の参加を支援して頂きました医歯薬学総合研究科に心より御礼申し上げます。

第19回 UEGW (ストックホルム) に参加して



松尾 泰治 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 創生医科学専攻 分子病態制御内科学研究室(当時)
病院 内視鏡診療科 医科診療医

私は平成23年10月22日から26日にスウェーデンのストックホルムで開催された19th United European Gastroenterology Week (UEGW 2011)に参加しました。日本より少し肌寒い気候であるも、天気にも恵まれ、会場は人々の活気に満ち溢れ華やいていました。

私の発表は10月24日のポスターセッションで、ヘリコバクター・ピロリ除菌療法後に発見される胃癌の特性についての報告でした。日本において除菌療法は消化性潰瘍への適応から始まり、2010年には適応拡大され、今後の実地診療において除菌後に胃癌を診断する機会が増えてくることが予想されます。早期胃癌内視鏡治療後に除菌療法を施行後3年間の観察で2次癌発生が1/3に低下したと日本からの報告がLancetでされ、除菌療法に対する関心が高まってきており、今回は、除菌療法後に発生する1次癌の発生をみたもので、除菌後に発見される胃癌の臨床病理学的な特性を通常のピロリ陽性胃癌と比較検討し、考察を交え発表しました。学会会場では、除菌後の胃癌に対して質問や意見交換ができ、さまざまな興味深い発表が行われ大変刺激を受けました。今後、研究のみならず、臨床にも活かしていきたいです。最後になりましたが、私に海外発表という貴重な経験をする機会を与えてくださった諸先生方に心より感謝いたします。

アジア太平洋肝臓学会議 (タイペイ) に参加して



村上 英介 医歯薬学総合研究科 博士課程3年 創生医科学専攻
消化器・代謝内科学研究室

アジア太平洋肝臓学会議 (Asian Pacific Association for the Study of the Liver) は、台湾の台北市で、2012年2月16日から19日まで4日間にわたって開催されました。アジア各国の肝臓学の専門家によるプレナリーセッションでは、各国の診療状況や治療方針の微妙な違いを鑑みることができました。私は、「in vitro、in vivo実験モデルを用いた薬剤耐性B型肝炎ウイルスに対する核酸アナログ製剤の抗ウイルス効果」という演題名でポスター発表を行いました。B型慢性肝炎に対する治療として核酸アナログ製剤の長期投与が行われ、非常に良好な治療成績が得られている一方で、長期投与に伴う薬剤耐性ウイルスの出現が大きな問題となっています。以前より、当研究室では、マウスの肝臓がヒトの肝細胞に置換されたヒト肝細胞キメラマウスを用いた実験系を構築しており、本発表では、培養細胞から産生された薬剤耐性変異を有するB型肝炎ウイルス粒子を同キメラマウスに感染させた後、核酸アナログ製剤を投与することで、薬剤耐性変異と各種核酸アナログ製剤の抗ウイルス効果について報告しました。欧州の研究者からは、実験内容についての専門的な質問のほか、共同研究の提案などもあり、臨床への研究成果還元を念頭においた研究の発展が必要であると感じました。



第19回 UEGW (ストックホルム) に参加して

薩地 啓市 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 創生医科学専攻
分子病態制御内科学研究室 (当時)

私は平成23年10月22日から26日にかけてスウェーデンのストックホルムで開催された19th United European Gastroenterology Weekに参加させていただき、ポスター発表をさせていただきました。今回、滞在したストックホルムは広島と比べ非常に寒い気候でしたが、学会会場は世界から参加した消化器医によって熱気に包まれていました。

私の発表は、大腸拡大内視鏡画像における大腸腫瘍の定量分析に関する報告です。これは、現在、大腸腫瘍性病変の質的診断や深達度診断において、大腸拡大内視鏡によるpit pattern診断は確立され日常診療に用いられていますが、その診断は、内視鏡医の主観で診断されており、より客観的な評価方法の確立が望まれることが背景にあります。今回、テクスチャ解析とscale-invariant feature transform (SIFT) 特徴量を用いた判別分析から大腸腫瘍性病変のpit の定量化を行い、pit pattern診断および病理組織診断との関係が明らかとなったことを報告しました。学会会場では、海外の方からの質問を受け、内視鏡画像における画像解析の関心の高さを肌で感じることができ、今後の研究の発展に生かせると考えました。

最後に、このような貴重な経験をすることができ、ご指導いただいた先生方、ご支援いただいた医歯薬学総合研究科に感謝申し上げます。



第3回World Implant Orthodontic Conference(ヴェローナ)に参加して

椿本 昇子 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 展開医科学専攻 歯科矯正学研究室

イタリアのヴェローナで開催された、第3回World Implant Orthodontic Conference (2011年10月6日～8日)に参加し、「Assessment of primary stability of mini-screw by use of a Periotest[®]」という演題でポスター発表を行いました。

現在、矯正歯科治療において、新たな顎内固定源としてチタン合金製の矯正歯科用インプラント(ミニスクリュー)を使用する症例は数多く、当科では、いち早くこの手法を取り入れ治療を行っています。これらミニスクリューの安全な植立方法の確立に関して、当科で行われてきた一連の動物実験および臨床調査結果は、国内外で高く評価されており、多くの学術大会および専門雑誌で紹介されています。

今回は、「ミニスクリューの初期安定性についてペリオテストを用いた臨床調査結果」について報告しました。大会期間中の質疑応答を通して、本発表が国外でも非常に注目を集めていることを改めて実感することができました。また、同行した砂川先生は優秀ポスター賞を受賞することとなり、より視覚的に分かりやすいポスターの作り方など、プレゼンテーションの方法についても勉強することができました。

今回このような貴重な機会を与えてくださった、丹根教授をはじめ関係の先生方に深くお礼申し上げます。



American Heart Association(オーランド)に参加して

藤村 憲宗 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 展開医科学専攻
循環器内科学研究室 (当時)

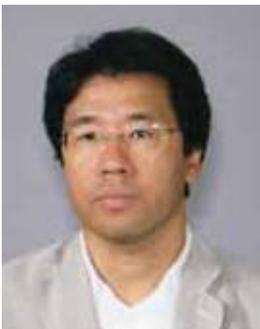
今回、2011年11月12日から11月16日まで米国フロリダ州オーランドで開催された American Heart Association 2012 に参加できたことは、私にとってとても刺激的で感銘を受ける機会でした。日本の学会とは異なり会場は非常に広く、その規模も大きなものでした。私自身今回で2度目になる海外学会への参加でしたが、1度目よりも強い印象を受けました。

発表の内容に関しても、循環器分野はもちろんのこと、多方面にわたる基礎的な内容の発表など興味深いものを目の当たりにすることができ、新たな知見を得る非常によい機会でした。

ちなみに私はポスター形式での発表でした。内容は選択的ミネラルコルチコイドレセプターブロッカーであるエプレレノンが高血圧患者の血管内皮機能を改善し白血球のRho-associated kinases (ROCKs) 活性を抑制するという内容で、エプレレノンによる新たな心血管疾患予防の可能性を示唆するというものでした。発表に対していくつかの質問を受けましたが、何とか理解していただける返答ができたと思っております。しかし英語が堪能であれば海外学会はさらに刺激的で、充実したものになると思いました。

今回は非常によい機会に恵まれ、海外学会に参加させていただくことができましたが、また次に参加できる機会があれば今回以上に有意義な時間にしたいと強く感じました。

最後になりましたが、海外での発表という貴重な機会を与えていただきましたことを心より御礼申し上げます。



APDW(Asian Pacific Digestive Week)(シンガポール)に参加して

山本 理哉 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 展開医科学専攻 総合診療医学研究室

この度私は平成23年10月1日から4日にかけて、シンガポールで開催された Asian Pacific Digestive Week (APDW) に参加して参りました。Suntec Singapore International Convention & Exhibition Centre という巨大な会場で開催されましたが、その広い会場に世界各国、特にアジア各国から多数の参加者が集まり、各ホールで発表や議論が活発に行われていました。

私はポスター発表でしたが、海外での発表は初めてで質疑応答もできるか不安でした。発表前に熟読している人もおられ緊張はありましたが、発表者の中にもピンからキリまでいると開き直って発表を待ちました。私の演題は“Oxidative stress plays a role in the development and progression of hepatic lesion in the hypertensive status: A basic study in a steatohepatitis model utilizing spontaneously hypertensive rats (SHR)”で、内容は自然発症高血圧ラット (SHR) に脂肪肝食餌負荷であるコリン欠乏食を負荷すると酸化ストレスを介して脂肪肝が増悪し、さらに長期に投与することによって線維化が促進されるという内容でした。

発表の一番の成果は、発表そのものより、発表する機会を得てそれまで実験やデータ解析していったことの意味をポスター製作を通じて、自分の頭の中で整理できたこととまだこれから何が足りないかを知らしめてくれたことだと思います。

最後になりましたが、本学会への発表の機会を与えて下さった田妻教授をはじめ関係の先生方、医歯薬学総合研究科に深く御礼申し上げます。



第53回米国血液学会（サンディエゴ）に参加して

溝口 洋子 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 展開医科学専攻 小児科学研究室
病院 造血器診療科 クリニカル・スタッフ

この度私は平成23年12月10日から13日にかけて、アメリカ合衆国サンディエゴで開催された第53回米国血液学会に参加し、日本における先天性好中球減少症（SCN）の臨床及び遺伝学的特徴についてポスター発表を行いました。

SCNは好中球減少のため、小児期より細菌や真菌に対する易感染性の原因となり、感染症の反復と同時に感染の重症化、慢性化が認められ、治療に難渋する場合があります。

G-CSF製剤の投与により感染症に対しての生命予後は改善されましたが、長期のG-CSF投与により骨髄異形成症候群（MDS）や白血病の合併が報告されており、近年では根治療法として造血幹細胞移植が行われています。今回私たちは厚生労働省の事業として日本におけるSCNについて全国調査を行い、集積した46例の患者について、臨床的特徴、遺伝子異常、治療、悪性疾患の合併の有無や移植について解析を行いました。日本におけるSCNのまとまった報告は初めてであり、アメリカやドイツの専門家より質問や提言を受け、毎年12月にSCNIR（Severe Congenital Neutropenia International Registry）が行っているシンポジウムへ発表の招待を受けました。また現在、各国でSCN由来iPS細胞が作成され研究が進んでおり、研究に関するdiscussionも行うことができ、大変刺激を受け、有意義で実りある学会となりました。

最後になりましたが、本学会への発表の機会を与えて下さった小林正夫教授をはじめ関係の先生方、医歯薬学総合研究科に深く御礼申し上げます。



Orthopaedic Research Society 2012(サンフランシスコ)に参加して

藤岡 悠樹 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 展開医科学専攻 整形外科研究室

平成24年2月4日から7日までアメリカのサンフランシスコで開催された、Orthopaedic Research Society 2012（ORS 2012）に参加し、「Human CD133 positive cells with a magnetic delivery system promote functional recovery in rat spinal cord injury」の演題で発表、討論しました。

ORSは整形外科領域の基礎学会では世界最大の学会です。初期の目的は、上記演題について活発に討論を行い、脊髄損傷に対する幹・前駆細胞移植治療に寄与する知見を得ることでした。

私の演題は、学会の若手奨励賞であるNew Investor Recognition Award候補の30演題に選定され、発表はoralのみならずposter presentationならびにrefereeによる諮問を受けるという1演題で3度おいしい？1日がかりの戦いとなりました。

ノミネートのためか参加者のresponseは良好で、多くの質問を受け討議しました。そのなかで新たな研究につながるsuggestionを得ることができ、当初の目的は達成できたものと考えます。最終的に受賞には至りませんでしたが、異なる研究分野の若手同士で情報交換ができたことは非常に刺激的でした。

このような機会を与えてくれました本プログラムに心より感謝いたします。



AHA Scientific Sessions 2011(オランダ)に参加して

梶原 賢太 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 展開医科学専攻 循環器内科学研究室

2011年11月13日から16日まで、アメリカ合衆国フロリダ州オーランドで開催されたAmerican Heart Association Scientific Sessions 2011に参加してきました。世界中から循環器医が集う（主催者発表で3万人以上）会議だけあり、会場のオレンジカウンティコンベンションセンターは巨大で、圧倒されました。会議は、7つのセッションに分かれており、世界中の多くの有名な演者が、彼らの臨床および基礎科学に関する最新の仕事を持ってきて発表していました。私は自身の専門である不整脈部門の発表を主に聞いていました。大規模臨床試験を発表するLate breaking trialでは、MANTRA-AF試験という試験が発表されており、薬物治療と、カテーテルアブレーションの結果を2年にわたり、追跡調査した研究でカテーテルアブレーションが洞調律維持に優れるという結果でした。海外でも症候性の発作性心房細動に対しては、積極的にカテーテルアブレーションを行うようになってきているようです。私自身の研究は長期持続性心房細動における細動波の波高とマルチスライスCTで評価した左心房のリモデリングの関連性について述べたものですが、他の会議参加者と今後の検討の発展につながる議論を行えたことは非常に有益でありました。今後も、他の研究者に負けぬように努力を続けていきたいです。



The 6th CCTCNM-KSP-JSP Joint Symposium on Pharmacognosy(シンヨウ)に参加して

上村 有加 医歯薬学総合研究科 博士課程後期2年 薬学専攻 生薬学研究室

今回参加しましたThe 6th CCTCNM-KSP-JSP Joint Symposium on Pharmacognosy (2010.10.20-22, Shenyang, PRC) は日中韓三カ国の生薬学会が毎年合同で開催するもので、今回は中国の瀋陽で開催されました。シンポジウムでは、現在取り組んでいる新規有用化合物の単離を目的としたニシキギ科植物の成分研究において得られた研究成果をポスターにて発表し、また、各国の先生方の講演を聞く機会を得ました。ポスター発表では、語学力の低さを痛感しつつも、質問者一人一人と時間をかけて深く議論し、意見交換をすることができました。また、運営を担当してくれていた瀋陽薬科大学の学生を中心とする他国の学生と、研究内容のみならず大学のカリキュラム等についても話をすることができました。同じ分野でも研究室や大学によって取り組み方が異なることは日本国内でもよくあることですが、他国とではその根底にある文化・歴史の違いも加わって、その差はさらに大きなものであることが少なくありません。しかしながら共通点もやはり存在し、そのような類似点・相違点について意見交換できたことで、他国の研究や文化についてより深く理解することができました。またそれは自らの研究を見直すよいきっかけともなり、今後さらなる研究を行う上で、広い視野で物事を捉え、考えていく手助けになったとも感じています。



NEUROSCIENCE2011 (ワシントン D.C.)に参加して

中村 庸輝 医歯薬学総合研究科 博士課程後期3年 薬学専攻 薬効解析科学研究室

私は国際学会発表支援制度により、2011年11月12日から16日までアメリカのワシントンD.C.にて開催されたNEUROSCIENCE 2011（北米神経科学学会 2011）に参加いたしました。この学会は中枢神経系の研究を行っている研究者の交流や学術文化発展に寄与することを目的としており、全世界に4万人以上の会員を抱える、神経科学分野における世界最大の学会であります。学会会場であるWashington convention centerはとても広く国内学会との規模の違いに驚かされました。

私は今回TRPA1受容体活性化時のサブスタンスP遊離機構とその役割についてポスター発表をさせて頂いたのですが、その場においても有意義な時間を過ごすことができました。海外発表は私にとって初めての経験でしたが、国内学会とは一味違った緊張感のもとでポスター発表を行うことができ、さらに世界の研究者と自身の研究に関してディスカッションできたことは非常に貴重な経験でした。私の発表に来て頂いた方々には、私のつたない英語に対し理解を示そうとくださったことなど様々なことに感謝するとともに、私もディスカッションを通して、研究のここのみならず、英語における表現方法など数々のことを学ばせて頂きました。

最後になりましたが、国際学会への参加の機会を与えて下さると同時に支援していただいた先生方、海外発表支援制度に心より深く感謝いたします。これからも多くの学生がこのような支援制度の機会に恵まれ、国際的な場で活躍できることを願います。



Digestive Disease Week (DDW) 2012 (サンディエゴ)に参加して

永井 健太 医歯薬学総合研究科 博士課程3年 創生医科学専攻
 消化器・代謝内科学研究室

今回、私はアメリカのサンディエゴで、平成24年5月19日から22日にかけて開催された、Digestive Disease Week (DDW) 2012に参加させて頂きました。

私は、“潰瘍性大腸炎に対する血球成分吸着・除去療法後による粘膜治癒の意義”について同学会で発表を行ってきました。血球成分吸着・除去療法 (CAP: cytopheresis) は、日本で開発された潰瘍性大腸炎に対する有効な治療法であり、日本から世界に発信している治療法です。ただ、全大腸内視鏡によるCAP療法後の粘膜治癒評価を行った報告は少なく、評価方法も各施設により一定していません。このような背景をもとに、CAP療法前後で大腸内視鏡が施行された潰瘍性大腸炎患者において、粘膜治癒効果と臨床的意義について検討を行いました。評価方法は我々が独自に開発した方法で行いました。今回の検討では、CAP療法前後で臨床症状及び内視鏡所見ともに有意差をもって改善しておりました。またCAP療法後の粘膜治癒群は、その後の再燃率が粘膜非治癒群と比較し有意に低いという結果を得ました。以上の検討より、CAP療法において潰瘍性大腸炎の寛解維持を目指すには、内視鏡的完全粘膜治癒を目標とした治療戦略を考慮すべきであると報告しました。また学会会場では、海外の方との交流を通じ、潰瘍性大腸炎に関する最先端の臨床及び基礎研究に触れることができました。

最後に、このような発表の機会を与えた下さった先生方及び医歯薬学総合研究科に深く御礼申し上げます。



Society for the Study of Inborn Errors of Metabolism Annual Symposium 2012(バーミンガム)に参加して

原 圭一 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 展開医科学専攻 小児科学研究室

2012年9月4日より4日間、英国バーミンガム市で開催されました、Society for the Study of Inborn Errors of Metabolism (SSIEM) Annual Symposium 2012に参加して参りました。バーミンガムはロンドンの北160kmにある英国第二の都市です。北緯52度は樺太とほぼ同じで、夜8時を過ぎてもまだ外は明るいのですが、少し肌寒い陽気でありました。

SSIEMは「欧州先天代謝異常学会」と訳されておりますが、毎年世界中の先天代謝異常疾患の研究、臨床に関わる研究者が参加します。今年度は口演で約70、ポスターで約500の発表がありました。欧米の学会に参加させていただいたのは初めてでして、参加者のラフな服装、ジョークも上手に取り入れた口演（面白さはわかりませんが）、時間進行の正確なことが印象的でありました。

私の発表は、本邦で見つかった中鎖アシルCoAデヒドロゲナーゼ欠損症患者における遺伝子変異とその酵素活性についてです。本症は先天的な脂肪酸代謝異常症で、乳児期に発熱などで飢餓時間が遷延すると突然死をきたす疾患です。新生児マススクリーニングの広がりにより、本邦でも発症前に診断されるようになってきましたが、その遺伝子変異、変異酵素の特徴は欧米例とは全く異なっております。いくつか質問もいただき、論文発表に生かせる有意義な討論となりました。



European Society of Cardiology Heart Failure Congress 2012(ベオグラード)に参加して

木阪 智彦 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 展開医科学専攻 循環器内科学研究室

2012年5月16日から24日にかけて開催されたEuropean Society of Cardiology Heart Failure Congress 2012において、心不全の予後予測因子とされながら不明な点も多い、運動中の呼吸性変動Exercise Oscillatory Ventilation (EOV) について報告する機会を頂きました。日常臨床で遭遇した運動中の呼吸変容についての疑問が出発点となり、EOVに注目することで心不全の病態に迫り再発予防につながる

効果的な介入が出来るのではと考えました。会場では、重症例ほどEOV発現が多く予後予測マーカーとしても有用であること、運動と陽圧換気療法で改善する可能性を示した所、フロアから実りあるコメントがありました。臨床上の疑問点を形にでき論文文化にむけ前進したと考えます。

本検討は、2010年4月の心臓リハビリテーション施設認定以来、蓄積された心肺運動負荷検査データが、2012年1月に木原康樹センター長のもと開設された心不全センターに集まってきたものを解析しました。循環器内科・心臓血管外科・リハビリテーション科・看護部・薬剤部・検査科・栄養科の協力のもと日頃から患者さん1人1人に合わせた集学的チーム医療を行う中で得られたものです。報告に至りましたのも多くの方々のお力添えがあったおかげと感謝しています。稿を終えるにあたり関係各位皆様に心からの謝意を表します。



The 1st China International Workshop of Pediatric Dentistry(中国)に参加して

胡 軼群 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 展開医科学専攻 小児歯科学研究室(当時)

この度、大学院生海外発表支援により、2012年6月29日から30日にかけて中国の西安で開催された The 1st China International Workshop of Pediatric Dentistry に参加させて頂きました。本学会は初めて中国で開催されたもので、中国と全世界の小児歯科医が互いに交流するプラットフォームを提供することができたいへん意義の大きい国際学会でした。西安は中国古代の諸王朝の都となった長安で千年の歴史を有す古都であり、日本と深い友好関係があります。今回もたくさんの日本人が参加しました。

私の実験を行っている本学細菌学研究室では、これまで齲蝕原因菌だけ選択的に溶かす酵素“Automutanolysin (Aml)”を発見し齲蝕予防への可能性を追究してきました。今回、私たちは、ラット齲蝕原因菌感染モデルを用いて *in vivo* における Aml の齲蝕抑制効果を評価し“EFFECTS OF AUTOMUTANOLYSIN (AML) ON STREPTOCOCCUS MUTANS INFECTION IN RATS” という演題でポスター発表を行いました。

私は、初めての小児歯科の国際学会への参加だったのですが、世界中から小児歯科学の研究者が集まり講演が行われ、様々な背景を持つ研究者の議論を聞いて、国際的な研究の動向を把握することができました。また今後の研究の進むべき方向性を考える上でも有益な情報を得ることができました。

最後になりましたが、研究の指導をしていただき、さらにこのような国際学会での発表の機会を与えてくださった先生方および支援して下さった医歯薬保健学研究科に心より感謝を申し上げます。



Falk symposium- International bile acid meeting (ウィーン)に参加して

杉山 晶子 医歯薬保健学研究科 博士課程1年 医歯薬学専攻 総合診療医学研究室

2012年9月14、15日にオーストリア・ウィーンにて開催された Falk symposium-International bile acid meeting (国際胆汁酸学会)に参加しました。今回、私はポスターセッションにて、「Lysophosphatidylcholine induces apoptotic cell death in biliary epithelial cell: Implication to biliary oncogenesis associated with pancreaticobiliary maljunction.」という演題で、胆汁組成の変化による胆管上皮細胞に対する影響について報告しました。胆管癌のリスクファクターとされる膵胆管合流異常症や肝内結石症の胆汁中には膵由来酵素 Phospholipase A2 とこれによる加水分解産物である Lysophosphatidylcholine (lysoPC) が上昇していることが知られています。本研究では胆管上皮細胞に対し、lysoPC がアポトーシスを誘導し細胞障害に寄与することを示しました。

私にとって初めての国際学会であり、大変緊張しましたが、ポスター発表の会場では日本の学会とは異なり、飲み物や軽食を片手に発表を見てまわり、気軽に質問や議論ができる雰囲気が印象的でした。他の発表者のポスターをみることも、とても勉強になりました。また、講演会にも参加し、現在の肝胆領域をメインとした研究トピックについてさまざまな話を聴き、刺激を受けました。論文よりもさらに新しい情報を目にし、聴くことができたことは、これからの研究の参考になると同時に、研究意欲の向上にも繋がっていくと思います。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださった田妻進教授をはじめとする研究室の先生方、ならびに海外発表を支援して下さった医歯薬保健学研究科に心より感謝いたします。



The 19th International Conference on Organic Synthesis 2012(メルボルン)に参加して

竹川 友 医歯薬学総合研究科 博士課程前期2年 薬科学専攻 創薬合成化学研究室

私は大学院生海外発表支援により渡航費の一部助成を受け、2012年7月1日から6日にかけてオーストラリア、メルボルンのMelbourne Convention and Exhibition Centerで開催された19th International Conference on Organic Synthesis (ICOS 19)に参加しましたので、報告致します。ICOSは、世界各国から多数の有機合成化学者が参加する有機化学分野における主要な国際学会の一つで、2年に一度開催

されます。

私は「Enantioselective trapping of an α -chiral carbanion of acyclic nitrile by a carbon electrophile」という題目でポスター発表を行いました。内容は、これまで立体化学的に極めて不安定なため発生が不可能と考えられてきた鎖状ニトリルの α -キラルカルバニオンの発生および炭素求電子剤による捕捉に初めて成功したというものです。医薬品合成化学において、有機化合物の選択的不斉合成は最も重要な課題の一つであるため、この知見は非常に重要なものと言えます。

ポスター発表では多くのコメントをいただくことができ、研究成果を英語で発表することの重要性を改めて認識する機会となりました。また、興味深い発表や講演も多数行われており、大変勉強になりました。

最後になりましたが、研究の指導をしていただき、またこのような発表の機会を与えて下さった武田敬教授、並びに支援して下さいった医歯薬保健学研究科に心より感謝を申し上げます。



第11回 韓日独がん老化合同シンポジウム(慶州)に参加して

福永 早央里 医歯薬学総合研究科 博士課程前期2年 薬科学専攻
細胞分子生物学研究室

平成24年7月5日から7月7日にかけて韓国の慶州で開催された、「第11回韓日独がん老化合同シンポジウム」に参加しました。今回が初めての英語での発表、しかもそれを国際学会という場で行うということで、大きな不安もありましたが、何よりも他国の研究者の人々と交流できることが大変楽しみでした。

学会では、各国の研究者たちによる英語での活発な討論が行われ、また発表も非常に興味深いものばかりでした。自分の発表に関しては、自分の中では充分満足のできるようなものでなく、改めて自分の未熟さを実感しました。しかし、発表が終わった後、多くの方に声をかけていただき、「発表、とてもおもしろかったよ」などと言ってくれたときは本当に嬉しい気持ちでいっぱいでした。その後英語で様々な討論を行う機会があり、多くの方と話すことで、それまで感じていた年齢や言葉の壁に対する苦手意識もなくなりました。また、本学会に参加していた同年代の学生達との交流から、同じようにこれから研究者を目指すものとして良い刺激を受けることもできました。このように新鮮なことばかりで、学会期間の3日間というのは本当にあっという間でした。

この学会を通して、自分の将来に対する意識が大きく変わりました。今回得られた経験は、今後の研究生生活をより有意義なものにしていく上で本当に貴重なものであったと感じられます。



3rd World Implant Orthodontic Conference (ペローナ)に参加して

砂川 紘子 病院 口腔健康発育歯科 歯科診療医

この度2011年10月6～8日に、イタリアのペローナにて行われた3rd World Implant Orthodontic Conferenceに参加させて頂き、「Stability of self-drilling screw examined by histomorphometric study」という演題で発表を行いました。

矯正歯科治療における歯の移動において、近年固定源として広く普及しつつあるスクリータイプの歯科矯正用インプラント(以下、ミニスクリー)ですが、その植立3ヶ月後の成功率は80%程度であり、成功率向上の達成が望まれています。我々はこれまでに、植立時における回転トルクをいかにコントロールすることが重要であるかということ明らかにしてきました。本研究では、植立直後および植立後7、28、56日間の待機期間終了後に非脱灰研磨標本を製作し、ミニスクリー周囲骨におけるリモデリング様相を観察することで、ミニスクリー植立後の周囲骨の反応、およびミニスクリー植立後の待機期間の設定について明らかにすることを目的としました。15週齢Wister系雄性ラット上顎骨に、回転トルクの大きさを変えてDual-top anchor screwを植立し、それぞれの待機期間終了後、組織学的検討を行いました。その結果、適切な回転トルクにてミニスクリー周囲の皮質骨のダメージを最小限にすることが重要であり、待機期間の有無が安定性を左右する因子にはなり得ないことが強く示唆されました。また、今回の公演発表に対し、Best poster presentation awardを受賞しました。

私自身、大変貴重な経験をすることができ、このような機会を与えて下さいました丹根一夫教授、支援してくださった医歯薬学総合研究科に深くお礼申し上げます。



The 84th Scientific Sessions of the American Heart Association(オーランド)に参加して

宇都宮 裕人 病院 循環器診療科 医科診療医

この度私は平成23年11月12日から16日にかけて、アメリカ合衆国オーランドで循環器領域では最大規模の学会のThe 84th Scientific Sessions of the American Heart Associationに参加して参りました。会場となったオレンジカウンティ・コンベンションセンターは全米で2番目の規模を誇る会場で、非常に多くの循環器に係わる医療関係者でごった返していましたが、規模が大きいだけに各セッション間の移動にやや苦労しました。私は口頭発表とポスター発表を行いました。口頭発表では多列CTを用いた大動脈弁狭窄症の予後評価の有用性について発表しましたが、座長は大動脈弁疾患についての大御所的存在であり、セッション前には挨拶を交わし自己アピールをすることができました。その甲斐があつてか、発表後のQ&Aでは、会場から出た質問を分かりやすくサマライズしてもらった等の便宜を図っていただき、有意義なディスカッションを行うことができました。CTの空間分解能の問題や、大動脈弁石灰化の機序・石灰化量が果たす意義など多くの質問を受けました。その後は、主に心臓CT検査・心臓超音波検査などのイメージング分野を中心にセッションを回りましたが、海外研究者との交流を通して重要なヒントをいくつか得ることができました。これらを今後の研究に生かし、広島大学からさらなる情報発信ができるように頑張りたいと考えています。最後に、発表の機会を与えてくださった木原康樹教授をはじめ、諸先輩方、同僚の皆に感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。



2012アメリカ泌尿器科学会（アトランタ）に参加して

池田 健一郎 病院 泌尿・生殖器診療科 医科診療医

今回、私は2012年5月19日から23日にかけてアメリカ合衆国アトランタで開催されたAmerican Urological Association (AUA) Annual Meetingに参加させていただきました。

本学会において、「Catamnestic follow-up of renal cell carcinomas among atomic bomb survivors according to radiation exposure status」という演題でポスターセッションを行いました。

シオンを行いました。

昨今放射線被曝に関連する発癌についての報告は甲状腺癌をはじめとして再び注目されつつありますが、私の発表は、広島大学病院において腎細胞癌の手術を施行した症例のうち被爆者と非被爆者の臨床病理学的特徴ならびに予後を比較し、長期の影響につき検討した内容でした。

本研究における被爆者では他臓器の癌を合併している頻度が高く、また腎臓癌が有意に早期で治療されていましたが、被爆者と非被爆者の腎癌での死亡率には明らかな差は認めないという結果でした。

世界的にも希少なデータであることもあり、日本の他施設のみならず多くの質問を頂きました。中でも米国がんセンター（National Cancer Institute）の泌尿器腫瘍部門のChiefであられるW. Marston Linehan医師から、癌抑制遺伝子の一つであるVHL遺伝子（von Hippel-Lindau遺伝子）発現についての検討をしてみてもどうかとの助言を頂き、自分としても今後の検討項目を得ることができ非常に充実した学会でした。

最後になりましたが、このような発表機会を与えていただいた諸先生方、学会参加を支援して下さった医歯薬保健学研究科に感謝いたします。



2012 World Congress on In Vitro Biology(ベルビュー)に参加して

山崎 佐知子 病院 口腔再建外科 歯科診療医

この度、若手研究者海外発表支援により2012年6月3日から7日にかけて、アメリカのBellevueにて開催された2012 World Congress on In Vitro Biologyに参加し、“Generation of human induced pluripotent stem (iPS) cells in serum- and feeder-free defined culture from fetal lung fibroblasts and dental pulp cells derived from a patient with cleidocranial dysplasia.”という演題で発表を行いました。現在、

胚性幹細胞（ES細胞）や人工多能性幹細胞（iPS細胞）の多くは動物由来成分や異種抗原を含む培養系で維持されていますが、本研究ではそれらを用いることなく、簡便で安全性の高い条件でiPS細胞を樹立するとともに、遺伝性骨系統疾患である鎖骨頭蓋異形成症患者由来ヒトiPS細胞を樹立し、特性解析を行い報告しました。発表では慣れない英語での質疑応答に苦慮しましたが、海外の研究者と意見交換し、貴重なアドバイスを頂くことができました。今後は、疾患の発症機序や治療法の開発、骨・軟骨分化メカニズムの解析等を行いたいと思います。

最後に、このような発表の機会を与えて下さいました先生方および支援頂きました医歯薬保健学研究科に深く御礼申し上げます。



畠中 史幸 医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 医学分野 総合バイオ 助教

コース名：若手研究者派遣コース
 研究を行った国：アメリカ合衆国
 期間：平成24年1月14日～平成24年4月6日
 研究機関名：Stanford University, School of Medicine
 受入研究者等：准教授 Ricardo E. Dolmetsch

1 初期の目的の遂行状況

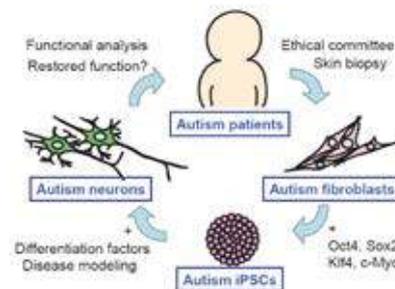
我々はこれまでに、染色体工学的手法を用いて自閉症モデルマウスを構築し、自閉症における分子的基盤を明らかにしてきました。現在、全世界においてiPS (induced pluripotent stem cell) 技術を用いた様々な神経疾患患者における神経細胞の研究が非常に盛んに進められています。

これまでに留学先であるDolmetsch研究室では、ティモシー症候群患者由来のiPS細胞から神経細胞をつくり、自閉症における神経細胞の表現型を報告してきました。

そこで本留学では、別の遺伝的異常由来の自閉症患者の線維芽細胞からiPS細胞を作製し、さらにそれらiPS細胞を神経細胞に分化させ、その機能変化を評価することで、自閉症の神経細胞における分子メカニズムを解明することを目的としました。

2 得られた成果

Dolmetsch研究室において、iPS細胞の作製や培養方法に関する一通りの基礎技術を学びました。その過程において、健常人および自閉症患者の線維芽細胞からOkitaらの手法 (K. Okita et. al., Nature methods, 2011) を用いてiPS細胞を作製し、それらiPS細胞の培養および維持を行いました。最終的には2ライン (健常人1ライン、自閉症患者1ライン) のiPS細胞を樹立しました。今後、より長くiPS細胞を培養およびセクションを行うことで、さらに質が良く安定なiPS細胞を確保する必要があります。さらにそれら安定したiPS細胞を用いて、神経細胞を作製し、それら神経細胞における表現型を解析する予定です。今後のDolmetsch研究室との共同研究および新たなiPS研究のプロジェクトにより、自閉症におけるiPS技術を用いた神経細胞の機能変化を評価することで、自閉症患者における分子的基盤の解明に貢献していきたいと考えています。



関 貴弘 医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 医学分野 神経薬理学 助教

コース名：若手研究者派遣コース
 研究を行った国：アメリカ合衆国
 期間：平成23年4月24日～平成24年3月29日
 研究機関名：University of Michigan Health System
 受入研究者等：教授 Henry L. Paulson

1 初期の目的の遂行状況

オートファジー・リソソーム系の一つの経路であるシャペロン介在性オートファジー (CMA) は細胞内タンパク質の約30%の分解に関わっていますが、その活性調節機構や疾患発症における役割はほとんど明らかになっていません。その理由としてCMA活性を一細胞レベルで観察する実験系が存在しないことが挙げられます。私は蛍光観察を用いて一細胞レベルでのCMA活性評価を可能とする新たな実験系の確立に成功しました。この実験系を用いて脊髄小脳失調症14型 (SCA14) の原因タンパク質である変異 γ PKCが小脳ブルキンエ細胞においてCMA活性を低下させること、それによりCMAの基質タンパク質の発現量が増大することを明らかにしました。

2 得られた成果

研究を行ったHenry L. Paulson教授の研究室は脊髄小脳失調症3型 (SCA3) の発症メカニズムに関する研究を多角的に行っており、SCA3モデルマウスも有しています。このマウスの神経細胞において、CMAやもう一つのオートファジー・リソソーム系経路であるマクロオートファジー (MA) の活性がどのように影響を受けるかをCMAおよびMAに関わるタンパク質の発現量変化を指標に検討しました。その結果、SCA3モデルマウスの神経細胞においてオートファジー・リソソーム系タンパク質分解の機能異常が引き起こされていることが明らかとなり、これがSCA3の発症に寄与すると示唆されます。



木村 智樹 病院 放射線診療科 講師

コース名：若手研究者派遣コース
 研究を行った国：アメリカ合衆国
 期間：平成24年1月1日～平成24年3月31日
 研究機関名：テキサス大学 MD Anderson Cancer Center Southwestern Cancer Center
 受入研究者等：教授 Ritsuko Komaki

1 初期の目的の遂行状況

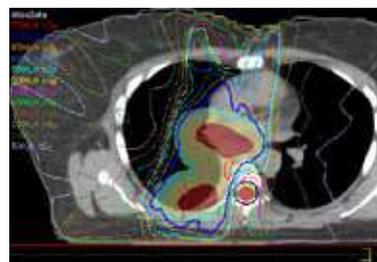
私は肺癌に対する高精度放射線治療の研究を行っています。今回の派遣先である MD Anderson Cancer Center は周知の通り世界でも最先端の治療及び研究を行っており、当初の目的であった肺癌における定位放射線治療 (SBRT) 及び強度変調放射線治療 (IMRT) 計画法に関する情報収集と陽子線治療における技術的・臨床的課題

の実態調査を行うことができました。また、肺癌放射線治療における大規模な臨床試験を指揮する本学ご出身の Ritsuko Komaki 教授、Joe Chang 准教授との意見交換を行うことができました。

2 得られた成果

SBRT については、本邦で主流であるアイソセンター (照射野の中心) における線量処方ではなく、標的体積全体に対する volume 処方 (例えば標的体積の95%以上に処方線量を照射) であり、同じ処方線量表記でも実際に標的体積に照射される線量が全く異なります。その際の肺野を含む標的体積に対していかに標的体積の形状に合わせた線量分布を作成するかという具体的な方法を学ぶことができ、今後の本邦での治療計画に生かせる内容でした。IMRT についても治療計画の際の具体的な線量制約及びビーム設定などについての状況が把握できました。陽子線治療については標的腫瘍の形状に合わせて精密に照射することが可能となる最新の pencil beam scanning 法について、加えて肺癌における臨床的有用性を検証する IMRT と陽子線治療との第Ⅲ相試験についての情報も得ることができました。

上記の内容は論文・学会などで間接的に知っていることもありましたが、何より実際の現場で診療及び研究に関わっている第一線の研究者と交流を持てたことが大きな収穫でもした。現在私が実施もしくは関与している臨床試験の遂行や今後の方向性について大変参考となりました。このような機会を与えていただき大変感謝しております。ありがとうございました。



(進行肺癌に対するIMRTの線量分布)



齋藤 敦 医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 医学分野 分子細胞情報学 助教

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース
 訪問した国：アメリカ合衆国
 期間：平成23年11月15日～平成23年11月17日
 学会名：Neuroscience annual meeting 2011
 会場：Washington, D.C.

1 初期の目的の遂行状況

目的は Neuroscience annual meeting 2011 に参加し、発表を行うことで、申請者の研究成果を世界に向けて発信することでありました。さらに同分野における国内外の研究者より研究内容に対する指摘を受け、さらなる研究の発展を目指すと同時に、他研究者の発表を通して研究を遂行する上で必要な情報の入手を図ることで

す。今回、Neuroscience annual meeting 2011 に参加し、英語によるプレゼンテーションを行い、他研究者のプレゼンテーションに対する質疑応答なども行うことで、当初の目的である研究成果の発信および必要な情報の入手を行うことができたかと判断します。

2 得られた成果

Neuroscience annual meeting 2011 は神経科学分野において、世界的にみて最も大規模かつ著名な国際学会であり、今回、英語によるプレゼンテーションおよび討論を行うことで、研究成果を同分野の研究者に幅広く発信することができました。それと同時に他研究者の研究に触れ、質疑応答を通じて情報の交換を行ったことで、英語によるコミュニケーション能力を高めることができたことに合わせ、当学会に参加した世界各国の他研究者から多岐にわたる最新の情報を入手することができました。これは申請者の研究をより大きく発展させる上で非常に重要かつ有意義なものとなりました。また、世界的に著名な研究者ともコミュニケーションをとることで、将来的な研究遂行のための戦略・方向性を考える上で素晴らしい経験となりました。さらに研究者間のコミュニケーションを介した情報交換によって、研究遂行のために必要とする技術や知識を互いに把握し、各々の研究が飛躍的に進展する可能性を見出すことができれば共同研究へと発展させることも期待されたが、残念ながら今回は共同研究の打診には至らなかったです。しかしながら世界各国の当該分野の研究に触れたことで、今後の研究の進展次第では、新たに共同研究へと発展する可能性が大いに感じられる有意義な学会とすることができました。


田中 茂 医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 医学分野 神経薬理学 助教

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース
 訪問した国：アメリカ合衆国
 期間：平成23年11月11日～平成23年11月18日
 学会名：41th Annual meeting, Society for Neuroscience
 会場：Walter E. Washington Convention Center

1 初期の目的の遂行状況

G蛋白質共役型受容体であるGPR3, GPR6, GPR12は中枢神経系に豊富に発現し、恒常的にGsと結合し細胞内cAMPレベルを維持する非常にユニークな機能を持つことが知られています。私は海外留学時よりこれら受容体の機能解析に取り組んでおり、これら受容体が神経突起伸長とミエリン抵抗性を示し、分化・成熟に関わる重要な因子であることを報告してきました。帰国後も、当研究室にてGPR3の機能解析を継続しており、小脳顆粒神経細胞におけるGPR3の神経保護効果を解明いたしました。今回、その研究成果を米国ワシントンDCで開催された第41回米国神経科学学会でポスター発表を行い、内容に関して学会参加者と意見交換を行いました。さらに、現地で共同研究者との意見交換と今後の研究の展開に関して議論を行い、当初の目的を十分に遂行できました。

2 得られた成果

様々なストレス環境下における神経保護作用に関し、神経細胞の支持組織が放出する神経栄養因子やペプチドの関与が数多く報告されています。しかしながら、今回の発表は、従来の報告と異なりGPR3を介して神経細胞が生来持つ細胞保護能力を、脳虚血を含めた様々なストレス環境下で示した点で、これまでの神経細胞生存に関する報告と大きく異なっています。今後、これらのメカニズムの解明を進めていくことにより、中枢性神経障害の様々な病態解明や治療に役立つ可能性があります。今回のポスター発表により様々な分野の神経科学者と意見交換し、さらに今後研究の方向性を決める上で様々なアドバイスを受けることができ、非常に有意義な学会発表でした。


小野 重弘 医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門 歯学分野 口腔外科学 助教

コース名：若手研究者派遣コース
 研究を行った国：ドイツ
 期間：平成23年4月3日～平成24年3月21日
 研究機関名：Medizinische Hochschule Hannover
 受入研究者等：教授 Nils-Claudius Gellrich

1 初期の目的の遂行状況

- ① ドイツにおける口腔顎顔面外科の治療体系・手術手技の理解
- ② 口腔顎顔面領域における手術ナビゲーションシステムの開発

ハノーファー医科大学(Medizinische Hochschule Hannover: MHH)は北ドイツ・ニーダーザクセン州の州都ハノーファーにあり、広島大学とも学術提携をしており、これまでも多数の教職員、学生が交流をしています。私は、同大学の口腔顎顔面外科(Mund-, Kiefer- und Gesichtschirurgie)に約1年間留学しました。ハノーファー医科大学は半径200キロ圏内の顎顔面関連の症例がすべて集約されるため、1年間に約1200例以上の全身麻酔手術が行われていました。手術内容は頭蓋顎顔面外傷、腫瘍および腫瘍再建手術、顎変形症、口唇顎口蓋裂関連手術が大半を占め、その治療方針、治療技術を詳細に学ぶことができました。特に、腫瘍、外傷に対する手術には手術ナビゲーションシステムを使用しており、この分野に関しては世界でも最先端を走っているため、今後の臨床、研究を行う上で非常に参考になりました。

2 得られた成果

年間1200例以上の全身麻酔手術が施行されるため、われわれ口腔外科の領域のあらゆる手術を学ぶことができました。治療方針、手術法も自講座の臨床研究結果に基づいており、すべての手術に対し、自信にあふれている姿が印象的でした。手術器具、機材、手技ともに私が広島大学で学んできたものとあまり違いは感じませんでしたが大きな差異は私と同年代のレジデントであっても多くの手術経験があり、また多くの手術アプローチテクニックを有しており、非常に手術時間が短い点でした。

また、腫瘍、外傷症例では必ず手術ナビゲーションシステムを用いていました。これは、脳神経外科領域では用いられていますが、口腔顎顔面領域では世界でもほとんど使用されておらず、現在開発段階にあります。この分野では私が師事したMHHのProf.Gellrichは第一人者であり、その開発・適応拡大に微力ながらお手伝いできたことは、この上ない経験であったと思っています。

今回の若手研究者派遣で得られた経験・結果を今後の自分の臨床・研究に充分にいかしたいと考えます。



重石 英生 医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門 歯学分野 口腔外科学 助教

コース名：若手研究者派遣コース

研究を行った国：英国

期間：平成23年6月27日～平成24年6月25日

研究機関名：Queen Mary, University of London, Barts and The London, School of Medicine and Dentistry

受入研究者等：教授 Ian Mackenzie

1 初期の目的の遂行状況

近年、Cancer stem cell (CSC) が腫瘍の浸潤、転移および化学療法抵抗性に密接に関与することが明らかになりました。今回、口腔癌幹細胞の性状を明らかにする目的で、ロンドン大学のMackenzie教授の研究室にて、口腔癌細胞株を用いて癌幹細胞の同定と機能解析を行いました。

2 得られた成果

Fluorescence-activated cell sorting (FACS) 解析より、口腔癌幹細胞にはepithelial-mesenchymal transition (EMT) に関与するEMT CSC (CD44^{high}/ESA^{low} phenotype) とEpithelial CSC (CD44^{high}/ESA^{high} phenotype) の二つのphenotypeが存在することが明らかになりました。すなわち、EMT CSCは高い遊走能を示し、Vimentin, Snail等のEMT関連遺伝子の高い発現を認めました。また、Epithelial CSCは増殖能が高く、E-cadherinの高い発現を示しました。

さらに、EMT CSCとEpithelial CSCの自己複製には活性化型Glycogen synthase kinase 3β (GSK3β) が必要であり、GSK3βのノックダウンにより、EMT CSCはmesenchymal-epithelial transition (MET) を生じました。以上の結果より、EMT CSCの自己複製とMETにはGSK3βが重要な役割を担うことが明らかとなりました。



鈴木 茂樹 医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門 歯学分野 健康増進歯学 助教

コース名：若手研究者派遣コース

研究を行った国：アメリカ合衆国

期間：平成23年8月1日～平成23年10月16日

研究機関名：STANFORD School of medicine

受入研究者等：教授 Jill Helms

1 初期の目的の遂行状況

Wnt (ウイント) シグナリングに焦点を当てた高い組織修復能を持つ歯牙直接覆髄材の開発を最終目的とし、マウス及びラットを用いた基礎研究を行い、歯髄が高いWnt反応性を示すことを明らかにしました。

2 得られた成果

渡航先では、Wntシグナルの活性化が継続される遺伝子改変マウス (Axin2欠損マウス) に実験的露髄を行い、その後の創傷治癒の程度、露髄面への硬組織形成の有無等をヘマトキシリン・エオシン染色並びに特異抗体を用いた免疫染色法にて解析しました。露髄後10日で、遺伝子改変の無いコントロールマウスでは露髄面周囲に組織の一部壊死と炎症の残存が認められるのに対して、Axin2欠損マウスでは、コラーゲン線維の沈着を伴った新生骨・象牙質様組織の形成を認め、Wntシグナリングにより歯髄組織の創傷治癒が劇的に促進することが示唆されました。更に、最終的な臨床応用を想定し、ラットの実験的露髄面にリポソーム結合リコンビナントWntタンパクを投与し、コントロールと比較することでその覆髄効果を解析することも試みました。この実験系は現在共同研究として解析中で、リアルタイムPCR及びアルカリフォスファターゼ染色法によりリコンビナントWntタンパクの効果を検討する予定です。



吉川 峰加 医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門 歯学分野 先端歯科補綴学 准教授

コース名：若手研究者派遣コース

研究を行った国：アメリカ合衆国

期間：平成23年11月7日～平成24年3月21日

研究機関名：カルフォルニア州立大学ロサンゼルス校 (UCLA)

受入研究者等：教授 ニール・ギャレット

1 初期の目的の遂行状況

摂食・嚥下機能の低下した頭頸部ガン患者を対象に、化学・放射線療法がおよぼす生理学的・心理学的影響に関する調査に関わりました。頭頸部ガン患者のガン治療予後を評価するEORCT QLQ-H&N35をベースに、患者の生活の質を最も低下させる摂食・嚥下障害ならびに放射線治療後の顎骨壊死 (ORN) に関する質問項目を追加し、22項目から成る質問票を作成しました。

2 得られた成果

UCLA歯学部顎顔面補綴クリニックへ過去10年間に通院した約900名に対し、同質問票を近日中に郵送予定であり、今後も引き続き調査に関わる予定です。さらには歯学部補綴科での学生・レジデント教育に関わるとともに、全米屈指の顎顔面補綴クリニックにおける頭頸部ガンならびに頭頸部外傷患者への歯科補綴治療を見学、頭頸部外科を中心とする多職種連携のチーム医療、UCLA嚥下外来クリニックや言語聴覚士を中心とする急性期病院での入院患者対象の摂食・嚥下治療の見学も行いました。



松浦 歩 病院 口腔維持修復歯科 歯科診療医

コース名：若手研究者派遣コース

研究を行った国：アメリカ合衆国

期間：平成24年1月5日～平成24年3月29日

研究機関名：New York University College of Dentistry, Department of Biomaterials and Biomimetics

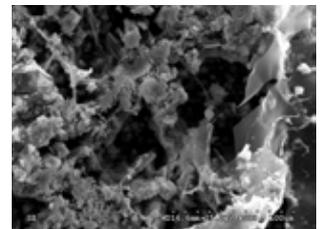
受入研究者等：Professor and Associate Chair Racquel Z. LeGeros

1 初期の目的の遂行状況

骨欠損を伴う症例においては、自家骨、同種他家骨、異種骨などとともに生体材料が用いられています。生体材料の代表的なものとして、リン酸カルシウムを主体とするハイドロキシアパタイトやβ型リン酸三カルシウム(β-TCP)などがあります。これらは生体親和性に優れ、供給量も安定していることから骨移植材料として用いられてきましたが、生体内で長期に残存することや骨組織に置換される時期における吸収や分解のコントロールが困難であるため予知性の高い骨移植材とは言い難いです。そこで、申請者はより生体に近いリン酸カルシウムを作製、その評価方法を習得するため、New York University College of Dentistry, Department of Biomaterials and Biomimetics のCalcium Phosphate Research Laboratoryにて研修を行いました。そこで、生体模倣性のあるアパタイト (Synthesis Bone Mineral:SBM) の作成方法ならびに、ゼラチンと組み合わせた複合体の開発ならびに材料学的な評価 (フーリエ変換赤外分光光度計、X線回折装置、誘導結合プラズマ発光分光分析装置、走査型電子顕微鏡、マイクロCT) を行いました。

2 得られた成果

湿式法により、アパタイト中に様々なイオンを置換したSBMを作製し、その作製方法を習得しました。なかでも、 CO_3^{2-} 、 Mg^{2+} 、 Na^+ 、 Zn^{2+} 、 F^- を生体骨アパタイトに近似した割合で含有させたSBMの作製ならびに材料学的評価を行いました。教室内に多数の測定機器が配置されており、作製後すぐに評価を行うことができる点がとても有益でした。さらにこれを用いてゼラチン複合体を作製しました。走査型電子顕微鏡ならびにマイクロCTから、3次元的な連通多孔性の構造を有した材料が作製できました。今後これらの材料を用いて、広島大学で*in vitro*および*in vivo*の実験を行っていく予定です。今回の派遣において、研究室の先生を始め、ニューヨーク大学に在籍されている日本人研究者の先生方と交流を持ったことが私にとって大変有意義でした。若手研究者派遣プログラムという貴重な機会を頂いた赤川先生を始め諸先生方に深く御礼申し上げます。





内田 雄士 医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門 歯学分野 歯周病態学 助教

コース名：若手研究者派遣コース
 研究を行った国：アメリカ合衆国
 期間：平成23年12月31日～平成24年3月29日
 研究機関名：フロリダ大学
 受入研究者等：助教 Cha Seunghee

1 初期の目的の遂行状況

近年、歯周病は糖尿病の合併症として認知されるようになりました。歯周病と糖尿病を結びつける因子として炎症性サイトカインがよく研究されています。しかし、その他にも重要な役割を果たしている因子があると考えられます。私は、これまでに炎症性サイトカイン以外の糖尿病に起因する因子の歯周病惹起と進行に与える影響を詳しく調べるために、糖尿病患者の合併症を誘導する原因と考えられる糖化最終産物（AGE）、また、炎症初期に過剰産生されるS100タンパク質、

そして、その両者共通の受容体であるReceptor of AGE (RAGE) に着目し実験を行ってきました。今回、その中で歯肉上皮細胞に発現していることが確認されているRAGEに焦点を絞り、次の3つの仮説を立て研究を行うことにしました。

1. 歯周病原細菌は歯肉上皮細胞におけるRAGE発現に影響を与える。
2. 歯周病原細菌は歯肉上皮における炎症性サイトカイン（IL-8）の産生を誘導にRAGEを介した経路がある。
3. 歯周病原細菌の細胞（歯肉上皮細胞）への付着・侵入に何らかの役割を果たしている。

歯周病原細菌には、毒性が強く細胞内侵入能を有することでよく知られている*Porphyromonas gingivalis* (*P. gingivalis*) を使用することにしました。

2 得られた成果

1～3の仮説を立証するために行った実験とその結果を以下に示します。

*P. gingivalis*をヒト歯肉由来上皮細胞（HGEC）に作用させると、時間依存的、濃度依存的にRAGEの発現は減少しました。ヒト-リコンビナン-RAGE及び、抗ヒトRAGE抗体は*P. gingivalis*によって誘導されるHGECのIL-8の産生を抑制しました。また、ヒト-リコンビナン-RAGE及び抗RAGE抗体は*P. gingivalis*のHGECへの付着・侵入を抑制しました。

この結果から、*P. gingivalis*はヒト歯肉上皮のRAGEの発現に関与している一方で、RAGEを介して歯肉上皮のIL-8の産生や上皮細胞への付着・侵入に影響を及ぼしていることが分かりました。これまで、*P. gingivalis*のLPSは歯肉上皮細胞のTLR-2を介してIL-8産生を誘導するという報告があります。また、*P. gingivalis*はその外膜上に存在する色々なタンパク質がそれぞれ受容体に結合することによって、歯肉上皮細胞に付着・侵入すると言われていました。しかし、歯肉上皮のRAGEという新たな因子が歯周病原細菌の歯周病誘導に大きな役割をもっている可能性があることが示唆されました。糖尿病患者においてRAGEの発現は健常者と比較して色々な組織で促進していると言われていました。歯肉上皮細胞においてもその可能性は大きいのです。つまり、糖尿病の歯周病への影響はRAGEの存在が大きな役割を果たしている可能性があります。今後、*P. gingivalis*の構成成分の何がRAGEを介して、歯肉炎進行に影響しているかを調べる予定です。



樋山 伸二 医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 歯学分野 口腔細胞生物学 助教

コース名：若手研究者派遣コース
 研究を行った国：アメリカ合衆国
 期間：平成24年3月10日～平成24年8月10日
 研究機関名：Yale University
 受入研究者等：准教授 Agnes Vignery, DDS, PhD

1 初期の目的の遂行状況

私はこの度の海外派遣プログラム（長期派遣）により、平成24年3月10日から8月10日までアメリカ合衆国コネチカット州のYale UniversityのDr. Agnesの研究室に滞在致しました。この研究室では、破骨細胞やマクロファージなど多核細胞の細胞融合について研究を行っています。これまでの私の研究は鳥類の特異組織である骨髄骨のリモデリングにおける骨髄細胞の破骨細胞への分化および細胞死について行っています。この実験モデルにおいて、骨髄細胞が容易に融合しマクロファージあるいは破骨細胞に分化することが見出されています。それゆえ、Dr. Agnesの研究室において、細胞融合に関わる因子や融合機構について学ぶことを目的とし渡米致しました。この研究室では、DNAマイクロアレイにより、細胞融合に関与していると考えられる因子を多数見出し、その1つについて予備実験を行うことができました。また他の因子については、本年度のアメリカ骨代謝学会でポストドク（Heeseog Kang）による発表が決まっています。

2 得られた成果

研究室に到着直後、腫瘍組織とマクロファージおよび破骨細胞に関する新しいプロジェクトを紹介されました。私自身、たいへん興味を持ち、その準備に取りかかっていたのですが、研究室の都合でプロジェクトが動き出せずに時間だけが過ぎて行く状況になりました。しかし、その時間を利用し、毎日のように開かれる細胞生物学、免疫生物学などのセミナーに多数参加することができ、これらの分野における最先端の内容を聴く機会を得られました。その後、このプロジェクトは中止となってしまう、Heeseogの厚意により、彼女が発見した因子の1つであるVSIg4がマウス骨髄細胞の破骨細胞への分化に与える影響について検討する機会を得ました。レトロウイルスを用いてマウスVSIg4遺伝子をノックダウンした結果、形成された破骨細胞はその細胞数およびサイズともに有意に減少しました。破骨細胞としての機能についても検討すべき課題であると考えていましたが、この実験の追試を行う時間が得られず、帰国することとなりました。この因子が破骨細胞の細胞融合にたいへん重要な役割を果たすであろうことを十分に証明できずに帰国となったことはたいへん残念なことではありましたが、Yale Universityではどのように研究を行っているか、また実験施設や設備などの一部を知ることができたこと、新しい人脈も構築できたことはかけがえの無い財産となりました。今後はDr. Agnesの研究室はもちろん、海外の研究室との共同研究を視野に入れていきたいと考えています。最後に、約半年間、Yale Universityへの留学の機会を与えてくださった内田教授および本プログラムに関係される先生方および事務の方々により感謝の意を申し上げます。



武田 克浩 医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門 歯学分野 歯周病態学 助教

コース名：若手研究者派遣コース
 研究を行った国：アメリカ合衆国
 期間：平成24年3月31日～平成24年6月29日
 研究機関名：Weil Cornell Medical College
 受入研究者等：教授 Barbara L. Hempstead

1 初期の目的の遂行状況

現在、新たな歯周組織再生療法の開発を目指して、血小板由来増殖因子（PDGF）、塩基性線維芽細胞増殖因子（bFGF）、骨形成タンパク質（BMP）などの成長因子を用いたサイトカイン療法の開発が盛んに行われています。アメリカでは2006年ヒト型組換えPDGF-BBとβ三リン酸カルシウムから構成されるGEM21が歯科材料として商品化されています。当研究室では、これまで成長因子の1つである脳由来神経栄養因子（BDNF）の歯周組織再生治療薬としての臨床応用を目指して、BDNFが歯周組織再生に有用であることをin vitroおよびin vivo試験の両面から検討し、明らかにしてきました。近年、炎症の治癒機転には多くの再生現象が関与し、逆に再生医療を成功に導くためには炎症に関係するサイトカインなど多くの分子の制御が必要であることが明らかとなってきました。そこで、本プログラムにおいては、ヒト血管内皮細胞を用いて、腫瘍壊死因子（TNF）-α刺激に対するBDNFの抗炎症・アポトーシス作用、そのシグナル伝達解析を遂行しました。

2 得られた成果

①BDNF（50 ng/ml）はTNF-α（5 ng/ml）によって誘導されるヒト血管内皮細胞（LONZAより購入）のアポトーシスを抑制することを、アネキシンVを用いたフローサイトメトリー、Lactic dehydrogenase release assay、TUNEL assayといった異なる手法で調べました。さらに、TNF-α（5 ng/ml）によって誘導される炎症マーカーであるICAM-1の発現上昇をBDNF（50 ng/ml）が抑制することをリアルタイムPCRで示しました。

②実験に用いたヒト血管内皮細胞はBDNFの高親和性受容体TrkB、TNF-αの受容体TNFR1を発現していることをWestern blotting法にて確認しました。しかし、アポトーシス誘導への関与が報告されているBDNFの低親和性受容体P75は発現していませんでした。

③BDNFの抗アポトーシス作用には、PTEN/Aktカスケードが関与していることを明らかにしました。



野宗 万喜 医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門 歯学分野 公衆口腔保健学 講師

コース名：海外フィールドワーク研究コース
 訪問した国：アメリカ合衆国
 期間：平成24年3月17日～平成24年4月1日
 研究機関名等：The University of Texas MD Anderson Cancer Center
 受入研究者等：Program Manager Lisa G. Green

1 初期の目的の遂行状況

がん患者の口腔ケアに関する米国での最新の動向および情報収集を行うことを目的とし、テキサス州ヒューストンにあるThe University of Texas MD Anderson Cancer Centerにおいて、Nursing Education Outreach というプログラムにて10日間の研修を行いました。具体的目的として、①顎・口腔領域の患者に対する口腔ケアの実際についての情報収集 ②口腔ケアに関わる職種連携についての情報収集をあげていました。私の研修プログラムのコーディネーターであるJames氏がご尽力下さり、頭頸部の外来および入院病棟、手術室、歯科外来、外来輸液治療センターなどの見学、およびがん治療プロトコルの研究に携わるResearch Nurse から説明を受けることが出来ました。

2 得られた成果

このたびの研修で学び得たことは、見学病院の頭頸部外来での外来診療のシステム、がん患者への歯科外来での診療の実際、歯科外来での歯科衛生士の業務や役割、入院患者への退院指導の実際、外来化学療法および輸血療法の実際、手術室での各職種の役割などでした。

【頭頸部外来での外来診療のシステム】

私が見学した頭頸部外来では、まず患者の診察を看護師またはPA(Physician's Assistant)が、確実な視診、触診、問診などで行い、その内容が医師に報告されていました。その後に患者が待つ診察室へ医師と看護師またはPAがともに出向き、診察が行われるというシステムで行われていました。医師はポイントを押さえた診察を行えているようであり、また看護師やPAのアセスメント能力も高まることに繋がるのではないかと考えました。

【がん患者への歯科外来での診察の実際】

歯科外来では、歯科医師が化学療法、放射線治療などの治療前の患者へ口腔内診査を行い口腔衛生管理の重要性を説明していました。歯科医師はあらゆる科の医師と連携を取っていました。歯科医師が必要と認めた患者が歯科衛生士に紹介され、処置およびセルフケアの指導などが行われていました。歯科衛生士は、診療前に患者の最近の検査データおよび治療の内容などあらゆるデータを整理し全身のアセスメントを行った上で診療を行っていました。気になることがあれば歯科医師や主治医に確認をとることでした。歯科衛生士が行う1人の患者の診療には、情報の整理から診療まで約2時間を要し、1日に診療出来るのは3～4人であると説明を受けました。

【入院患者への退院指導の実際】

入院病棟では、看護師から口腔ケアに用いる物品の説明を受け、また患者への退院指導の実際を見学しました。アメリカの医療保険制度では、入院期間は短く、手術翌日あるいは翌々日には退院し外来通院治療となることから、患者のセルフケアに重点が置かれていることが理解出来ました。

今回の研修に参加して、自分自身のこれまでの臨床経験を見つめ直すとともに、これからの教育・研究について考えるなど非常に有意義な時間を過ごすことが出来ました。終わりになりましたが、このような有意義な機会を与えて下さった本プログラムの関係者の皆様から感謝申し上げます。



吉岡 広陽 医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 歯学分野 硬組織代謝生物学 助教

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース
 訪問した国：アメリカ合衆国
 期間：平成24年3月20日～平成24年3月26日
 学会名：41st Annual Meeting of the American Association for Dental Research
 会場：Tampa Convention Center

1 初期の目的の遂行状況

平成24年3月21日から3月24日までアメリカ合衆国フロリダ州タンパにて開催された第41回米国歯科研究学会（41st Annual Meeting of the American Association for Dental Research）に参加し、ポスターセッションにて「Phosphate regulates Fibromodulin expression through the ERK pathway in ameloblasts」という演題名で発表を行いました。慢性腎臓病等によるリン酸代謝の異常に伴い、歯牙形成に異常を認めることが多数報告されていますが、その発症機序は不明な点が多く、明らかにされていません。今回の発表はその解明への糸口となるものです。発表時には一流の研究者から大学院生まで幅広い方々と議論し、有意義なアドバイスや情報を得るとともに人脈を築くことが出来ました。

2 得られた成果

本学会では、関連するセッションに参加し、アメリカ歯科医学会における最先端の研究動向を理解・把握することができました。また、自身の研究に関連すること以外にも、刺激となる発表に触れることが出来ました。特に、Distinguished Lecture Seriesとして講演されたお二人の話は非常に印象に残るものでした。Dr. Martha J. Somerman（Director, National Institute of Dental and Craniofacial Research）は、アメリカの歯科医学会が目指す将来像について講演されました。具体的には、歯科領域においても各個人の遺伝子、口腔内細菌の種類等に合わせた個別化医療が重要であり、その導入に向けて研究・開発を進めて行こうというものです。Dr. Anthony J. Atala（Wake Forest University Institute for Regenerative Medicine）は患者自身の細胞を用いた臓器の再生、そしてその移植について多数の臨床例を示されました。

本学会への参加により、自身の研究の方向性・将来像を考える上で非常に参考となる多くの知見を得ることができました。



平田 涼子 医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門 歯学分野 小児歯科学 助教

コース名：海外フィールドワーク研究コース
 訪問した国：カンボジア
 期間：平成24年2月26日～平成24年3月1日
 研究機関名等：Wat Bo Primary School
 受入研究者等：校長 Peung Kimchhen

1 初期の目的の遂行状況

2005年からカンボジア支援を続けるNPO法人「平和貢献NGOsひろしま」が派遣した保健医療支援団の提案により、2008年に小児の口腔の健康教育プログラム構築を目的とした歯科支援活動が開始されました。これまで、現地小学校でのフィールドワークによるカンボジア学童の口腔内状態の調査と支援方法の検討、および保健省や歯科大学の訪問による連携強化を行ってきました。

今回は、カンボジアの地方都市および農村部の小学校をフィールドとし、小児口腔内状態の経時的変化の調査と口腔衛生指導や口腔保健指導のさらなる定着を目的として渡航しました。

2 得られた成果

シェムリアップ州ブク郡に位置するササースダム小学校への訪問は今回で5回目となります。ボランティアで参加したメンバーとの協力の下、歯科健診、歯科治療を行い、それと並行して前回治療した歯の予後、齲蝕進行状況の確認などを含めた経時的調査を行うことができました。

調査から、重度齲蝕を持つ児童が多くみられ、その中には咬合が崩壊している者もみられました。齲蝕の原因は甘味の大量摂取や口腔清掃不良だけでなく、貧困のため歯ブラシや歯磨剤を購入できないこと、口腔衛生、口腔保健に関する教育システムが整っておらず、齲蝕の原因や予防方法を知らないこと、通院可能範囲内に歯科医院がないことなど経済・教育・社会的要因が大きく関与すると考えられました。今後、これらの結果について、カンボジアの経済、教育、社会的要因を踏まえた分析、検討を行う予定です。

カンボジア最大規模の小学校であるワット・ボー小学校では、前回より引き続き、現地小学校での口腔衛生教育の実現に向けて、現地教員へ向けての模擬授業を行いました。また、現地の医療従事者ならびにカンボジア国立健康保健大学学生等も参加して、彼らと交流しながら活動を進めていくことができました。カンボジアの歯科医療を担っていく歯科医療従事者との連携を密にすることで、日本からの派遣のみでは実現しにくい継続的かつ現地に即した活動実現へと繋げたいと感じました。

乳幼児から15歳までの子どもたちを対象に小児内科、外科、歯科、眼科の診療を行っているアンコール小児病院の訪問、視察を行い、カンボジアにおける医療の現状についての情報を収集することができました。

今回までの調査結果を踏まえ、現地で実施、可能な保健教育予防プログラムを考案し、歯科支援活動を継続することで、将来のカンボジアの小児の保健衛生の向上、ならびにカンボジア国内における自立した歯科医療の実現へ結び付けたいと考えます。

今回このような機会を与えて下さった本プログラムの関係者の皆様に心より感謝申し上げます。



池本 陽峰 歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 薬学分野 創薬合成化学 助手(当時)

コース名：若手研究者派遣コース
 研究を行った国：アメリカ合衆国
 期間：平成23年6月20日～平成23年10月14日
 研究機関名：マサチューセッツ工科大学化学科
 受入研究者等：教授 Rick L. Danheiser

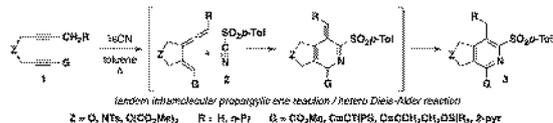
1 初期の目的の遂行状況

一つの結合の形成により環を形成する「cyclization法」と見なすことができる「分子内プロパルギルエン反応」と、複数の結合形成により環構築を行う「annulation法」の一つであるDiels-Alder反応を巧みに組み合わせた方法論を分子間反応に適用し、高度に官能基化されたピリジン環を構築する方法を開発するという目的に従い、以下の検討を行いました。

(1) 原料1のテサー構造内にある原子団

Z及び末端アルキンの置換基Gを種々変換した基質を用いて反応を行い、本反応の基質適用範囲を明らかにする。

(2) 得られた生成物である多官能性ピリジン3の変換反応、すなわち、スルホニル基(SO₂p-Tol)の還元反応(3→4)の最適条件を見出す。

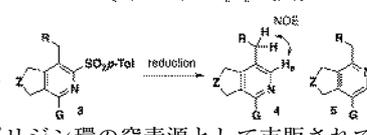


2 得られた成果

分子内プロパルギルエン反応とDiels-Alder反応を組み合わせた方法論を分子間反応に適用し、高度に官能基化されたピリジン環化合物3を得ることに成功しました。本方法論の特徴は以下の4点が挙げられます。(1)多くの医薬品、生理活性化合物に含まれる多官能性ピリジン環骨格を有する化合物3をわずか1段階で構築することができる、(2)ピリジン環の窒素源として市販されている安価なトシルシアニドを使用可能である、(3)反応条件がトルエン中で加熱するのみという極めて簡便なものである、(4)Diels-Alder反応に汎用される(遷移)金属ルイス酸触媒を全く必要としないため、環境負荷の大きい廃棄物が発生しない。

また種々の基質を用いて検討した結果、本反応はZとして酸素、窒素原子だけでなく、炭素原子を有する基質にも適用可能であることが明らかになりました。さらにその際、酸素、窒素原子よりも炭素原子を有する基質の方が反応完結に高温を必要とすることもわかりました。

次に、得られたピリジン環化合物3に存在するスルホニル基(SO₂p-Tol)の還元反応(3→4)の検討を行ったところ、アルコール溶媒中、過剰量の5%Na/Hgで処理することにより還元可能であることがわかりました。さらにNMR(核磁気共鳴装置)を用いて、得られたピリジン4のNOESYスペクトルを測定したところ、プロトンHaとベンジル位のプロトンとの間にNOE(核オーバーハウザー効果)の相関ピークが観察されたため、ピリジン環の構造は5ではなく、4であることが明らかになりました。



水野 初 歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 薬学分野 分子治療デバイス学 助手

コース名：若手研究者派遣コース
 研究を行った国：アメリカ合衆国
 期間：平成23年10月25日～平成23年12月27日
 研究機関名：Department of Chemistry, University of Utah
 受入研究者等：教授 Edward M. Eyring

1 初期の目的の遂行状況

訪問先のアメリカ ユタ大学化学科では、主に物理化学研究室と、分析センターに滞在し、化学的性質の異なるさまざまな物質を質量分析するためのイオン化法と、それに伴う条件の最適化についての検討を行いました。これにより、微量サンプルを分離などの前処理なしで、かつ共存物質によるイオン化への影響を抑えて直接質量分析ができる方法・条件の開発を目指しました。

Eyring教授の研究室では現在、Chemical looping combustion(化学ループ燃焼)開発の研究をされており、その研究のお手伝いをしながら、分析センターにて主任研究員のMuller先生とともに、低分子代謝物や脂質、ペプチド、タンパクからDNAに至る様々な生体物質のほか、有機化合物、無機化合物まで多種にわたる性質のサンプル分析とともに、それぞれの化学種に適したイオン源の選択、および高効率なイオン化条件などの検討を行いました。

2 得られた成果

質量分析による高効率イオン化法の検討では、分析センター所有の様々なタイプの質量分析計とイオン源を用いて、アミノ酸代謝物や有機酸などの極性物質、脂質やステロイド、糖などの非極性物質などをそれぞれ選択的かつ高効率なイオン化を行うことができる条件の検討を行いました。さらにDNAなどの高分子サンプルの条件検討も行いました。その結果、イオン化法にMALDIを用いた場合にはタンパクやペプチドなどの生体高分子を比較的高感度に分析でき、さらにマトリックスの選択により、塩などの共存物質の影響を受けやすいDNAなどのサンプルについても安定したイオンの検出ができるようになりました。ただし今回の訪問では、全て標準物質を用いて行ったため、実際の生体サンプルを取り扱う場合にはそれ以外の共雑物質も考慮する必要があります。

また併設のNMRセンターのDirectorであるFlynn教授にNMR基本的操作と生化学サンプルの測定法について指導していただき、まだ感度という点では質量分析計には及びませんが、検出された分子の構造決定という点においては今後強力なツールであることを改めて実感しました。

さらに滞在期間中はちょうど学部生対象の分析化学実験が行われており、ガスクロマトグラフィーやGC/MSの操作説明や、得られたデータの解析について学生さんたちとディスカッションを通して交流する機会を得ることができました。

2ヶ月という短い間でしたが、大変有意義で貴重な時間を過ごすことができました。



久岡 一恵 医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門 薬学分野 薬効解析科学 助教

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース

訪問した国：アメリカ合衆国

期間：平成23年11月12日～平成23年11月18日

研究機関名等：National Institute on Drug Abuse (NIDA), NIH

受入研究者等：Chief Teruo Hayashi

1 初期の目的の遂行状況

私は2011年11月12日から16日にかけての5日間、アメリカ合衆国ワシントンDCにおいて開催された第41回北米神経科学会（41th Annual Meeting of the Society for Neuroscience; SfN2011）に参加させていただきました。当会議は神経科学分野における最大規模の研究会であり、世界中から3万人以上の研究者が参加し、脳・

神経系に関する学術的議論及び交流を深める場となっています。5日間にわたり、連日3,000題以上のポスターが午前、午後と入れ替わり、それと並行して数十もの公演、シンポジウム、ワークショップが開かれました。私はAntidepressants activate fibroblast growth factor receptor (FGFR) signaling in glial cells: Involvement in glial cell line-derived neurotrophic factor (GDNF) production. (グリア細胞において抗うつ薬はFGFRを活性化させる：GDNF産生への関与) という題名でポスター発表を行い、その内容について参加者らと討論を行いました。また、ワシントンDCに隣接するメリーランド州ボルチモアにある国立薬物乱用研究所（National Institute on Drug Abuse; NIDA）を訪問し、施設内の見学等させていただきました。

2 得られた成果

私のポスター発表においては多くの先生・研究者の方から様々な質問やアドバイスを頂き、大変有意義なものとなりました。これらの議論を通じて得られた知見を今後の研究にフィードバックし、より良い研究内容へと展開させていきたいと考えています。また、多くのシンポジウム、オーラル発表のセッションにおいて、著名な研究者の最先端の研究発表を聞くことができ、大変勉強になりました。現在共同研究を行っている研究者とも打ち合わせを行い、今後の共同研究を含む継続的な関係を築くことができました。今回の渡航について、学会参加および研究室訪問のいずれにおいても非常に貴重な経験ができたと考えています。最後になりましたが、このような機会を与えてくださいました本学医歯薬学総合研究科若手研究者等海外派遣プログラムの関係者の皆様に御礼申し上げます。



高橋 真 医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門 保健学分野 健康・スポーツ医科学 講師

コース名：若手研究者派遣コース

研究を行った国：アメリカ合衆国

期間：平成23年9月1日～平成24年3月1日

研究機関名：University of Missouri

受入研究者等：准教授 Dr. Paul J. Fadel

1 初期の目的の遂行状況

今回、若手研究者等海外派遣プログラムを利用して、平成23年9月1日から平成24年3月1日までの半年間、アメリカのミズーリ大学医学部のFadel博士の研究室

でヒトの神経性循環調節に関する研究を行いました。

循環調節、特に血圧調節機能は各臓器の働きを維持するための血液供給において重要です。血圧調節の中でも動脈血圧受容器反射は、適切な動脈血圧を維持する上で最も重要な役割を担っています。Fadel博士の研究室では、ヒトの頸動脈洞圧受容器に関する研究の世界的トップラボの1つです。そこで、圧受容器反射による四肢の末梢血管の血流調節に関する実験を行いました。

2 得られた成果

動脈血圧受容器反射による血圧は血管コンダクタンスによって調節されていることが明らかとなっています。しかし、全身の血管で一様に調節がなされているのか否かについては未解決の問題でありました。そこで、上腕動脈と大腿動脈の血管コンダクタンスを同時に計測し、検討を行いました。その結果、圧受容器反射による血圧調節では上腕動脈と大腿動脈の血管コンダクタンスの貢献は大きく異なることが明らかとなりました。近年、上肢と下肢では血管機能や加齢の影響などが異なることが明らかとなりつつあります。本研究は若年健常者での検討に留まっていますが、下肢に麻痺のある脊髄損傷者や高齢者などの血圧調節の異常について、研究を進めていく上で、重要な知見であると考えられます。

最後に、今回の滞在ではアメリカの研究事情を実感することができ、自分自身の今後の研究について、非常に多くのことを学び、考えることができました。このような機会を与えて頂きました本プログラムの関係者の皆様に心より感謝申し上げます。


梁 楠 医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 保健学分野 生理機能情報科学 助教

コース名：若手研究者派遣コース

研究を行った国：アメリカ合衆国

期間：平成23年10月7日～平成24年4月26日

研究機関名：University of Texas Southwestern Medical Center

受入研究者等：准教授 Dr. Scott A. Smith

1 初期の目的の遂行状況

若手海外派遣プログラムを利用して、私は平成23年10月7日から平成24年4月26日までの約6ヶ月間、アメリカ合衆国のUniversity of Texas Southwestern Medical Centerのスミス博士の研究室で高血圧の神経性循環調節に関する研究を行いました。

高血圧のリハビリテーション戦略として運動療法が有効とされていますが、高血圧患者において随意運動に伴う循環応答は健常者と比べ過常であることが明らかにされています。そのメカニ

ズムについて、末梢筋機械受容器反射と筋代謝受容器反射は高血圧において亢進していることが報告されていますが、中枢運動指令に伴う循環調節は変化しているかどうかは明らかではありません。今回の研究留学では、ヒト本態性高血圧モデルである自然発生高血圧ラット (spontaneously hypertensive rat, SHR) と対照ラット (Wistar-Kyoto rat, WKY) を用いて、非麻酔除脳モデルで中脳歩行誘発野 (mesencephalic locomotor region, MLR) の電気刺激によって誘発される運動に伴う循環応答について調べました。具体的には、上丘前縁で除脳したラットはMLR同定後に筋弛緩薬を投与したうえで、MLR刺激による循環応答と神経活動応答についてSHRとWKYで比較を行いました。

2 得られた成果

高血圧モデルにおいて、中枢運動指令に伴う循環調節は健常モデルと比較して変化しているかどうかを明確にすることを目的に実験を行いました。その結果、MLR刺激 (20, 30, 40, 50 μ A, 30秒間) に伴う昇圧応答はWKYに比べSHRでは有意に高値を示しました。また、腎交感神経活動の増加量もWKYに比べSHRでは有意に多かったです。一方、MLR刺激の運動閾値及び脛骨神経活動については両群では差が認められなかったです。さらに、動脈圧受容器除神経 (baro-receptor denervation) を行ったWKYとSHRにおいても昇圧応答と腎交感神経活動では群間で同様の差が認められました。以上の結果をまとめると、筋機械受容器反射と筋代謝受容器反射の影響および動脈血圧反射の影響を除外した状態で、MLR刺激によって誘発される運動に伴う循環応答はWKYに比べSHRでは有意に大きかったです。すなわち、高血圧において、中枢運動指令による循環応答が亢進していることが示唆されました。

本研究成果について、平成24年4月21日から25日にかけてSan Diego Convention Centerで開催されたExperimental Biology 2012学会で発表しました。最後に、今回のプログラムを通してアメリカ合衆国で研究・実験が遂行できただけでなく、世界トップレベルの研究者とディスカッションができたこと、新しい友人と知り合えたことは私の一生の財産になると思います。このような機会を与えてくださった本プログラムの関係者の皆様に深謝申し上げます。


山根 伸吾 医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門 保健学分野 作業機能制御科学 助教

コース名：若手研究者派遣コース

研究を行った国：韓国

期間：平成24年3月25日～平成24年5月26日

研究機関名：大田保健大学

受入研究者等：教授 盧鍾秀

1 初期の目的の遂行状況

多くの作業療法理論の概念枠組みにおいて、作業への文化の影響が述べられていますが、どのように影響しているかについては、これまで具体的な検討は行われていません。本研究は、文化の違いにより「価値があると考えられている活動 (作業)」

に違いがあるかについて、調査することを目的としました。

まず、大田保健大学の盧鍾秀氏、ソウル大学病院の李京眠氏、SISOのJi Seokyeon氏の支援により、作業に関するアンケートを日本語から韓国語に翻訳しました。そして、訪問した大学から、講義の依頼を受けたため、その講義の際に、本研究のアンケートを韓国の作業療法学専攻学生に対して実施し、作業の概念について、調査を行いました。

2 得られた成果

韓国の作業療法学専攻学生48名から作業に関するアンケートが得られました。詳細な分析は今後行っていく予定ですが、得られたデータにより、日本と韓国における作業に関して、類似する部分と異なる部分があることが伺えました。この点について文化的な側面から解釈が可能であるかどうか、韓国の共同研究者とともに検討していく予定であります。

また、盧鍾秀氏、李京眠氏、Ji Seokyeon氏の支援により、大田保健大学、延世大学、極東大学などの多くの大学や、保健所、病院、訪問リハビリテーション、デイケアなど作業療法士の臨床現場への訪問を行い、韓国の作業療法の現状と課題、そして、作業と作業療法についてディスカッションをする機会を得ました。また、韓国と日本の文化の違いについてもディスカッションを行い、今後の分析のための手がかりを得ることが出来ました。



小田 啓祐 医歯薬保健学研究院 情報工医学プログラム 特任助教

コース名：若手研究者派遣コース
 研究を行った国：アメリカ合衆国
 期間：平成23年10月17日～平成23年12月16日
 研究機関名：University of Southern California School of Pharmacy
 受入研究者等：教授 Wei-Chiang Shen

1 初期の目的の遂行状況

近年、insulinの経肺投与製剤の開発に代表されるように、肺はタンパク質性・ペプチド性医薬品の投与経路として注目されています。しかし、肺からのタンパク質性・ペプチド性医薬品の吸収率は必ずしも充分ではなく、吸収率を上げるためにドラッグデリバリー技術の介入が検討されています。Shen教授の研究室では、生体内にもともと存在するトランスフェリンレセプターを利用して薬物の吸収改善、PK・PDの制御を行う研究に取り組んでいます。生体内にあるものを利用するため、細胞障害などの副作用が起りにくいと考えられ、Shen教授の手法は臨床に応用することを考えた場合、より安全な薬の創薬につながると考えられます。そこで肺におけるトランスフェリンレセプターを介したドラッグデリバリーシステムの構築を目的として、肺の上皮細胞由来の培養細胞であるCalu-3を用いてトランスフェリンレセプター介在性のエンドサイトーシスについて検討を行いました。

2 得られた成果

トランスフェリンは循環血中に多く存在するタンパク質であり、その生理的役割は細胞内への鉄イオンの運搬です。すなわち、トランスフェリンレセプターは、鉄結合トランスフェリンと結合後細胞内に取り込まれ、細胞内移行後のトランスフェリンは鉄イオンを細胞内で放出後リサイクリングされることが知られています。このリサイクリングメカニズムの速度はとても速く、トランスフェリンの細胞内への取り込みはincubation1時間以内にプラトーに到達することが数多くの細胞で報告されています。しかし、培養腸上皮細胞であるCaco-2細胞においてはincubation時間に依存したトランスフェリンの細胞内蓄積の上昇が8時間まで観察することが示されています。そこで、培養肺上皮細胞であるCalu-3においてはどのようなトランスフェリンの取り込み特性を示すかを検討しました。その結果、子宮頸がん由来の培養細胞HeLa細胞においてはトランスフェリンの取り込みはおよそ1時間までで飽和するのに対し、Calu-3細胞においてはトランスフェリンの取り込みはincubation時間の増加に伴って上昇することが示されました。Caco-2細胞以外にこのようなトランスフェリンの挙動が認められたのは初めてです。この結果から、トランスフェリンと機能性タンパク質の融合タンパク質を肺に投与した際、肺の上皮細胞において融合タンパク質は保持され、循環血中への移行速度は比較的緩やかとなり、薬効の作用時間の延長が引き起こされる可能性が示唆されました。



板倉 勝昌 医歯薬学総合研究科 博士課程2年 創生医科学専攻 視覚病態学研究室

コース名：海外フィールドワーク研究コース
 訪問した国：オーストラリア
 期間：平成23年6月4日～平成24年5月28日
 研究機関名等：Centre for Eye Research Australia, Royal Victorian Eye and Ear Hospital
 受入研究者等：教授 Tien Y. Wong

1 初期の目的の遂行状況

広島長崎の原爆被爆者における放射線と加齢黄斑変性症の関連を調べることが、今回の疫学研究の目的です。ちなみに本研究は放射線影響研究所（放影研）、メルボルン大学、広島大学の共同研究です。

放影研では、眼科検診を含む定期的な健康調査を行っています。その中で撮影された眼底写真をメルボルン大学のCentre for Eye Research Australiaにて解析を行い、加齢黄斑変性症の有病率と放射線の推定線量との関連を調べることが目的でした。解析の方法は、ウイスコンシン大学が標準化した加齢黄斑変性症の評価システムをベースにブルーマウンテンアイスタディで修正されたものを用い、保存された眼底写真のドルーゼンの有無、その種類や数などを測定しました。5000枚におよぶ画像解析はほぼ終了することが出来ました。

2 得られた成果

Centre for Eye Research AustraliaはRoyal Victorian Eye and Ear Hospitalというビクトリア州の基幹病院の中にあり、それぞれの研究ユニットで人工網膜と遺伝子、Quality of Life、画像解析など多様な内容の研究を行っています。

これから、網膜の解析結果と放射線量、その他の交絡因子などのデータを合わせて統計を行っていくわけですが、グレーディングを終えた時点での印象では、初期の加齢黄斑変性症の割合は約5%程度で、進行したものは極僅かでした。加齢黄斑変性症の放射線療法で効果がみられた報告はありますが、放射線による脈絡膜循環障害や直接的細胞障害も考えられます。放射線が網膜にどう影響を与えているか、放射線量との関連がどのようにあるのか興味深いところです。

加齢黄斑変性症の患者数は増加傾向にあり、近年新しい治療薬の開発により、症例によって治療可能な場合もありますが、依然として失明につながる代表的眼科疾患です。放射線の人体への影響が懸念されている今日、放射線との関連を調査し、病体解明の一助となりうる本研究に関わることができて、非常に光栄に思います。

また、今回の留学を通じて、様々なバックグラウンドをもった海外の研究者との交流を深め、オーストラリアという恵まれた環境で生活することができ、大変貴重な経験になりました。



近藤 成 医歯薬学総合研究科 博士課程3年 展開医科学専攻 外科学研究室(当時)
病院 消化器診療科 医科診療医

コース名: 海外フィールドワーク研究コース
訪問した国: アメリカ合衆国
期間: 平成23年5月16日～平成23年12月13日
研究機関名等: メイヨークリニック
受入研究者等: 准教授 Michael L. Kendrick, M.D.

1 初期の目的の遂行状況

2011年5月よりメイヨー・クリニックのVisiting Clinician Programに参加させていただけました。これは、メイヨー・クリニックにおける臨床研修プログラムであり外国人研修生も受け入れています。この度、Gastrointestinal SurgeryのAssociate Professorである、Dr. Kendrickがホストを務めてくださいました。自分は広島大学において、膵切除を伴う外科的治療および膵癌に対する術後補助化学療法についての基礎的研究を行っており、膵疾患に対する外科治療において世界的に有名なMayo Clinicにて研修することで、自分の知見をさらに発展させることができました。Dr. Kendrickは、メイヨークリニックで多くの膵疾患に対する治療に携わっておられ、特に膵臓に対する腹腔鏡手術では世界的に有名な先生であります。このプログラムを通して、膵臓に対する外科的治療の最新技術を学ぶことができました。また、Dr. Kendrickの指導の下、腹腔鏡下膵切除の手術侵襲に関する臨床研究や、膵切除術後の合併症に関する予測因子の臨床研究に携わることができました。

2 得られた成果

Dr. Kendrickは、メイヨークリニックで多くの膵疾患に対する治療に携わっておられ、特に膵臓に対する腹腔鏡手術では世界的に有名な先生であります。約6ヶ月間の研修中に、約50例の腹腔鏡下膵切除術を見学することができました。また、Dr. Kendrickの指導の下、腹腔鏡下膵頭十二指腸切除術に関する手術手順や術野展開の工夫について、論文にする仕事に携わることができました。この一部は、平成24年6月に開催される日本肝胆膵外科学会総会にて、発表させていただくことになっております。また、臨床研究の方では、同じくKendrickの指導の下、膵切除後合併症の予測因子に関する研究や、腹腔鏡下膵頭十二指腸切除術の手術侵襲に関する研究をさせていただきました。本研究の成果は、平成24年5月に米国サンディエゴで開催されるDigestive Disease Week 2012にて、発表させていただく予定です。

最後に、Mayo Clinicは世界でもトップクラスの医学教育システムを有しているといわれています。臨床研究を行うことで、米国の医学教育システムそのものも学ぶことができました。今後もメイヨー・クリニックで学んだことを、臨床や研究に生かしていきたいと思っております。



岩本 明子 医歯薬学総合研究科 博士課程後期2年 口腔健康科学専攻 口腔発達機能学研究室

コース名: 海外フィールドワーク研究コース
訪問した国: カンボジア
期間: 平成24年2月24日～平成24年3月5日
研究機関名等: Wat Bo Primary School
受入研究者等: 校長 Peung Kimchhen

1 初期の目的の遂行状況

ササースダム小学校においては、歯科検診に加え、学級ごとに口腔衛生指導や口腔保健指導を行うことで、口腔内の経時的変化を追うこと、そして指導の定着をねらうという目的が果たされました。また、指導用の紙芝居等を寄贈することができたため、その活用により我々の指導はこれまでも増して定着していくものと思われまます。

ワット・ポー小学校では、模擬授業の前後に無記名自記式の質問紙によるアンケートを実施することができ、研修の効果が明らかとなりました。今回は、前回の渡航時と比較し、より難易度の高い授業を設定しましたが、前回の授業の理解が進んでいたこともあり、十分な理解が得られました。週に1度のブラッキングタイムも導入され、段階的に児童の健康観が育成されている様が見て取れました。

以上のことから、我々の直接の指導だけではなく、日本に居ながらにして継続的に支援していく基盤は大いに固まったものと思われまます。

前回に引き続き、カンボジアの歯科医療従事者や歯学部学生の協力も得られ、活発な意見交換も行われました。人的支援を行うばかりではなく、現地の者へと活動の趣旨を伝えながら、長期的な目線を持って支援することができたことは大きな目的の達成といえます。

2 得られた成果

今回も、現地の歯科医療従事者との協力の機会となったことに加え、この歯科支援活動ならびに現地の口腔衛生等についての活発な意見交換を行うことができました。これまで我々は現地のニーズにこたえながら支援のあるべき姿を模索してきましたが、現在大変良好な関係が築けていることから、その成果を窺い知ることができます。

特に、ワット・ポー小学校での模擬授業は、先生方の理解度もかなり高く、質問紙の結果からも自らの手で児童に対して実践できそうであるという意見が得られています。これは、我々の手でいつまでも人的支援を続けるばかりではなく、活動の主体を現地の者へと徐々にスライドさせていきたいという、長期発展的な面から見て、大きな成果であると考えています。

昨年の活動で、歯科検診の結果を個人に返却できたことにより、歯科を受診した児童も見受けられ、学校保健の観点でも成果が得られています。先生のモチベーションを上げることにも大いに役立ったようです。

また、カンボジア国内の病院歯科による、小学校におけるアウトリーチプログラムを見学する機会にも恵まれました。我々が考えている以上に難易度の高いプログラムが繰り返され、大きな刺激となりました。



大林 泰二 医歯薬学総合研究科 博士課程3年 展開医科学専攻 歯科医学教育学研究室

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース
 訪問した国：マレーシア
 期間：平成24年3月9日～平成24年3月14日
 学会名：15th Ottawa Conference KUALA LUMPUR 2012
 会場：Kuala Lumpur Convention Centre

1 初期の目的の遂行状況

●学会発表

15th Ottawa Conference ポスター発表
 「歯科臨床研修における簡略な質問を用いた質的研究」のタイトルで、当院歯科研修医に記述させた質問を元に行った質的分析、及び結果から得られた評価法の可能性の提示について、発表を行いました。

●施設訪問

15th Ottawa Conference主催大学であるInternational Medical Universityの施設見学、及び教員とのディスカッションを行いました。

2 得られた成果

●学会発表

世界各国から医学教育の専門家が参加しており、会場は熱気で溢れていました。今回の学会は評価に対する研究を主としており、その評価法について、活発な議論が展開されていました。そんな中で発表させて頂き、自分の研究に対して貴重なコメントを頂いた事は、何者にも代え難い経験となりました。また、今後の研究の方向性について再度考察する良い機会となりました。

●施設訪問

International Medical University (IMU) は、クアラルンプール郊外のショッピングモールを改良しキャンパスとして使用している大変ユニークな大学です。

IMUの歯科外来は非常に綺麗、清潔であり、導入されている医療機器も最新のものばかりで、恵まれた環境の中、学生達は熱心に勉強や診療に励んでいました。中でも驚いたのは、基礎実習と並行して臨床実習が行われている事でした。日本では考えられないカリキュラムですが、卒業認定が歯科医師免許となるイギリス式という背景あっての事で、大変興味深かったです。また、Khoo Suan Phaik教授を始め、IMUの先生方との討論は、私が今まで経験したことのないものであり、マレーシアの歯学教育、カリキュラム、卒後教育について学ぶことが出来ました。



西村 瑠美 医歯薬学総合研究科 博士課程後期2年 口腔健康科学専攻 公衆口腔保健学研究室

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース
 訪問した国：アメリカ合衆国
 期間：平成24年3月4日～平成24年3月20日
 研究機関名等：UCLA School of Dentistry
 受入研究者等：教授 Neal Garrett

1 初期の目的の遂行状況

修士課程では、口腔顔面領域知覚の加齢による変化について検討するとともに、摂食・嚥下障害との関連についての研究を行いました。そこで今回は、アメリカで行われている摂食・嚥下機能支援の現状を知ること、また、歯科医療先進国であり、歯科衛生士が独立して診療を行うことができるアメリカの歯科衛生士の業務内容や口腔ケアの実際について知ることを目的として渡航しました。

カリフォルニア大学ロサンゼルス校の歯学部を訪問し、顎顔面補綴科診療室で、アメリカでの歯科治療の現状と大学院での歯科衛生士の業務の見学を行いました。また、日本の歯科衛生士業務や高齢者に対する口腔ケアについてのプレゼンテーションを行い、意見交換も行いました。ロナルド・レーガンUCLA医療センターの嚥下外来クリニックにて、耳鼻科医による摂食・嚥下評価、言語聴覚士による摂食・嚥下訓練を見学し、アメリカでの摂食・嚥下機能支援の現状を視察できました。

歯科衛生士養成課程がある南カリフォルニア大学、ウェスト・ロサンゼルス・カレッジを訪問し、歯科衛生士教育の現場を視察しました。主に、局所麻酔の実習・講義、歯周病についての講義、スケーリングの実習、臨床実習などを見学しました。

2 得られた成果

カリフォルニア州の歯科衛生士業務は主に歯科予防処置が中心であり、局所麻酔を歯科衛生士自らがし、スケーリング・ルートプレーニングを行っているところを実際に見学することができました。南カリフォルニア大学、ウェスト・ロサンゼルス・カレッジでは、歯科衛生士の講義、実習を見学し、教育カリキュラムについての情報も得ることができました。医療保険制度などが異なるため、単純に比較することは出来ませんが、アメリカでは歯科医師と歯科衛生士の業務の分担が明確であるため、各々が高い専門性を発揮できる環境にあると感じました。

また、耳鼻科医、言語聴覚士による摂食・嚥下評価、摂食・嚥下訓練についても見学でき、様々な職種の方と意見交換を行ったことで、今後歯科衛生士が他職種とどのように協力し、どう口腔ケアを行っていくかを考えるよい機会になりました。

また、研究室のミーティングに参加し、日本の歯科衛生士の行う業務と口腔ケアについてのプレゼンテーションを行い、研究室の方々と意見交換したことで、自身の研究と関連する他の研究についての情報を得ることができ、今後私が研究を進めていく上で極めて有意義なものとなりました。この機会に得られた様々な議論の内容を、今後の研究に活かしていきたいと考えています。



寺澤 沙織 医歯薬学総合研究科 博士課程前期2年 薬科学専攻 生薬学研究室

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース

訪問した国：中国

期間：平成23年10月19日～平成23年10月23日

研究機関名等：瀋陽薬科大学

受入研究者等：教授 Jin Yin

1 初期の目的の遂行状況

今回の目的の一つとして挙げていた『The 6th CCTNM-KSP-JSP Joint Symposium on Pharmacognosy (Shenyang, PRC)』における発表では、現在までの研究成果をポスター発表し、また他の参加者の方の口頭発表やポスターを見る機会を得ました。

また、同シンポジウムの主幹校である瀋陽薬科大学の方々と交流する機会があり、実験内容や手順、また研究生活や大学のカリキュラムについてなどの様々なお話を聞くことができました。さらに瀋陽薬科大学の方の案内で現地のフィールドワークもすることができ、日本では珍しい植物を多く観察することができました。

インターネットや本によってではなく、実際に海外へ赴き現地の方と接したり様々なものを見学したりすることで、現地の研究実態についてより深く理解できたのと同時に、日本の研究や文化について異なった視点から考えることができる良い機会でありました。

2 得られた成果

前述のように、私は今回『The 6th CCTNM-KSP-JSP Joint Symposium on Pharmacognosy (Shenyang, PRC)』において、これまでの研究成果についてポスター発表を行いました。まずポスター作製において得られた成果としては、基本的に口頭での説明を加えられないポスターに、英語を用いて必要な情報を分かり易くまとめ、かつより伝えたい情報を強調して掲載する技術を得ました。

また、現地で同じ分野で研究をされている方との交流を通じて、その分離・精製方法やアプローチの方法等、実に様々な点において国による違いがある事を再認識しました。今回訪問した中国は伝統的な中医学の知識が今でも盛んに利用されているため、古くから漢方を中心とする天然物を薬として使用し、また研究してきた日本と類似点も多く、その各種実験操作や研究背景等には以前から大変関心を持っていましたが、今回のシンポジウムで研究発表された中には西洋医学的な考え方を取り入れた内容の研究もあり、とても興味深く思いました。

このように、直に見聞きすることで国によって研究内容、また実験設備・研究の進め方等が大きく異なることを知り、さらに当該研究分野への理解が深まり、より広い視野で物事を考えることができるようになったと感じます。今回得た様々な知識は今後の研究に役立てられることと思います。



Hadoush, Hikmat 保健学研究科 博士課程後期3年 保健学専攻 上肢機能解析制御科学研究室

コース名：海外フィールドワーク研究コース

訪問した国：Malmo, Sweden

期間：平成23年9月24日～平成23年10月02日

研究機関名等：Lund University

受入研究者等：教授 Lars Dahlin

1 初期の目的の遂行状況

The clinical Hand unit at Lund university is an integrated center that includes all departments regarding the hand, e.g. it has outpatient hand clinic, hand operation department, hand rehabilitation clinic and hand research department in just one unit. In addition, the center is carrying out many researches regarding the brain plasticity (using functional MRI, a hemodynamic based brain mapping) after hand injury and

after rehabilitation, as well researches on sensory re-learning for the different type of peripheral nerve injured patients. Here at Hiroshima University, we have the same research interests and research projects, but we use Magnetoencephalography (Magnetic field based brain mapping). Therefore, our visit's goals were:

1. Exchange the research ideas in brain plasticity for hand injury.
2. Discuss up-to-date research data and future research projects
3. Get the theoretical and practical skills regarding sensory examination and sensory re-learning techniques used in their clinic.
4. Explore the hand clinic unit structure, facility and management system.

2 得られた成果

The results we achieved could be divided into two main categories. In the clinical based, we have been trained on up-to-date course of sensory re-learning technique and practicing it in their rehabilitation outpatient clinic. In addition, we had lectures concerned patients with cold sensitivity and re-warming treatment technique, rehabilitation following replantation/revascularization of forearm/hand/fingers, and we had observations at brachial plexus injury clinic and child habilitation clinic. On another hand, in the scientific research point view, we observed brachial plexus injury and carpal tunnel syndrome research projects. we had discussions with many professors and doctors, in which we exchange and compared the data of our projects that measured using different brain mapping tools (e.g. MEG data vs. fMRI data for common research projects), and we developed ideas for our future research projects, which we will start them from this October.

In addition, we deepened the academic relationship between our department and their department to be more beneficial in the future.



中村 藍子 医学部医学科6年

コース名：学部生海外研究派遣コース

訪問した国：ドイツ

期間：平成24年3月15日～平成24年4月14日

研究機関名等：Ruhr University

受入研究者等：教授 Josune Guzman Rotaache

1 初期の目的の遂行状況

当初の目的は、日本とドイツの医療を比較することで、より理解を深めることやさまざまな刺激を受けることで、将来の選択肢を少しでも増やすことでした。さらには、自分の英語、ドイツ語を駆使して、コミュニケーションのスキルを上げるということでした。後者に関しては、スキルが上がったかどうかはわかりませんが、少なくとも英語の必要性を身に染みて感じました。久しぶりにドイツ語を使ってみて、大分思い出すこともでき、先生方ともドイツ語で話した方が距離が縮まり、より一員として受け入れてくれた気がしました。前者に関しては、麻酔科の実習だったので、ずっとオペ室（手術室）にいたせいか、外科の先生達にもいろいろ話を聞かせていただき、麻酔科だけでなく、外科のことについても色々知ることができました。一概に、日本の医療の方がいいとか、ドイツの方がいいということとは言えず、日本の進んでいる所もよくわかりましたし、逆にドイツを見習った方がいいようなことも見つけることができました。

同じ医学生と交流する機会もあり、それぞれの国の医療のこと、自分たちの将来のことを話す貴重な体験もできました。今回の留学でドイツの医療を見たことで、自分の理想の医師像、将来どのように働きたいのか、などを深く考えることができ、とても貴重な経験になりました。

同じ医学生と交流する機会もあり、それぞれの国の医療のこと、自分たちの将来のことを話す貴重な体験もできました。今回の留学でドイツの医療を見たことで、自分の理想の医師像、将来どのように働きたいのか、などを深く考えることができ、とても貴重な経験になりました。

2 得られた成果

当初の目的を達成できた事が今回得られた成果だと思っています。ドイツで4週間実習して思ったことは、ドイツでは医師と患者さんの距離が近いということです。一番それを感じたのは、麻酔をかける時で、患者さんが麻酔で眠る前に「どんな夢がみたいかもう考えましたか？例えば、この前の休みの旅行とか。」「海辺で太陽を浴びている夢を見ている内に手術は終わりです。では、また後でね。」など、日本では聞いたことがないような方法で、患者さんの不安を和らげていました。日本で麻酔をかける時には、「大丈夫ですからね。ゆっくり大きな呼吸をしてくださいね。」などの声掛けぐらしか記憶に残ってなかったので、患者さんの不安の和らげ方にも色々な方法があることを知りました。この事が私にはとても新鮮で、自分が医師になった時に、患者さんの不安を取り除くための方法として参考にしてみようと思いました。ドイツの医学生とも交流する機会があり、ドイツと日本の医療の現状の違いなどを知ることができ、自分の理想とする医師像を考え直すいい機会になりました。ドイツはEU（欧州連合）加盟国でありドイツ以外の国で働くことも簡単なため、多くの学生が将来ドイツ以外で働きたいと言っており、とても意欲的だと感じました。それが刺激となり、医師になってからもまた外国の医療を見に行きたいと思いました。



大西 梓 歯学部歯学科5年

コース名：学部生海外研究派遣コース

訪問した国：カンボジア

期間：平成24年2月26日～平成24年3月7日

研究機関名等：ササースダム小学校、ワットポー小学校

1 初期の目的の遂行状況

当初の予定通り、ササースダム小学校とワットポー小学校の2校を訪問しました。ササースダム小学校では子どもたちの口腔内写真撮影、口腔内診査を行い、口腔内の状態に合わせてセメント充填や歯石除去、そして抜歯の処置が指示され、わたしはその補助にあたりました。子どもたちは歯科治療の経験がほとんどない様子で、配られたカルテや準備された器具に興味深そうでした。口腔内の状況については、想像していた以上にう蝕罹患率が高かったです。萌出したばかりであろう永久歯にもすでに大きな窩ができていたり、残っている乳歯も歯冠は崩壊して残根状態であったりする子どもが非常に多かったです。ササースダム小学校はシェムリアップ市内中心部から離れており歯科医院に通うことは困難なため可能な限りの治療を行い、最後にはフッ素塗布とブラッシング指導を行いました。同時に紙芝居や模型を用いて、歯の大切さやう蝕の予防について学習しました。ワットポー小学校はすぐそばに無料で治療を受けることのできる歯科医院があるため検診と予防治療のみを行い、う蝕のあった歯をイラストを交えてカルテに記入し子どもたちに渡しました。ワットポー小学校では教員に対する歯科保健指導と検診も行いました。また、アンコール小児病院も視察しました。

大切さやう蝕の予防について学習しました。ワットポー小学校はすぐそばに無料で治療を受けることのできる歯科医院があるため検診と予防治療のみを行い、う蝕のあった歯をイラストを交えてカルテに記入し子どもたちに渡しました。ワットポー小学校では教員に対する歯科保健指導と検診も行いました。また、アンコール小児病院も視察しました。

2 得られた成果

どちらの小学校でもう蝕のある子どもが非常に多く、とても驚きました。一方でワットポー小学校で教員に対して行った検診結果によると教員のう蝕罹患率はそれほど高くないことがわかりました。この原因はカンボジアの今の子どもたちの習慣にあるようでした。朝から夕方まで検診を行った小学校で子どもたちの様子を見てみると、休憩時間・授業時間に関わらず果物やお菓子を口にしていることがよくありました。長年続いた戦争・内戦が終わり徐々に国が豊かになってきて、子どもたちの身近にお菓子があふれるようになったからでしょうか。これはおそらく教員たちが幼かった頃とは全く状況が異なるため、口腔内の状態にここまでの差がついてしまったのでしょう。このように食生活が豊かになったことは素晴らしいことなので、う蝕予防のためにそのお菓子をすべて取り上げてしまうというのは適切な方法ではないように思えます。今のカンボジアでう蝕を減らすためには、まずは、歯磨き習慣の徹底や、歯や口腔の重要性の理解が重要であると思いました。今回の活動の中では子どもたちに親しみのある題材を取り入れた紙芝居などを使ってう蝕予防の呼びかけを行いました。また、長年の習慣を改善していくには子どもたちに対する呼びかけにとどまらず、教員や保護者に対する呼びかけも同時に行う必要があると感じました。

アンコール小児病院を視察してカンボジアの実際の医療現場を見聞きすることにより、必要な医療を受けることができずに亡くなってしまふ子どもたちの数が非常に多いことがわかりました。カンボジアでは人口の約39%を15歳未満の子どもが占めているとされており、これからの国の発展を担う重要な世代です。HIVやその他の感染症などによりその子どもたちが苦しんでいるにも関わらず、病院に向かう交通費が払えないため受診できないケースが多いようです。医療従事者を含んだ大量虐殺の歴史的背景も持つカンボジアで今私たちができることは何か、それは実際現場で働くことかもしれないし医療施設や医療従事者を増やす活動に参加することかもしれません。ワットポー小学校の教員の言葉の中にもありましたが、いずれカンボジアが一つの国として自立できるようにするためには医療従事者を志す者としてだけでなく一人の人間として何が求められているのか、深く考えるきっかけとなりました。

今回の渡航はボランティア活動ということでしたが、実際活動を終えてみると現地で見えたこと聞いたこと学んだことがとても多く、非常に充実していました。ありがとうございました。



辻 薫子 歯学部歯学科5年

コース名：学部生海外研究派遣コース
訪問した国：カンボジア
期間：平成24年2月27日～平成24年3月5日
研究機関名等：ワットポー小学校、ササースダム小学校

1 初期の目的の遂行状況

カンボジアは、ポルポト政権の知的階級の虐殺によって、医療システムが根本から崩壊した国です。歯科として例外ではなく、ポルポト政権後、歯科医師は30人しか生き残りませんでした。現在450人まで増えましたが、首都プノンペンに集中している状況です。また、虫歯を予防する教育も浸透していないようです。

今回、私はNGOひろしま（旧平和貢献NGOsひろしま）の一員として、歯科支援活動を行いました。

最初に訪れたササースダム小学校は、シェムリアップから車で約30分の距離の、農村部にある小学校でした。日本の小学校とは異なり、教室は電気が通っておらず薄暗く、水は井戸からくみ上げる方式でした。そこでは、まず口腔内写真を撮った後、口腔内診査を行いました。必要に応じて、抜歯、セメント充填、歯石除去を行いました。最後は、歯磨き指導やフッ素塗布を行いました。検診の待ち時間を利用して、歯磨きをしないで歯が虫歯だらけになってしまった白雪姫やうさぎのお話の紙芝居を行い、歯を磨く事の大切さを説きました。

次に訪れたワットポー小学校は、シェムリアップのマンモス校で、先生方、子供達の双方が活気溢れる学校でした。そこでは、治療は行わず、口腔内診査を中心に行いました。検診の結果を児童や先生方に返す事で、自身の口腔の健康を見直す良い機会になったと思われます。先生や児童に対する予防教育も行いました。

検診の間の時間を使って、現地の病院視察を行い、カンボジアの医療の現状を学ぶ事が出来ました。

2 得られた成果

『まさか、こんなにもひどいなんて』子供達の口腔内を見た最初の感想でした。日本では想像出来ない状態でした。小学校の時点で六歳臼歯が虫歯であったり、残根状態の乳歯の下から永久歯が生えていたり、栄養状態の悪さから形成不全であったり、子供なのに歯石が溜まっていたりと、ひどい状況でした。

カンボジアの小学校の裏には売店が併設されており、休み時には子供達はおやつを自由に買い、無意識のうちにだらだら食いをしています。さらに、子供達やその親でさえも歯磨きに対する意識も低いです。また、歯科医師免許を持っている歯科医師は国内で450人と少なく、歯科診療の値段も高価であり歯が痛くても治療することは難しいです。よって、児童の口腔内は大変な状況になっています。このような事実は通常の観光では見る事が出来ず、カンボジアの歯科医療の厳しい現実を知ることが出来ました。

また、小学校の校庭や教室を用いて診療を行うため、机をベッド代わりにし、ペンライト片手に診療する様子や、器具をミネラルウォーターで洗浄する様子など、ボランティアならではの光景を見ることが出来て新鮮でした。

まだ臨床実習を経験していないため、出来ることが限られており、歯がゆかったですが、検診が終わり、『ありがとう』と笑顔で帰っていく子供達を見て、歯科医師としての将来の仕事にやりがいを感じました。

今回は学生として訪れましたが、次は歯科医師として訪れたいと感じました。



松浦 志織 歯学部口腔健康科学科3年

コース名：学部生海外研究派遣コース
訪問した国：カンボジア
期間：平成24年2月25日～平成24年3月3日
研究機関名等：ササースダム小学校、ワットポー小学校

1 初期の目的の遂行状況

「毎日歯磨きをしていますか」という発問に対して「しています」と答える児童がほとんどであったため、自分が思っていた以上にブラッシングの習慣が身につけていることがわかりました。しかし、それにもかかわらず歯が蝕まれている児童がとても多かったため、適切なブラッシング方法を習得できていないことを知りました。そのため、今回の歯科保健指導では歯ブラシの持ち方・当て方・磨く順番などの基礎を模型や模造紙を使って教えました。また、紙芝居を用いてう蝕になる原因(甘いものを食べる。その後、歯磨きをしないで寝る)を教えました。

歯ブラシの持ち方や当て方がわかっている、力任せにゴシゴシ磨いている児童もいました。このときは通訳の方に「ゆっくり、丁寧に」のクメール語を教えてもらい、直接児童に話しかけて指導しました。

2 得られた成果

初めて児童の口腔内を見たとき、日本の児童の口腔内との差にただただ驚きました。蓄積された歯石、ほとんど欠けている前歯、膿孔、大量の出血などが普通にありました。きれいな歯ばかり見てきた私にとってこれだけでこれからの活動への思いが変わりました。短い期間でたくさんの事を吸収していこうと思いました。

歯科保健指導をすることは日本でもあまり経験がない中、異国の地で行うことにとても不安でしたが現地と一緒に活動する先生や先輩方が支えてくださったおかげで自分のできる限りのことを行えたと思います。自分の伝えたいことをどのようにしたら上手く伝わるのか、ちゃんと理解してくれるのかなど疑問がありました。しかし一緒に活動した衛生士の先生が児童に質問・指導するのを見て確かめ方を学びました。自分も先生方の指導方法を真似して指導しました。今回は必至だったので真似るのに精一杯なところがありましたが、日本に戻って歯科保健指導する機会があればアレンジしながら考えて指導したいと思います。また、比較的田舎にあるササースダム小学校と都会にあるワットポー小学校の子供たちの体格、服装の違いに驚きました。一つの国の中で貧富の差が大きく表れていることは日本では考えられないことです。今回カンボジアに行って歯科保健学習もできましたが、カンボジアの文化や日本との違いについても学ぶことができました。

この活動を通して歯科衛生士になることへの思いが強くなり、様々なことにチャレンジしたいと思いました。またこのような機会があれば、是非参加したいと思います。



野原 佳織 歯学部口腔健康科学科3年

コース名：学部生海外研究派遣コース
 訪問した国：カンボジア
 期間：平成23年2月25日～平成23年3月1日
 研究機関名等：ササースダム小学校

1 初期の目的の遂行状況

今回、歯科支援活動に参加した目的のひとつは、発展途上国であるカンボジアの口腔衛生ならびに歯科疾患の現状を知ることでした。ササースダム小学校の子供たちはみんな挨拶をすると笑顔で返してくれ、とてもかわいかったです。実際に子供たちの口の中を見てみると、きれいな歯をしている子は少数で、ほとんどの子の歯は着色やう蝕があり汚れていました。毎日しっかりと歯を磨いているとは思えなかったです。二つ目の目標は、子供たちに正しいブラッシング方法を指導し、ブラッシング習慣を定着させることでした。私は、同じ学科の二年生三人と、歯科衛生士さん三人とともに小学校一年生と四年生のクラスを順番に回って歯科保健指導を行いました。歯科衛生士さんの指示のもと、私たち学生は歯ブラシ、手鏡、染色液、アルミホイルなど、指導に必要な道具を準備しました。子供たち一人ひとりに染色をした後、正しいブラッシング方法を一人ひとりに説明する時間がありましたが、これがとても難しかったです。子供たちには言葉が通じないので、間違った方法で磨いていたら「それは違うよ。」という身振りや表情をし、正しい方法で磨けたら「よくできたね。」とほめる身振りや表情をして、何とか伝わるように努力しました。これからも歯磨きを続けるように指導しましたが、子供たちはまだ毎日歯を磨くという習慣がなく、環境も整っていないので、継続した指導が重要だと気がきました。

2 得られた成果

ササースダム小学校で、歯科衛生士さんたちと歯科保健指導をするという貴重な経験をさせていただいて、将来歯科衛生士を目指す立場の人間として学ぶことがたくさんありました。歯科衛生士さんは、小学一年生と四年生にそれぞれの年齢に合った話をし、わかりやすい指導をしているのを見て日々学校で学んでいることを実際に目で見ることができたのでとても勉強になりました。また、ササースダム小学校の子供たちに毎日歯を磨くことを伝えることができました。私たちが正しい磨き方を教えたので、実際に自分で正しく歯を磨けるようになった子供たちの人数も増え、指導してよかったと思いました。何回もこのボランティアを繰り返すことで子供たちにブラッシング習慣が身につくと思います。カンボジアに行く前は、まだ歯科衛生士の資格を持っていない私たち二年生は、カンボジアで何ができるのか不安でいっぱいでしたが、一緒に参加した先生や研修生の人たち、上級生の人たちが私たちにできることを考えてくださり、指導方法をやさしく教えていただきました。そのおかげで、私たちは充実したボランティアをすることができ、みなさんに本当に感謝しています。この経験は、自分にとって将来を考える大きな一歩になり、ボランティアに参加して本当によかったと心から思います。来年もチャンスがあれば、またカンボジアに行きたいです。



Jihwan Myung 医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 統合バイオ 研究員

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース
 訪問した国：アメリカ合衆国
 期間：平成24年5月15日～平成24年5月29日
 研究機関名等：SRBR Meeting, University of Michigan, MBI
 受入研究者等：教授 Daniel Forger

1 初期の目的の遂行状況

Prior to the SRBR, I visited Prof. Daniel Forger's group and presented our lab's works at 12th Experimental Chaos and Complexity Conference. The applied mathematicians who attended my presentation helped me learn how to explain my research to non-biologists. Forger's group was excited to learn about the experimental data we have produced. Jaekyoung Kim at his group showed how discrepancies in our observations can be explained and Dan DeWoskin has already initiated simulations to see how much of our experimental data can be explained by the current theory.

At SRBR, Society for Research on Biological Rhythms, I presented two posters that summarized both published and on-going works. The presentations were received with excitements and were constantly visited by people and lasted until 11:30 PM (which officially closes at 10:00 PM). Our experimental discrepancies with the established belief have been confirmed by major researchers in the field, such as Prof. Martha Gillette, and by the person who created the experimental system himself, Prof. Joseph Takahashi. Other experimental finding (that had been against the traditional belief) was confirmed by Prof. Erk Herzog, who had seen the same phenomenon in his lab. Overall, the presentations were success. I have received about 10 name cards and 7 requests for my manuscript.

2 得られた成果

The best result of the trip this time was the confirmation of our work, which was against the established belief but which has actually been observed in a number of laboratories. The communication I had through the meeting renewed our confidence in our work and invited new collaborations with other people in the field.

Through visits to University of Michigan and Mathematical Biosciences Institute (MBI), I had found the theoretical explanations for the experimental phenomenon I have been observing. The unusual dissociation of the rhythms in two different mRNA transcripts was consistent with the theory that Daniel Forger's group has been developing. His group will expand their theory to the network of cells and will collaborate with us to fit biologically correct parameters. At the Mathematical Biosciences Institute (MBI), which I visited after the SRBR meeting, I started new collaboration with Drs. Diekman and Belle to explain electrophysiological recordings that Dr. Belle made. Overall, the trips brought me and our lab new collaborators and ideas and helped achieve more than what was planned for.



(12th Experimental Chaos and Complexity)

(At SRBR: Left, with Prof. Martha Gillette; Right, with Prof. Joseph Takahashi)

(Left: with Prof. Daniel Forger)

(Left: with Drs. Casey Diekman and Mino Belle at Mathematical Biosciences Institute; the diagrams on the whiteboard has been deleted since it describes unpublished works.)



大久 真幸 医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門 疫学・疾病制御学 研究員

コース名：海外フィールドワーク研究コース
 訪問した国：(1)ベトナム・(2)カンボジア
 期間：平成24年8月15日～平成24年8月23日
 研究機関名等：(1)ビントゥアン州保健局 (2)国立母子保健センター
 受入研究者等：(1)局長 Dr. Nguyen Van Nhon (2)部長 Dr. Svay Somana

1 初期の目的の遂行状況

ベトナム・カンボジアにおける肝炎ウイルス感染状況を把握するために、疫学・疾病制御学研究室では広島大学疫学研究倫理審査委員会、ベトナムビントゥアン州保健局及びカンボジア保健省より承認を得て、各国と協力して疫学調査を行っています（ベトナムでは2011年度、カンボジアでは2010年度から）。この度、若手研究者等海外派遣プログラムの助成を受け、第2回ベトナム調査、及び、第6回カンボジア調査に同行させていただきました。

【ベトナムでの活動】 田中教授とビントゥアン州保健局のNhon局長との打ち合わせに同席させていただきました。打ち合わせでは田中教授が前回の調査結果を報告され、また、今後の調査予定についての確認が行われました。その後、プオックロック、プオックホイにおいて計340人の採血と前回の調査参加者への健康手帳の返却と結果説明が行われました。また、ビントゥアン州ラジタウンの病院の見学をさせていただきました。

【カンボジアでの活動】 調査には保健省のDr.Somana, Dr.Sirany, Dr.Olineが同行し、クロバイリエル地域とチュレイ村において計195人の採血が行われました。また、チュレイ村において前回の調査参加者への健康手帳の返却と結果説明が行われました。

検体は現地で遠心分離を行い、得られた血清を持ち帰りました。当研究室にて解析を行う予定です。

2 得られた成果

この度、ベトナム・カンボジアの調査に同行させていただいた事で大変多くのことを経験させていただきました。国外で調査を実施するためにはチームで協力し、入念な打ち合わせを行い、緻密な事前準備が必要であるということを知りました。また、解析するためのデータは多くの労力を伴ってようやく得られるということ、得られたデータはとても貴重であることが理解できました。

カンボジアの調査では、自分の名前が書けない人、自分の年齢を正確に把握していない人が多くいました。日本では通常想定できないことがあり、このことは国外での調査の困難さを知ると同時に、国外の調査の実施のためにはその国の文化的背景を知る事が重要であると感じました。

また、採血に関しては、初めての参加者もあり、参加者に対する健康状態や精神的な面に対して注意深い配慮が大切であることを教えていただきました。以前の所属でコンピューターシミュレーションばかりを行ってきた自分には知る事ができなかった多くの事が経験でき、医学分野において研究を行う上で世界を広げる大きな機会となりました。このような機会を与えてくださった田中純子教授、及び、若手研究者等海外派遣プログラムに関わっておられる先生方に感謝致します。



安田 季道 医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門 医学分野 麻酔蘇生学 助教

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース
 訪問した国：英国
 期間：平成24年5月8日～平成24年5月14日
 研究機関名等：The Craiglands Hotel (学会会場)
 受入研究者等：教授 Philip Hopkins (主催者)

1 初期の目的の遂行状況

昨年、バーゼル大学で悪性高熱症素因者におけるJP-45の遺伝子多型の発現頻度に関する研究を行いました。その後、バーゼル大学で引き続きその遺伝子多型の筋細胞内における機能的解析が行われました。今回、その成果をイルクリーで開催された第31回European Malignant Hyperthermia Group (EMHG) の年次集会で発表しました。質疑応答の中には新たな研究テーマの礎になりそうなものが認められました。

【カンボジアでの活動】 調査には保健省のDr.Somana, Dr.Sirany, Dr.Olineが同行し、クロバイリエル地域とチュレイ村において計195人の採血が行われました。また、チュレイ村において前回の調査参加者への健康手帳の返却と結果説明が行われました。

2 得られた成果

今回の発表ではJP-45の2つの遺伝子多型 (P108L, G150A) が存在する場合、wild typeに比較して高濃度KCl下でないと細胞内カルシウムの増加が認められなくなることを発表しました。われわれは、悪性高熱症の確定診断法としてカルシウム誘発性カルシウム放出速度の測定を行っています。この検査は、リアノジン受容体の同部位に同じアミノ酸変異が認められた場合、結果はほぼ同様になるはずだと考えられています。しかし、実際にはその結果に違いが認められることがあります。今回の結果は、筋細胞内カルシウム濃度をコントロールしているタンパク質の遺伝子多型がそのタンパク質の機能に影響を及ぼすことで、このような違いが生じている可能性を示唆しています。この可能性を確かめるために更に研究を行っていかなくてはなりません。



鈴木 茂樹 医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門 歯学分野 健康増進歯学 助教

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース

訪問した国：アメリカ合衆国

期間：平成24年4月27日～平成24年5月5日

研究機関名等：STANFORD School of medicine

受入研究者等：教授 Jill Helms

1 初期の目的の遂行状況

歯髄組織が受傷した際に、Wnt（ウイント）シグナリングが如何にしてその創傷治癒を促進させるのか、そのメカニズムの解析を目的としました。

2 得られた成果

受傷時に組織から分泌されるWntによる細胞シグナリングが、内在性インヒビター欠損により延長されるマウス（Axin2欠損マウス）では、実験的露髄により破壊されスペースとなった歯髄組織に多くの核染色陽性像及びアポトーシス陽性像が認められました。これはWntシグナリング活性の延長が受傷組織への細胞増殖や遊走を誘導し、その組織創傷治癒に向けた積極的な組織のリモデリングを惹起していることが示唆されます。また、このAxin2欠損マウスでは受傷組織を外部から遮断するように厚みを持った硬組織の被蓋が形成されることも明らかとなりました。深いう蝕や歯冠破折などの歯科臨床を想定した場合、硬組織の新生は患者の術後違和感や疼痛の軽減に重要であると考えられています。これらの結果より、受傷した歯髄組織にリコンビナントWntタンパクを投与するといったWntシグナリングに焦点を当てた歯科材料は有用であることが推察でき、本研究で得られた知見はその治療法開発の基礎となるものでした。



錦織 良 医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 歯学分野 生体材料学 助教

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース

訪問した国：台湾

期間：平成24年8月28日～平成24年9月9日

研究機関名等：中央研究院基因體研究中心（Genomics Research Center, Academia Sinica）

受入研究者等：研究所長 陳仲瑄（Chung Hsuan Chen）

1 初期の目的の遂行状況

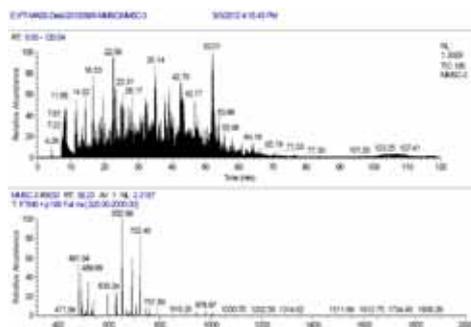
今回の短期派遣では間葉系幹細胞ライセートを試料とする質量分析を試み、膜タンパク質に関する網羅的な情報の取得に向けた予備的実験を行うことが出来ました。また、共同研究の可能性を探るための知見を得ることが出来ました。

研究者との交流では陳仲瑄博士の研究室での研究課題や幹細胞研究やナノメディシン研究などに関する研究動向を知ることが出来ました。さらに、他の国や日本から中央研究院の研究に参加している優秀なポスドク（博士研究員）やPI（主任研究員）とも交流することが出来ました。

2 得られた成果

今回の短期派遣では、生体高分子を試料とする質量分析手法の試料前処理方法について、手技上のノウハウを学ぶことが出来ました。そして、実際に得られたペプチドを解析することができました。（左記 Fig.）また、MALDI-TOF MS装置の開発を精力的に進めている陳博士らのグループの研究者との交流や研究室の雰囲気を実際に体で感じ取ることによって陳博士らの研究動向をより理解・把握するとともに、多くの刺激を受けることが出来ました。このことによって、陳博士らのグループとの今後の共同研究の可能性の接点を探ることが出来ました。また、何より自身の研究の方向性・将来像を考える上で非常に参考となる多くの知見を得ることができました。

このたびは海外派遣プログラムでのご支援をいただきまして、ありがとうございました。



(Fig. 解析結果一例)



峯岡 茜 病院 口腔維持修復歯科 助教

コース名：海外フィールドワーク研究コース
 訪問した国：アメリカ合衆国
 期間：平成24年7月22日～平成24年8月12日
 研究機関名等：The East Hawaii Hiroshima Kenjin Kai・The Kona Hiroshima Kenjin Kai
 受入研究者等：東ハワイ広島県人会会長 Delbert Nishimoto・コナ広島県人会会長 Claudia Chang

1 初期の目的の遂行状況

広島大学分子内科学研究室における日系米人医学調査は、遺伝的には日本人でありながら、生活習慣の欧米化が早期にかつ高度に進行した日系米人を対象とした疫学調査であり、同時期の広島在住日本人の調査成績と比較検討することにより、日本人の疾病構造の近未来像を探ることが可能です。

今回の渡航目的は、第13次Hawaii医学調査に同行し米国Hawaii州Hilo市およびKona地区における日系米人対象の歯科検診を実施しその結果を日本在住者対象のものと比較検討することにより、ライフスタイルが口腔内状況に及ぼす影響を検証することでした。2012年7月から8月にかけてハワイ島において日系米人201名（男性83名、女性113名）に対し歯科検診（①歯式、DMF歯数②CPI（地域歯周疾患指数）③アタックメントロス）、口腔衛生習慣及び歯科受診に関するアンケートを実施しました。

2 得られた成果

これまでの本医学調査より、日系米人は日本人に比べてⅡ型糖尿病および虚血性心疾患の罹患率が2～3倍高く、頸動脈肥厚度で比較した場合、同年代であれば日本人よりも20歳程度動脈硬化が進行していることが報告されています。しかし今回の歯科検診の結果では、Hawaii在住日系米人は日本人との比較において加齢に伴う歯牙喪失傾向が低く、また概して残存歯中の未処置歯率も少なかったです。この傾向は2007年Hawaii島、2010年Los Angelesにおける日系米人歯科検診結果と同様であり、日系米人は概して良好な口腔内状態を呈していました。

昨今、米国では医療費削減対策とともに予防医療が提唱され、日本よりも疾病の早期発見、早期治療が実現しています。このような社会が米国民の危機感および健康意識の向上に寄与し、結果として日本人と比較し日系米人の良好な口腔内状態に関与していると考えられます。

今後、歯科医学の見地から口腔内疾患と全身疾患との相関関係の解明にむけて、本調査結果のさらなる分子レベルでの検討および継続的縦断調査を行っていきたいと思います。



谷本 圭司 原爆放射線医学研究所 放射線災害医療センター 放射線医療開発研究分野 助教

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース
 訪問した国：シンガポール
 期間：平成24年7月25日～平成24年7月29日
 研究機関名等：Cancer Science Institute of Singapore, NUS
 受入研究者等：教授 Lorenz Poellinger

1 初期の目的の遂行状況

今回、細胞の低酸素応答機構シグナルネットワークを明らかにすることを目的とし、低酸素応答の網羅的ジェネティクスおよびエピジェネティクス解析、パイオインフォマティクス解析で先端的研究を進めている国立シンガポール大学シンガポールがん科学研究所のProf. Poellinger研究室を訪問しました。短い期間で多くの議論を重ねる事ができ、

研究所内外の施設の見学や説明を受け、実験材料の供与や今後の研究方針の決定など当初の計画を十分に遂行することができました。

2 得られた成果

今回、双方の研究課題についての議論を重ね、現在の研究課題についての共同研究の継続方針、新しい研究課題の方針などを決めることができました。例えば、我々は、肺癌患者の発がん感受性や予後に関する重要な遺伝子多型部位を見だし、それらの分子機構に関しての予備的な実験結果を提示しました。それらの遺伝子配列、および全世界的な遺伝子解析データベース解析から、同遺伝子多型部位に関連する多くの転写調節機構、遺伝子修飾、クロマチン修飾などの情報を得る事が出来ました。また、新たな機能性タンパク質同定研究の共同プロジェクトも決定し、今回の短期渡航により多くの成果を上げる事ができました。



山田 裕子 医歯薬保健学研究科 博士課程1年 医歯薬学専攻 疫学・疾病制御学研究室

コース名：海外フィールドワーク研究コース
 訪問した国：ベトナム・カンボジア
 期間：平成24年8月15日～平成24年8月23日
 研究機関名等：(1)ビントン州保健局 (2)カンボジア王国保健省
 受入研究者等：(1)局長 Dr. Nguyen Van Nhon (2)部長 Dr. Svay Somana

1 初期の目的の遂行状況

疫学・疾病制御学研究室では、肝炎ウイルス感染状況を明らかにするため、2011年度からベトナム、2009年度からカンボジアにおいて疫学調査を実施しています。本調査は、広島大学疫学研究倫理審査委員会、ベトナムビントン州保健局及びカンボジア保健省により承認を得て、各国と協力して行っています。今回、若手研究者等海外派遣プログラムの助成を受け、ベトナムにおける第2回目、カンボジアにおける第6回目の疫学調査に同行し、現地での活動に参加しました。

ベトナムでは、最初にビントン州保健局長Dr. Nguyen Van Nhon、田中教授及びビントン州ラジ保健所長Dr. Do Huy Son（当研究室大学院生）との打ち合わせに同席しました。前回調査の報告と今後の計画について話し合い、理解と協力を得られました。その後、ビントン州のポックホイ、ポックロックで170名ずつ計340名の採血と、ビンタンで前回調査参加者への健康手帳返却及び結果説明を行いました。また、Dr. Sonにラジタウンの病院を案内していただきました。

カンボジアでは、保健省のDr. Svay Somana, Dr. Hok Sirany, Dr. Ollineも調査に参加され、シェムリアップ州のクロバイリエルとチュレイ村で計195名の採血と、チュレイ村で前回調査参加者への健康手帳返却及び結果説明を行いました。採血後の検体は現地で遠心分離後、血清のみ持ち帰り、解析は当研究室で行います。

ベトナム、カンボジアとも、現地スタッフの協力により、初期の目的どおり、順調に調査を実施することができました。

2 得られた成果

ベトナム及びカンボジアにおいて、これまで明らかでなかった各国における肝炎ウイルス感染状況を把握するための貴重なサンプルを収集することができました。今後も引き続き調査を実施し、肝炎ウイルス感染予防対策をはじめとする保健衛生的施策の構築に資するための基礎的データを提供する予定です。現地受入者も協力的で、本調査を評価していただいていることを感じました。

今回、調査の準備から現地での受付、採血、結果の説明まで、全体を通じて疫学調査に参加することができ、多くのことを学び、貴重な経験をさせていただきました。文化の異なる外国での調査であり、協力者は採血が初めての人が多かったこと等から、特に採血後の精神的・肉体的な健康状態に細心の注意を払う必要があること、結果の説明方法には差別や偏見を生まないよう配慮が必要であること等を学びました。また、実際に現地に行くことにより、衛生状態や経済状況等が日本とは大きく異なることを実感しました。一方、見学したベトナムの病院には高度な機器も導入されており、医療の整備が進んでいることも感じられました。一方的に調査を行うのではなく、現地のスタッフにも参加していただき、今後も持続可能な、お互いに有意義な調査・研究を行うことが重要だと思いました。このような貴重な機会を与えてくださった田中純子教授及び若手研究者等海外派遣プログラムに関係される先生方に深謝いたします。



柄 優至 医歯薬学総合研究科 博士課程3年 展開医科学専攻 歯科矯正学研究室

コース名：海外フィールドワーク研究コース
 訪問した国：韓国
 期間：平成24年5月6日～平成24年7月3日
 研究機関名等：慶熙大学歯学部矯正科
 受入研究者等：教授 Su-Jung Kim

1 初期の目的の遂行状況

慶熙大学では、動物実験において低出力レーザーによる実験的歯の移動に対する影響を検討しています。類似した研究分野の研究者との討論や交流を行うことで、広島大学での研究に役立てることを目的としました。

慶熙大学歯学部矯正科は、研究は論文をまとめる時期に入っており、実際に研究をしている様子は見られなかったものの、レーザーに関する講義、歯の移動の加速に関する講義、並びに、それらを統合した講義など、非常に有用な情報が得られました。

また同大学の解剖学研究室では、ラットにおける歯の移動に関する実験を行っており、装置の装着や切片の作成方法など、実験を行う上で有用な情報が得られました。

2 得られた成果

自身の実験テーマである歯の移動時におけるレーザー照射は、歯の移動の加速をすることであり、それは歯科矯正の治療期間短縮につながることです。歯の移動は、なぜ加速されるのかということ考察することが重要です。また、レーザーの特性を理解し、照射量、照射回数、波長、を的確に選ぶことが重要だということが分かりました。またLLLT (Low Level Laser Therapy) に一番適切なレーザーはダイオードレーザーであることが分かりました。

解剖の教室ではラットの第一大臼歯の組織切片の手技についても、細かく断面の方向、組織の変化などを、教えて戴きました。

またspeedy surgical orthodontics courseという勉強会にも参加させて戴き、歯の移動の加速の話や、矯正治療期間を短縮することにおけるさまざまな講義を受け非常に有用でした。





五藤 紀子 医歯薬学総合研究科 博士課程3年 展開医科学専攻 小児歯科学研究室

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース
 訪問した国：インドネシア
 期間：平成24年5月22日～平成24年5月31日
 研究機関名等：アイルラング大学小児歯科
 受入研究者等：教授 Seno Pradopo

1 初期の目的の遂行状況

私は2012年5月24から2012年5月26日にかけてインドネシアで開催された2012年アジア小児歯科学会 (PDAA, Bali, Indonesia) に参加しました。今回は「Enhanced Proliferation of Stem Cells from Deciduous Teeth in Serum-free Media, STK1 / STK2」という演題でポスター発表をさせて頂きました。

口腔生化学教室では幹細胞の増殖培地に含まれる、プリオンや病原性ウイルスなどの感染などの多くのリスクを伴う可能性があるウシ胎児血清を使用しない培地の開発を行っています。我々は、この無血清培地を使用しヒト乳歯歯髄幹細胞 (SHED) を効果的に培養できたので、その成果を報告させて頂きました。

学会終了後、大学間交流のあるアイルラング大学 (Surabaya, Indonesia) の小児歯科学研究室を訪問し、広島大学小児歯科における臨床ケース報告などの小セミナー発表を行いました。セミナー発表、病院見学、またスタッフや学生との交流等を通して、日本の大学との臨床、研究面での違いなどを学習しました。

また、バリ、スラバヤへの訪問視察、アイルラング大学小児歯科スタッフの家でのホームステイを通して文化や生活様式の違いを認識し、インドネシアへの理解を深めました。

2 得られた成果

アジア小児歯科学会では、ポスター発表研究部門でファイナリストに選ばれ、学会中に審査員の前で5分間のプレゼンテーションと5分間の質疑応答を行い、賞をもらうことができました。学会中には多く質問を受け、様々な国から来た歯科医師と、自分の研究について質疑応答を繰り返すことで、彼らがどのような点に着目しているのかが分かり興味深かったです。しかし、同時に自分の英語力の低さも実感し、これまで以上に英語学習の必要性を感じました。

学会後、スラバヤにあるアイルラング大学を訪問しました。小児歯科の研修医30人と広島大学小児歯科における臨床ケースについてディスカッションを行いました。基本的な治療方針などは比較的似ていますが、インドネシアでは日本以上に経済状況の違いが治療に大きく影響することを感じました。

アイルラング大学を訪問した後、アイルラング大学のスタッフの誘いでプラビジャヤ大学にて学部学生に講義をしました。プラビジャヤ大学はスラバヤから車で2時間のマランという地域にある歴史ある大学です。しかし歯学部はできてまだ4年の新しい学部です。60人ほどの生徒と数人の先生の前で私の研究内容について発表しました。日本でも講義をしたことがなかったので非常に緊張しましたが、学部学生は積極的に質問してくれ、さらに小児歯科教授の専門分野が幹細胞ということもあり、活発な議論の中で講義を終えることができました。

インドネシアに行き、多くの人と様々な意見を交換することができ、非常に有意義でした。今後は、今回の渡航経験を機に今まで以上に研究活動、英語学習の向上を目指したいと思います。



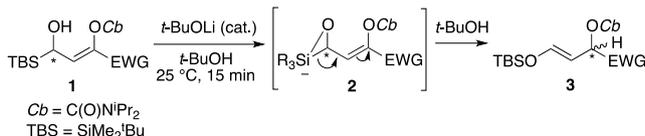
藤原 美智 医歯薬学総合研究科 博士課程前期2年 薬科学専攻 創薬合成化学研究室

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース
 訪問した国：オーストラリア
 期間：平成24年6月30日～平成24年7月8日
 学会名：19th International Conference on Organic Synthesis
 会場：Melbourne Convention Centre, Melbourne, Australia

1 初期の目的の遂行状況

オーストラリア、メルボルンで開催された国際学会19th International Conference on Organic Synthesis (ICOS) に参加し、「Evaluation of Configurational Stability of Carbanions Next to Conjugating Electron-Withdrawing Groups」という題目で、申請者が大学学部3年生後期から2年以上継続して行っている研究成果を発表しました。これまで、シアノ基、エステル基などの共役性電子求引基の隣接位にキラルカルバニオンを発生させることはほぼ不可能と考えられていましたが、申請者はそれらの置換基を有する光学活性なシリルアルコール1をt-ブタノール中、触媒量のリチウムt-ブトキシドで処理することで、電子求引性基のα位がプロトン化されたエノールシリルエーテル誘導体3が完全にラセミ化することなく得られることを見いだしました。このことにより種々の電子求引基がカルバニオンの立体化学的安定性に及ぼす影響を半定量的に評価することが可能となりました。例えば、シアノ基を有する基質からは75% ee、エステル基を有する基質からは34% eeで成績体が得られたことから、シアノ基の隣接位のカルバニオンよりもエステルの隣接位のカルバニオンの方がラセミ化しやすいことが明らかになりました。さらに、本反応の反応機構の詳細についても発表し、海外の研究者と議論し、意見交換を行いました。

が大学学部3年生後期から2年以上継続して行っている研究成果を発表しました。これまで、シアノ基、エステル基などの共役性電子求引基の隣接位にキラルカルバニオンを発生させることはほぼ不可能と考えられていましたが、申請者はそれらの置換基を有する光学活性なシリルアルコール1をt-ブタノール中、触媒量のリチウムt-ブトキシドで処理することで、電子求引性基のα位がプロトン化されたエノールシリルエーテル誘導体3が完全にラセミ化することなく得られることを見いだしました。このことにより種々の電子求引基がカルバニオンの立体化学的安定性に及ぼす影響を半定量的に評価することが可能となりました。例えば、シアノ基を有する基質からは75% ee、エステル基を有する基質からは34% eeで成績体が得られたことから、シアノ基の隣接位のカルバニオンよりもエステルの隣接位のカルバニオンの方がラセミ化しやすいことが明らかになりました。さらに、本反応の反応機構の詳細についても発表し、海外の研究者と議論し、意見交換を行いました。



2 得られた成果

これまで国内の学会で数回発表を行って来ましたが、今回の学会では自分の研究内容について、他の研究者と最も深い部分まで議論することができました。世界各国から参加者が集まる国際学会では、国内とは違った活気が感じられ、意見交換の重要性を感じました。

また、申請者にとって興味深い研究内容が数多く発表されており、未熟な英語ではありましたが、海外の研究者と意見交換ができました。このことは今後の研究者人生において貴重な経験になりました。さらに、ノーベル化学賞受賞者を含む著名な研究者の講演を拝聴することができ、非常に刺激をうけました。

今回は初めての国外での学会ということで、申請者の英語能力の未熟さを感じ、英語の学習方法を考え直すきっかけとなりました。海外の研究者と議論や意見交換をする際に、自分の意見を正確に伝えたり、相手の意図を的確に汲み取れるようになりたいと感じ、語学の勉強の必要性を強く認識しました。今後も国際学会への参加、留学を視野に入れて英語でのプレゼンテーション能力を身につけて行きたいです。



林 雪 医歯薬保健学研究科 博士課程前期1年 保健学専攻 成人看護開発学研究室

コース名：海外フィールドワーク研究コース
 訪問した国：中国
 期間：平成24年8月19日～平成24年9月29日
 研究機関名等：中国吉林省 鎮賚県病院
 受入研究者等：教授 王 徳文

1 初期の目的の遂行状況

本研究の目的は現在の中国吉林省における患者の家族への看護に関する認識、知識、技術及び実践の状況を把握することです。広島大学で倫理委員会の承認を得た後、2012年8月19日から2012年9月29日にかけて調査対象病院を選定し、当該病院の看護部長に研究参加の同意を得て関係部署に赴き、調査票の配布と回収箱を設置し、以下の内容を調査しました。

- (1) 家族看護に対する認識：認識度合、重要性、考え方、看護における位置づけ、看護師の役割・責任範囲
- (2) 家族看護に関する知識：家族の定義、家族の機能、家族看護の目的、家族看護の対象、家族看護に関する理論、アセスメントの枠組み、介入方法、評価、家族看護過程
- (3) 家族看護に関する技術：コミュニケーション、家族教育
- (4) 家族看護実践：レベル1からレベル5の実践度合い

これに、対象者の属性（年齢、性別、学歴、留学経験、研修歴、教育、所属部署、婚姻状況、保有資格、臨床経験）を調査しました。

2 得られた成果

看護部長の同意がえられた10病院に勤める看護師1950人を対象とし、本人の同意を得られた850人の看護師に質問紙を配布し、445人から回収しました（52.3%）。また回答の不備を除外した有効回答数は404人（47.5%）となり、以下のような調査結果となりました。

家族を対象とした看護実践の23項目について「いつも実施している」最も多い項目は情報収集、病状などの説明と介護技術の教育でした。「していない」の最も多い項目は家系図作成、家族のアセスメント、家族への対応を看護計画に入れる、家族のカウンセリング実施の四つでした。他の項目は「時に実施している」を選ぶ人が多かったです。

中国において家族看護の導入が遅れている最も多い理由は「家族看護の必要性を感じない」、「家族看護をする時間がない」、「家族看護に関する知識がない」の三つでした。

今回の調査結果を踏まえて、今後中国で家族看護に関する尺度開発や介入研究を展開していきたいと思っています。



富山 信次 保健学研究科 博士課程前期2年 保健学専攻 スポーツリハビリテーション学研究室

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース
 訪問した国：オーストラリア
 期間：平成24年6月27日～平成24年7月8日
 研究機関名等：メルボルン大学大学院 Health science Physiotherapy
 メルボルン大学大学院 Mechanical engineering Biomechanics
 受入研究者等：教授 Adam Bryant・リサーチフェロー Natalie Collins
 学会名：International society of Biomechanics in Sports
 会場：Australian Catholic University

1 初期の目的の遂行状況

①大学の研究室の見学を2ヶ所と海外学会での発表を目的として6月26日から7月8日までオーストラリアのメルボルンに海外短期派遣プログラムとして行ってきました。6月29日（金）にメルボルン大学の健康科学・理学療法学研究所のDr Adam Bryant, MDの研究室を訪問しました。研究室内の説明や測定機器の説明を受け、その研究室で実際にテーマとして

行っている障害予防について議論することができました。

②7月3日（火）にはメルボルン大学機械工学・バイオメカニクス研究科のDr Natalie Collins, PTの研究室を訪問しました。同じ研究室のDr David Ackland, Scientistと共に実験室の紹介をしていただきました。自身の研究内容を紹介したり、相手方の研究内容を聞いたり様々な議論を行うことができました。

③7月2日（月）から6日（金）にかけてメルボルンにあるオーストラリアカトリック大学で行われたInternational society of Biomechanics in Sportsに参加してきました。学会の二日目の朝にSports injury preventionの口述セッションがあり、そこで発表を行いました。しっかりと伝えたかった内容を伝えることができ、フロアから質問をいただくこともできました。

2 得られた成果

最初に訪れたDr Adam Bryantの研究室では、現在我々の研究室で行っている前十字靭帯損傷予防にむけての新しい研究方法や測定方法を教えてもらうことができました。また、前十字靭帯損傷の日本とオーストラリアの違いを議論することができました。体格もオーストラリアとは異なるため、損傷後のスポーツ復帰までの時期の違いや手術方法には異なる点が多かったです。

次に訪れたDr Natalie Collinsの研究室では様々な最新機器を見学させてもらいました。広島大学にはない機器を使った歩行動作の分析や、広島大学にもある機器を使ってどのように測定を行うのかを教えてくださいました。また、オーストラリアにおける研究を行う理学療法士にどのような方々がいるのかや、普段大学院生やリサーチフェローの方々がどのように過ごしているのかを教えてくださいました。

学会発表では、口述で発表させていただき2つ質問をもらうことができました。研究の方法論についてと結果をどうみるのかについてで、それに対する回答も正確に行うことができました。また、発表時間外で自分の発表を聞いていた参加者から発表内容の指示をいただくことができました。また、ポスター発表に対して海外の研究者の方と意見を交わすことができ、次に自分の行う研究の方法を考えるのに参考になりました。プレゼンテーションの方法が日本と海外では異なっており、よりわかりやすいプレゼンテーションを行う必要があることを感じました。




曹 焯波 医歯薬保健学研究科 博士課程後期1年 保健学専攻 健康開発科学研究室

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース
 訪問した国：台湾
 期間：平成24年5月2日～平成24年5月7日
 研究機関名等：National HsinChu University of Education
 受入研究者等：准教授 黎 俊彦

1 初期の目的の遂行状況

今回の学会発表の目的は、現在自分が取り組んでいる研究が世界的に、より専門的な視点において意義があるのかを確認することでした。

5月4日から6日にかけて台北市で開催されましたThe 2nd Asia-Pacific Conference on Health Promotion and Education (APHPE) には、ヘルスプロモーションと健康教育に関心を持つ多くの研究者が参加していました。私は、「Effects of a Dao Yin Yang Sheng Exercise (DYYSE) on Physical and Mental Health of Middle-Aged and Elderly Japanese Population」というテーマでポスター発表を行いました。

また、神経筋肉効能評価 (Neuromuscular Evaluation)、固有感覚評価 (Proprioception Evaluation)、身体姿勢の安定性 (Postural Stability) と測定圧力測定 (Plantar Pressure Measurement) の四つの内容を中心に研究を行っている台湾国立新竹教育大学感知運動研究室を訪問し、施設見学や3時間ほどの交流会を開催しました。

2 得られた成果

学会参加者の発表内容は、かなり幅広く健康と教育について多角的に研究がなされていました。その中でも学校保健の発表が一番多く、中国と日本の研究が多かったと感じています。被験者の数が万人単位という大規模なものもあり、自分の実験との規模の違いに驚きました。国際学会での初経験として、大変良かったと感じています。場所が広いため、人が集まらない状況もありましたが、各国の研究者との交流は取りやすかったです。学会の公式言語は英語なので、英語の練習はもちろん、色んな研究者との交流が出来て、大変勉強になりました。

台湾国立新竹教育大学感知運動研究室との交流会では、各自研究室の現状を紹介し、お互いに興味がある研究や将来の交流と共通研究などについて議論しました。


荻野 了子 医学部医学科5年

コース名：学部生海外研究派遣コース
 訪問した国：ドイツ
 期間：平成24年7月31日～平成24年8月27日
 研究機関名等：ハノーファ医科大学
 受入研究者等：教授 Dr. Tamura-Niemann

1 初期の目的の遂行状況

今回の留学の目的は臨床実習を通してドイツの医療現場を学び、知識を発展させることでした。3週間の臨床実習のうち、特に心臓血管外科での1週間半は、驚くほど充実したものでした。欧米諸国では冠動脈疾患が死亡原因の30～50%を占めると習いましたが、手術室に入るとそれは一目瞭然でした。ハノーファ医科大学病院では心臓血管外科・胸部外科・外傷外科を合わせて10ほどの手術室があり、毎日すべての手術室で朝から晩まで手術が行われています。冠動脈バイパス術だけでも1日2・3件は行われ、3日間ほかに弁置換術や肺移植、大動脈瘤や大動脈解離、補助人工心臓の付け替えなどを見学することができました。初めて見る手術は大胆でスピード勝負という印象を受けました。対照的に小児心臓外科は、目に見えないほどの細い糸と針を使って丁寧かつ迅速に進めていく繊細な手術ばかりでした。完全大血管転位や肺動脈狭窄、VSD (心室中隔欠損症)、弁置換などの手術を見学させて頂きましたが、まだ生後数日の赤ちゃんが人工心肺を使った6・7時間の大手術に耐えて、心臓が再度動き出す瞬間は非常に感動的でした。短い期間ではありましたが、日本ではなかなかできない経験をさせて頂いたと思います。他に印象に残ったのは、効率化に特化したドイツの病院制度でした。施設でいえば、手術室の前にある麻酔室で次の手術予定の人が眠っていたり、手術室ごとに手洗い場が備え付けてあったりすることです。また外科では、ほかの病院で診断がすでについている患者を手術するだけなので外来は一切なく、ICUには専門の医師がいるため術後管理もないです。看護師なども含め、それぞれの医療従事者の役割分担が無駄なく行われていると感じました。どちらがいいとは一概に言えませんが、医療従事者の過労働がうたわれている今、ドイツを手本とするべきところがあると感じました。

2 得られた成果

心臓血管外科では、手術見学の他にセミナーにも参加させて頂きました。これはハノーファ医科大学と大阪大学、ヘルシンキ大学が共同で行っているCore-to-Core programというもので、心臓外科領域の臨床研究をそれぞれの大学の先生方が発表されていました。臨床研究の発表を聞くのは初めての経験で最初は理解するだけで精一杯だったのですが、セミナーを聞くにつれ研究の地道さや難しさも伝わってきたと同時に、心筋の再生医療の最先端がこんなところまで進んでいるのかと驚きました。研究が面白そうだと初めて感じ、将来は自分も是非研究してみたいと思う貴重な機会となりました。

小児外科で特に印象に残っているのは日本とドイツのポリクリ (臨床実習) の違いです。顕著だったのは外来見学で、泌尿器系の疾患が多かったのですがそのルーチンの超音波検査を全てやらせてもらえたのに驚きました。英語しか話せない日本人の医学生に対し、勉強になるからと患者さんも親御さんも笑顔で了承してくれました。ドイツ人の人柄の良さを感じたとともに、病院は医学生にとって学問の場でもあるという理解が浸透している気がしました。医学を学ぶというより手技を身に付けることに重点を置いたドイツのポリクリに最初は戸惑いましたが、非常に良い経験となりました。また、広島大学のポリクリではいかに先生方が学生のことを考えてスケジュール調整や講義をしてくださっているのかが身に染みて分かり、残りの半年は常に感謝の気持ちを持って臨もうと思いました。



小林 桜子 医学部医学科5年

コース名：学部生海外研究派遣コース

訪問した国：オーストリア

期間：平成24年8月2日～平成24年9月3日

研究機関名等：グラーツ医科大学

受入研究者等：International relation officer Papst Petra

1 初期の目的の遂行状況

4週間のグラーツ医科大学への留学の機会を頂き、一般外科と心臓外科の臨床実習を行いました。留学前の目標として掲げていたのは、①能動的に実習に取り組んでより多くの経験を積むこと、②英語コミュニケーションスキルの向上、③異文化交流です。

まず実習内容についてですが、一般外科と心臓外科のどちらの科においても、こちらが申し出ると先生方は喜んで手術のアシスタントにいらしてくださり、ほぼ毎日術野に入って手術について学びとることが出

来しました。間近で臓器を見て触れさせて頂きながら、先生から手術の流れ、その患者さんの疾患や現病歴について聞くことができ、日々学ぶことの多い実習でした。次に語学についてですが、オーストリアの医師や医学生は英語がとても流暢であるため、ドイツ語ではなく毎日英語でコミュニケーションをとっていただきました。疾患や手技について英語で説明を受け、自分からも積極的にオペ中などに質問することで、医学英語に対する怖れが減ったように思います。同時に、自分の医学英語の不十分さに改めて痛感したため、今後も日々勉強していこうとモチベーションが高まりました。そして、異文化交流についてですが、現地のみならずエジプト、タイ、スペイン、イタリアなど様々な国からの医学生と共に実習を行い、各国の医師の現状や医学教育について話すことで、自国や自分自身について再考するきっかけを得ました。また、彼らの実習に対する積極性に感心し、私ももっとプロフェッショナルリズムをもって医学生として日々勉強しなければならぬと感じました。

2 得られた成果

4週間の留学を通して、様々な価値観や文化を貪欲に吸収することが出来ました。各国の医学生と交流して気付いたことの一つに、自分が想像していたよりも多くの学生が将来母国を離れて医師として働きたいと考えている、ということがあります。この考えは私にとってはとても刺激的な考えであり、キャリアプランにおいて広い視野を与えてくれました。彼らが海外での医師生活を考える理由の一つとして、他国の大学の医学部は英語で医学教育がなされているところが多く、海外で医師として働くことに対して抵抗があまりないことが挙げられます。実際に彼らと一緒に病院実習をしてみて、確かに医学英語のレベルの高さに驚き、それと同時に同じ医学生として焦りを感じました。このきっかけを大切に、これからは医学英語の勉強を織り交ぜつつ医学知識を習得していこうと思います。

また、海外の良さだけでなく、日本の医療や文化歴史は一目置かれており日本で医学を学べることが恵まれているということにも気づくことが出来ました。これは、海外の医学に漠然と憧れを抱いていた私にとって新たな視点を与えてくれました。優秀な医師たちと恵まれた環境の下で働くことを無駄にすることなく、この先の医学生や医師生活でも貪欲に多くを学びとっていこうと思います。

グラーツ医科大学でお世話になった方々、そしてこのような貴重で有意義な留学の機会を与えてくださりサポートして下さった広島大学の先生方に心より感謝申し上げます。

- 病院の実力*広島編⑤
 脳腫瘍 子供の治療 院内学級も
 広大病院がん化学療法科 杉山一彦医師 (病院) (読売 4 / 1)
- 広島大大学院医歯薬保健学研究所
 4分野統合「大きな強み」(医歯薬保) (中国 4 / 3)
- 災害拠点病院4病院追加
 広島県が指定 (病院) (中国 4 / 4)
- 文科相の科学技術賞
 広島大大学院の2グループ受賞
 山脇成人教授 (医歯薬保) (中国 4 / 11)
- 基幹4病院 連携模索
 県、年度内に報告書
 診療科集約や機器共同利用 (病院) (中国 4 / 17)
- 市民公開講座
 慢性痛 我慢しないで
 講演1 長引く痛みの原因を探る 伝達経路の損傷が原因
 広島大学病院 麻酔科教授 河本昌志さん (病院)
 講演2 整形外科で診る神経の痛み 痛みは早めの相談を
 広島大学病院 整形外科教授 越智光夫さん (病院) (中国 4 / 21)
- 被曝後の死産児・死亡の新生児
 1200人分 放射線研究に利用
 規模判明 臓器標本やカルテ 米へ
 返還資料 劣化の恐れ 広島の原医研 (原医研) (中国 4 / 22)
- オピニオン
 遠隔画像診断が成果
 CT・MRI普及も専門医不足
 夜間対応充実へ連携必要 (医歯薬保) (中国 4 / 22)
- 医師派遣に専任副学長
 広島大 無医地区解消を促進 (医歯薬保) (中国 4 / 25)
- フクシマ“考”<4> 1年の教訓
 緊急被ばく医療派遣で福島へ
 「災害弱者」避難で課題
 広大病院・高度救命救急センター長 谷川攻一教授 (55) = 救急医学 (病院) (毎日 4 / 27)
- 無医地区解消へ担当副学長新設
 広島大 (医歯薬保) (朝日 4 / 28)
- 患者285人分の個人情報紛失
 広大病院 (病院) (朝日 4 / 28)
- 患者など315人分個人情報紛失
 広大病院看護師 (病院) (毎日 4 / 28)
- 患者情報メモリー紛失 (病院) (読売 4 / 28)
- 広島大病院データ紛失 (病院) (中国 4 / 28)
- フクシマ“考”<6> 1年の教訓
 土壌汚染の調査設計
 SPEEDI公表「遅い」
 広島大原爆放射線医学研究所 大瀧慈教授 (61) = 統計学 (原医研) (毎日 4 / 30)



- フクシマ“考” < 7 > 1年の教訓
健康リスクアドバイザーとして
住民の疑問 返答丁寧に
広島大原爆放射線医科学研究所 神谷研二所長 (61) = 放射線障害医学 (原医研) (毎日 5 / 1)
- 専門医が診る
広島大病院心不全センター 木原康樹 センター長
心不全 負担の原因 薬でブロック (病院) (中国 5 / 2)
- ヒト細胞分子変化分析10分
薬開発の迅速化期待
広島大大学院の升島教授ら成功 (医歯薬保) (中国 5 / 2)
- 黒い雨
発がんリスク上昇か
広島大原医研新たに解析 3万7000人追跡
内部被曝無視「欠陥」突く (原医研) (中国 5 / 3)
- 日食観察 (21日) 専用グラスで
県眼科医会が注意喚起
網膜症の恐れ
長時間も禁物 (病院) (中国 5 / 6)
- PET-CT (陽電子放射断層撮影装置) を導入
広島大病院「がん拠点」で県内初 (病院) (中国 5 / 16)
- 「飢餓」「原発」
あす市民講座 中区で口腔科学会 (原医研) (中国 5 / 16)
- 原爆の学術本を復刻
広島大 福島事故を受けて
「人材育成に生かしたい」 (原医研・医歯薬保) (毎日 5 / 16)
- 小粒で柔らかい カルシウム黒豆
イシカワ、来月発売 (医歯薬保) (日本経済 5 / 18)
- 検診心がけて
がん早期発見
広島、講座に300人 (病院、原医研) (中国 5 / 20)
- 薬学部生『超売り手』
6年制移行で卒業プランク2年
中国地方の薬局や病院 好待遇でも獲得困難 (薬学部) (中国 5 / 21)
- 被曝線量 短時間で解析
染色体に着色した変形確認
原医研 田代教授グループ (原医研) (中国 5 / 22)
- 専門医が診る 読者からの質問編
回答 広島大病院心不全センター 木原康樹 センター長
心不全 不整脈で肥大型心筋症
 血压130以下抑制が理想
 心臓弁膜症の根治には
 手術必要 安定時に相談
 手術後も息苦しさ
 再発懸念 CT検査を
 どのような生活をすれば
 適切な運動 心臓の負担減 (病院) (中国 5 / 23)

- 黒い雨の下 がん死リスク1.8倍
広島大などが3万7000人解析
爆心地北西 放射性降下物の影響か (原医研) (毎日 5 / 29)
- 安芸津の企業・病院と大学が研究
転倒防止靴下 高い着用効果 (医歯薬保) (中国 5 / 30)
- 脳科学を通じ発達障害分析
南区で4日講演会 (医歯薬保) (中国 6 / 2)
- うつ病解明へ協力者募る
広島大大学院 (医歯薬保) (中国 6 / 6)
- 歯磨き あしたから頑張る
南区 口腔健康教室で親子 (病院) (読売 6 / 9)
- 広島の医学資料見学ツアー
市現代美術館 解剖と変容展合わせ (医学部) (読売 6 / 10)
- 教えてドクター 子どもの病気とケア^⑧
小学生の娘 虫歯治療嫌がる
広島大学大学院香西克之教授 (小児歯科学) が答えます。
進行する前の受診が先決 (医歯薬保) (中国 6 / 12)
- 「放射線災害復興」広島大 東京で入試説明 (原医研) (中国 6 / 13)
- 軟骨培養技術 製品化へ
広島大学大学院の越智教授考案
欠けた部分に移植 強度優れる (医歯薬保) (中国 6 / 23)
- 「インプラント治療で重症に」
歯科医の25%経験 (医歯薬保) (日本経済 6 / 25)
- 仕掛ける
広島大大学院教授 谷本啓二さん
外観保った介護食普及
施設などに試食機会 (医歯薬保) (日本経済 7 / 12)
- 空白日解消へ応援要請
2次救急 地域医療協に東広島市 (病院) (中国 7 / 13)
- 放射線治療 最新技術は
あすから中区 国際シンポと研究会 永田靖教授 (医歯薬保) (中国 7 / 18)
- ベトナム枯れ葉剤半世紀^③ 第3部 解決への道
医療支援
健康調査 蓄積を還元
毒ガス・公害病 経験参考に (医歯薬保) (中国 7 / 20)
- 脳神経守る物質を解明
広島大グループ 薬・再生医療に期待
今泉和則教授 (医歯薬保) (中国 7 / 25)
- 放射線被害研究
原医研と協力へ ベラルーシの機関 (原医研) (中国 8 / 7)
- 広島大病院に心臓病教室
心不全センター 再発防止へ生活指導 (病院) (中国 8 / 8)



- RNAで探るがんの仕組み
広島で30日シンポ (医歯薬保) (中国 8 / 8)
- 教えて①②③④ 子どもの病気とケア⑤ 親の仕上げ磨きいつまで
広島大大学院の香西克之教授 (小児歯科学) が答えます
小学校4年生までは必要 (医歯薬保) (中国 8 / 28)
- うつ病患者 症状別対応を
中区で医師らシンポジウム
脳科学の診断 報告も (医歯薬保) (中国 9 / 2)
- 専門医が診る **てんかんの手術**
広島大病院脳神経外科 飯田幸治 講師
部分の特定進歩 根治に道 (病院) (中国 9 / 5)
- 神谷氏を防災功労者表彰
神谷研二所長 被災地の線量検査けん引 (原医研) (中国 9 / 8)
- 60代女性に脳死肝移植
広島大病院 (病院) (中国 9 / 9)
- 原爆 入市被爆者がん死亡
投下3日まで高リスク 広島大解析 (原医研) (読売 9 / 13)
- クローン病再発防止に成果
小腸などに炎症や潰瘍の難病
新たな接合法広がり 広島大病院も「再手術ゼロ」(病院) (中国 9 / 19)
- 必修履修の場 国内外に拡大
広島大医学部 (医学部) (中国 9 / 25)
- 専門医が診る **読者からの質問編**
回答 広島大病院脳神経外科 飯田幸治講師
てんかんの手術 薬6種処方 子どもの発作続く
早めの入院 詳細検査を
若年ミオクロニーで服薬 出産に影響は
胎児へのリスク低い薬も
側頭葉切除術 視野欠ける例も
日常生活 支障なく
入院の期間・費用は
原則2度 負担に上限 (病院) (中国 9 / 26)
- 磁石で骨や軟骨再生
文科省 広島大の研究補助 (医歯薬保) (日本経済 9 / 28)
- 軟骨治療 注射した細胞
磁石で幹部へ誘導 広島大研究 (医歯薬保) (朝日 9 / 28)

開催日	件名	開催場所	内容	事務局
平成24年 4月7日(土)	第114回 広島消化器病研究会 (HGA)	広仁会館 大会議室	教育講演 「食道癌治療の現状と展望」 講師：檜原 淳 先生 (原医研腫瘍外科) 特別講演 「進行肝臓の総合的治療戦略について」 講師：具 英成 先生 (神戸大学大学院肝胆膵外科学) 一般演題 25題	病院内視鏡診療科
平成24年 4月13日(金)	第12回 「分子細胞情報学セミナー」	霞総合研究棟7階 共同セミナー室 (701)	「中枢神経回路の障害と修復を制御する生体システム」 講師：山下 俊英 先生 (大阪大学大学院医学系研究科分子神経科学 教授)	医歯薬保健学研究院 分子細胞情報学 今泉 和則教授
平成24年 4月22日(日)	第3回 広島県糖尿病・療養指導 看護研究会	保健学研究科棟 203室	テーマ 「平成24年度診療報酬改定への対応糖尿病透析予防指導管理料：実施のための方法論」	医歯薬保健学研究院 成人看護開発学
平成24年 5月19日(土)	第67回 「日本消化器病学会中国 支部 市民公開講座」	中国新聞ホール	第67回 「日本消化器病学会中国支部 市民公開講座」 テーマ：がんの予防法 がんから自分を守るための基礎知識	医歯薬保健学研究院 消化器・移植外科学 教授 大段 秀樹
平成24年 5月20日(日)	第261回 広島眼科症例検討会・ヒ ロシマフォーラム2012合 同学会	広仁会館 大会議室	第261回症例検討会 ○症例検討・供覧 ○大学院生研究報告 講師： 1. 小児の過熟白内障は灌流吸引で除去できる 中村 有美子 先生 (広島大学) 2. ステロイド投与で増悪した両眼漿液性網膜剥離の1例 福戸 敦彦 先生 (安佐市民病院) 3. ネフローゼ症候群に合併した漿液性網膜剥離の1例 田中 文香 先生 (広島赤十字・原爆病院) 4. Areolar soft tissue移植が有用であった眼瞼、眼窩の再建手術 板倉 秀記 先生 (県立広島病院) 5. Tractional papillopathyと思われた1例 地庵 浩司 先生 (中電病院) 6. 中心性漿液性網脈絡膜症に対する抗VEGF薬、PDT、photo coagulation治療 武田 哲郎 先生 (木村眼科内科) ヒロシマフォーラム2012 ○特別講演1「ドライアイ診療の秘訣」 篠崎 和美 先生 (東京女子医科大学病院講師) ○特別講演2「網膜硝子体疾患の画像診断」 三田村 佳典 先生 (徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 眼科学分野教授)	医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門 視覚病態学 教授 木内 良明
平成24年 5月26日(土)	第97回 「日本消化器病学会 中国支部例会」 第15回 「日本消化器病学会 中国支部 教育講演会」	広島国際会議場	特別講演 「免疫系のシグナル伝達と遺伝子発現；複雑系の解明を基盤とした医学への貢献に向けて」 講師：谷口 維紹 先生 (東京大学生産技術研究所分子免疫学分野) 会長講演・ランチョンセミナー・専門医セミナー・シンポジウム・ 中国支部研修医奨励賞・中国支部専修医奨励賞、他	医歯薬保健学研究院 消化器・移植外科学 教授 大段 秀樹
平成24年 5月27日(日)	第68回 「日本消化器病学会中国 支部 市民公開講座」	広島国際会議場	第68回 「日本消化器病学会中国支部 市民公開講座」 テーマ：がんの治療法 治療の最前線から緩和ケアまで	医歯薬保健学研究院 消化器・移植外科学 教授 大段 秀樹
平成24年 6月16日(土) ～17日(日)	日本耳鼻咽喉科学会 第38回中国四国地方部会 連合学会	広島国際会議場	耳鼻咽喉科学・頭頸部外科学に関する研究発表	日耳鼻広島県地方部会 (医歯薬保健学研究院 耳鼻咽喉科学・ 頭頸部外科学研究室)



<p>平成24年 6月22日(金) ～23日(土)</p>	<p>第100回日本循環器学会 中国・四国合同地方会</p>	<p>広島国際会議場</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・一般講演：254題 ・教育講演：3題 <ol style="list-style-type: none"> 1. 「エビデンスに基づく心不全治療～知るから創るへ～」 筒井 裕之 先生 (北海道大学循環病態内科学) 2. 「心臓血管外科治療の新しい展開」 澤 芳樹 先生 (大阪大学心臓血管外科学) 3. 「慢性炎症と病態形成」 永井 良三 先生 (自治医科大学) ・ランチョンセミナー：3題 <ol style="list-style-type: none"> 1. 「冠動脈疾患合併糖尿病患者の治療戦略におけるDPP 4阻害薬の可能性」 杉山 正悟 先生 (熊本大学循環器内科学) 2. 「心房細動治療におけるβ遮断薬の魅力：レート&リズムコントロール」 池田 隆穂 先生 (東邦大学循環器内科学分野) 3. 「RAS阻害薬の新展開-ARBのエビデンスとその臨床応用-」 浦田 秀則 先生 (福岡大学筑波病院循環器内科) ・イブニングセミナー：2題 <ol style="list-style-type: none"> 1. 「急性冠症候群の本態と予防～血管内イメージングからみたエビデンス～」 廣 高史 先生 (日本大学医学部附属病院板橋病院循環器内科) 2. 「抗凝固薬について考える」 草野 研吾 先生 (岡山大学循環器内科学) ・モーニングセミナー：2題 <ol style="list-style-type: none"> 1. 「心原性肺水腫に対するオートセットCS (ASV) の有用性-臨床現場での使用経験-」 久保 俊彦 先生 (松山赤十字病院循環器内科) 2. 「薬剤溶出性ステントの効用と問題点～第2世代薬剤溶出性ステントでどう変わるか?～」 門田 一繁 先生 (倉敷中央病院循環器内科) ・市民公開講座 テーマ「傷ついた心臓と上手に暮らす～再入院を防ぐ生活の秘訣と広島県の取り組み～」 	<p>第100回日本循環器学会 中国・四国合同地方会 事務局：担当 山本 秀也 (医歯薬保健学研究院 循環器内科学内)</p>
<p>平成24年 7月3日(火)</p>	<p>第13回 「分子細胞情報学セミナー」</p>	<p>霞総合研究棟7階 共同セミナー室 (701)</p>	<p>「軟骨細胞分化制御機構の解析と軟骨細胞誘導」 講師：妻木 範行 先生 (京都大学 i P S 細胞研究所増殖分化機構研究部門 教授)</p>	<p>医歯薬保健学研究院 分子細胞情報学 今泉 和則教授</p>
<p>平成24年 7月6日(金)</p>	<p>第8回 広島肝臓プロジェクト研究 センターシンポジウム</p>	<p>ホテルグランヴィア 広島</p>	<p>第8回広島肝臓プロジェクト研究センターシンポジウム 一般演題19演題 特別講演1 「C型肝炎ウイルスの増殖を制御する宿主因子」 講師：松浦 善治 先生 (大阪大学微生物研究所分子ウイルス分野) 特別講演2 「ウイルス核酸の樹状細胞応答」 講師：瀬谷 司 先生 (北海道大学大学院医学系研究科免疫学分野)</p>	<p>医歯薬保健学研究院 消化器・代謝内科学 教授 茶山 一彰</p>
<p>平成24年 7月10日(火)</p>	<p>第14回 「分子細胞情報学セミナー」</p>	<p>霞総合研究棟7階 共同セミナー室 (701)</p>	<p>「アルツハイマー病Aβ蓄積量を規定するKinesin Light Chain 1 スプライシングバリエーションの同定」 講師：森原 剛史 先生 (大阪大学大学院医学系研究科精神医学教室 講師)</p>	<p>医歯薬保健学研究院 分子細胞情報学 今泉 和則教授</p>

平成24年 7月12日(木) ～13日(金)	第21回 日本がん転移学会学術集 会・総会	オリエンタルホテル 広島	第21回日本がん転移学会学術集会・総会 テーマ「英知の結集ー理解から制圧へー」 シンポジウム1 「微小環境からみた臓器特異的がん転移」 シンポジウム2 「転移機構を標的とした治療展開」 特別講演 「The Biology and Targeted Therapy of Brain Metastasis and Glioblastoma」 講師：Isaiashj. Filder 先生 (Department of Cancer Biology, Metastasis Research Center, The University of Texas M.D.Anderson Cancer Center) レクチャー1 「Exosomeによるがん転移メカニズムの解明」 講師：落合 孝広 先生 (国立がん研究センター研究所 分子細胞 治療研究分野) レクチャー2 「TGF-βファミリーシグナルによるがん転移の制 御」 講師：宮園 浩平 先生 (東京大学大学院医学系研究科分子病理学) ワークショップ1～9 ポスター演題58題	医歯薬保健学研究院 分子病理学
平成24年 7月13日(金)	平成24年度第1回医歯薬 保健学研究会保健学専攻 FD研修会	保健学研究科棟 203号室	保健学、健康科学を研究・実践するための医療統 計学 ～基礎から最新知見まで 講師：佐藤 俊哉 先生 (京都大学大学院医学研究科 医療統計学 教授)	医歯薬保健学研究院 健康開発科学研究室
平成24年 7月19日(木) ～21日(土)	The 6th S.Takahashi Memorial Symposium & The 6th Japan-US Cancer Therapy International Joint Symposium	広島国際会議場	The 6th S.Takahashi Memorial symposium & The 6th Japan-US Cancer Therapy International Joint Symposium テーマ「Advancement Technology and Outcome in the Radiotherapy」 (7月21日(土)午前中は、下記国内学会と併催)	医歯薬保健学研究院 放射線腫瘍学 (教授：永田 靖)
平成24年 7月21日(土)	第25回 「日本高精度放射線外部 照射 研究会」	広島国際会議場	第25回日本高精度放射線外部照射研究会 テーマ「高精度放射線治療のピットフォール」 (午前中は、上記国際学会と併催)	医歯薬保健学研究院 放射線腫瘍学 (教授：永田 靖)
平成24年 7月28日(土)	日本血管外科学会中国四 国 地方会第43回総会	ホテルセンチュリー21 広島	特別講演 「大動脈瘤ステントグラフト治療の近未来」 司会：末田 泰二郎 先生 (広島大学大学院外科学) 演者：大木 隆生 先生(東京慈恵会医科大学 病院血管外科) ランチョンセミナー 「PADに対する血管内治療最前線」 司会：渡橋 和政 先生 (高知大学医学部外科学(外科二)講座) 演者：横井 宏佳 先生 (小倉記念病院循環器科) イブニングセミナー 「EVARのpitfall」 司会：近沢 元太 先生 (心臓病センター榊原病院外科) 演者：善甫 宣哉 先生 (山口県立総合医療センター外科) 一般演題39題	医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門 外科学 末田泰二郎
平成24年 8月2日(木)	第15回 「分子細胞情報学セミ ナー」	霞総合研究棟7階 共同セミナー室 (701)	「生体多光子励起イメージングで解明する生きた 細胞動態」 講師：石井 優 先生 (大阪大学免疫学フロンティア研究セン ター細胞動態学 教授)	医歯薬保健学研究院 分子細胞情報学 今泉 和則教授

平成24年 8月2日(木)	第2回広島リハビリテーション研究会(摂食・嚥下部門)	広仁会館	「抗血小板薬による出血リスクの留意点」 細見 直永 先生 (広島大学大学院脳神経内科学 医学部講師) 「嚥下調整食の選択についてーSTの視点からー」 渡邊 光子 先生 (西広島リハビリテーション病院言語聴覚士主任) 「嚥下調整食の標準化に向けて」 栢下 淳 先生 (県立広島大学人間文化学部健康科学科 教授)	広島大学病院リハビリテーション科
平成24年 8月4日(土)	第5回広島大学・山口大学眼科Grand Rounds	シェラトンホテル広島	○特別講演 「絶対わかる、必ず役立つERG道場」 近藤 峰生 先生 (三重大学眼科学教授) ○症例検討会 1. 硝子体混濁で困った1例 湯浅 勇生 先生 (広島大学) 2. 悪性黒色腫関連網膜症の1例 守田 裕希子 先生 (山口大学) 3. 昼間がもっともみえにくい症例 萩田 小夜子 先生 (広島大学) 4. Epithelial Downgrowthに対し緑内障インプラント手術を行った1例 寺西 眞一郎 先生 (山口大学) 5. 生直後から両眼角膜混濁・正常前房深度であった1例 村上 祐美子 先生 (広島大学) 6. 角膜原発悪性腫瘍がとても疑わしい1例 永井 智彦 先生 (山口大学)	医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門 視覚病態学 教授 木内 良明 山口大学大学院 医学研究科眼科学 教授 園田 康平 広島県眼科医会 会長 山代 浩人 山口県眼科医会 会長 小林 元巳
平成24年 8月18日(土)	第6回 広島消化管内視鏡 ライブセミナー	医学部第5講義室 及び 病院内視鏡診療科	テーマ 「基本手技の標準化を目指して」 消化管領域における精密内視鏡診断から治療のコツとピットフォール、ポイントをライブデモンストラレーション・レクチャーにて詳しく解説	病院内視鏡診療科
平成24年 8月25日(土)	第30回 「中国四国臨床臓器移植 研究会」	ホテルグランヴィア 広島	特別講演 「腎移植と抗体」 講師：田邊 一成 先生 (東京女子医科大学泌尿器科) 一般演題16	医歯薬保健学研究院 消化器・移植外科学 教授 大段 秀樹
平成24年 8月29日(水) ～9月4日(火)	(社)広島県看護協会研修会	保健学研究科棟 403室	「指導者編 看護実践に活かすフィジカルアセスメント」 講師：森山 美知子 先生	(社)広島県看護協会 (成人看護開発学全体で対応した)
平成24年 9月1日(土) ～2日(日)	平成24年度(社)日本補綴歯科学会 中国・四国・九州支部合同学術大会	広島市南区民文化センター	「平成24年度(社)日本補綴歯科学会 中国・四国・九州支部合同学術大会」テーマ：「歯科補綴の現在 -基本から先端まで-」	医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門 先端歯科補綴学研究室
平成24年 9月8日(土)	第8回 「広島放射線治療研究会」	アークホテル広島	第8回「広島放射線治療研究会」 テーマ「IMRT」 一般演題7題、臨床研究発表2題 特別講演 「IMRTによる放射線治療のパラダイムシフト」 講師：幡野和男 先生 (千葉県がんセンター放射線治療部 部長)	医歯薬保健学研究院 放射線腫瘍学 (教授：永田 靖)

平成24年 9月8日(土)	日本超音波医学会 第48回中国地方会学術集 会 第11回中国地方講習会	広島県情報プラザ	<ul style="list-style-type: none"> ●日本超音波医学会第48回中国地方会学術集会 <ul style="list-style-type: none"> ・一般講演：75題 ・ランチョンセミナー：2題 1. 「リウマチ診療における超音波検査の活用」 池田 啓 先生 (千葉大学医学部附属病院アレルギー・膠原病内科) 2. 「肝臓を中心とした腹部エコーの最先端～LOGIQが創り出す誰でも簡単にわかるUSとCT、MRIとのフュージョン～」 小川 力 先生 (高松赤十字病院消化器内科) ●第11回中国地方講習会 <ul style="list-style-type: none"> 1. 循環器「虚血心と拡張障害」 石井 克尚 先生 (関西電力病院循環器内科) 2. 甲状腺「体表領域のエコー診断-含甲状腺疾患-」 藤本 泰久 先生 (医療法人尼崎厚生会立花病院) 3. 消化器「肝胆膵疾患における造影エコー：最近の進歩」 工藤 正俊 先生 (近畿大学医学部附属病院消化器内科) 	日本超音波医学会 第48回中国地方会学術集 会事務局：担当日高貴之 (医歯薬保健学研究院 循環器内科学内)
平成24年 9月8日(土)	広島ポリオの会セミナー	広島大学病院リハビリテーション科 内	「ロボット装具 新しい生活スタイルを創造できる力になるかも」 木村 浩彰 先生 (広島大学病院リハビリテーション科 教授)	病院リハビリテーション科
平成24年 9月9日(日)	第13回広島県呼吸ケア看護研究会	臨床講義棟 第5講義室	テーマ「肺癌の病態生理と看護」	医歯薬保健学研究院 成人看護開発学
平成24年 9月20日(木)	第3回心臓リハビリテーション講習会	広仁会館	「心臓リハビリ：驚異の効果と最近の話題」 上月 正博 先生 (東北大学大学院医学系研究科障害科学専攻機能医科学講座 内部障害学分野 教授) 「心臓手術後の呼吸管理とリハビリテーション-オートセットCS (ASVの活用)-」 田代 尚範 先生 (広島大学病院 診療支援部 リハビリテーション部門) 「胸腹部大血管手術に対する周術期リハビリテーション」 齊藤 正和 先生 (日本心臓血圧研究振興会附属榊原記念病院理学療法科長)	病院リハビリテーション科
平成24年 9月21日(金) ～22日(土)	第57回日本ブドウ球菌研究会	広島大東京オフィス・ 当東京工大田町 キャンパス	第57回日本ブドウ球菌研究会 シンポジウム 「重茂克彦教授追悼シンポジウム」 講師：胡 東良 先生 (北里大学獣医学部) 今西 健一 先生 (東京女子医科大学医学部) 小野 久弥 先生 (岩手大学農学部) 廣瀬 昌平 先生 (岐阜大学大学院連合獣医学部) 佐藤 祐介 先生 (岩手大学獣医学部) 奏英司 先生 (独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構) その他 一般演題12題	日本ブドウ球菌研究会事務局 (医歯薬保健学研究院細菌学)



<p>平成24年 9月22日(土) ～23日(日)</p>	<p>瀬戸内眼科コロシウム 広島</p>	<p>シェラトンホテル 広島</p>	<p>9月22日(第1日目) ○白内障領域 座長:大橋 裕一 先生(愛媛大学) 「極小切開に適切なUSチップは?」 藤田 善史 先生(藤田眼科) 「テクニクス1ピースの眼内での回転方法、およびIOL下のヒーロン除去法について」 三好 輝行 先生(三好眼科) ○緑内障Afternoon Seminar座長:木内 良明 先生(広島大学) 「提案!私の工夫治療における工夫、コツ」 大島 安正 先生(国立大阪医療センター) 「提案!私の工夫診断における工夫、コツ」 曾根 隆志 先生(安佐市民病院) ○サージ・カルレチナ・涙道領域 座長:桐生 純一 先生(川崎大学) 「Road to MIVS ~ 真の Minimally Invasive Vitrectomy Surgeryを目指して~」 大澤 俊介 先生(岡波総合病院) 「チャレンジ涙道診療」 宮崎 千歌先生(兵庫県立塚口病院) ○角結膜・眼感染症領域 座長:井上 幸次 先生(鳥取大学) 「ドライアイとマイボーム線の密なる関係~層別ドライアイ診療の考え方」 有田 玲子 先生(伊藤病院) 「眼感染 病原体完全解析」 鈴木 崇 先生(愛媛大学) 9月23日(第2日目) ○GSKモーニングセミナー 座長:三田村 佳典 先生(徳島大学) 「ドライアイの診断~眼瞼痙攣との鑑別診断を中心に~」 濱野 孝先生(ハマノ眼科) ○眼炎症領域(CL・眼アレルギー) 座長:福島 敦樹 先生(高知大学) 「ディスプレイザブルコンタクトレンズの明るい未来のために」-今、眼科医が行わなくてはならないことは何か? 渡邊 潔 先生(ワタナベ眼科) 「アレルギー性結膜疾患~診療の基本と点鼻(!)ステロイドの話題」 ○眼炎症領域(ぶどう膜炎・小手術) 座長:園田 康平 先生(山口大学) 「視神経腫脹を伴うぶどう膜炎~それはぶどう膜炎がメイン?それとも視神経疾患?」 「なんとか治してあげたい下眼瞼内反症」 野田 美香先生(北海道大学) ○網膜硝子体(メディカルレチナ) 座長:白神 史雄 先生(香川大学) 「前進する網膜色素変性の臨床試験」 山本 修一 先生(千葉大学) 「加齢黄斑変性2012」 石橋 達郎 先生(九州大学)</p>	<p>医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門 視覚病態学 教授 木内 良明</p>
<p>平成24年 9月23日(日)</p>	<p>「脳卒中の後遺症治療」 広島市民講座</p>	<p>広島国際会議場 国際会議ホール 「ヒマワリ」</p>	<p>「やればできる!脳梗塞からの奇跡の復活」 柏村 武昭さん 「手足の筋肉のつっぱりに対するリハビリテーション療法」 岡本 高嗣 先生(西広島リハビリテーション病院 病院長) 「自宅でできる自己ストレッチ」 平田 和彦 先生、雁瀬 明 先生 (広島大学病院リハビリテーション部門)</p>	<p>脳卒中の後遺症治療 広島市民公開講座デスク、 病院リハビリテーション科</p>

<p>平成24年 9月29日(土)</p>	<p>第103回広島がん治療研究会</p>	<p>基礎・社会医学棟 2階 セミナー室2</p>	<p>〔一般演題〕 14題 〔教育講演〕 「がんワクチン登場ーがん治療のパラダイムシフトー」 講師：山口 佳之 先生 (川崎医科大学 臨床腫瘍学 教授) 〔特別講演〕 「ゲノム情報に基づいた個別化医療の実現に向けて」 講師：中釜齊 先生 (国立がん研究センター研究所長)</p>	<p>広島がん治療研究会 事務局 分子病理学 大上 直秀</p>
<p>平成24年 9月30日(日)</p>	<p>第9回広島保健学学会学術集会・第13回広島保健福祉学会学術大会合同学会</p>	<p>広仁会館</p>	<p>第9回広島保健学学会学術集会・第13回広島保健福祉学会学術大会合同学会 学会テーマ『多様化する社会と人間の健康』 特別講演テーマ：『健康格差社会』への処方箋ー社会環境への着目ー 講師：近藤 克則 先生 (日本福祉大学社会福祉学部 教授、日本福祉大学 健康社会研究センター長) シンポジウムテーマ：多様化する社会の中で、人間の健康と幸福をどのように捉えプロモートするか？</p>	<p>医歯薬保健学研究院健康開発科学研究室・基礎看護開発学研究室</p>

人事異動 平成24年4月2日～平成24年10月1日

発令 月日	異動 内容	氏名	異動前 所属	異動前 職名	異動後 所属・係・講座等	異動後 職名
4.30	退職	小田 康祐	大学院医歯薬保健学研究院	助教		
5.1	採用	白倉 麻耶			大学院医歯薬保健学研究院(附属医療人大学院教育・研究センター)	助教
5.1	採用	小田 康祐			大学院医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門(ウイルス学)	特任助教
5.1	採用	田村 朋子			大学院医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門(博士課程教育リーディングプログラム)	特任助教
5.1	採用	山下 ユキコ			大学院医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門(薬学部附属薬用植物園)	特任助教
5.1	昇任	藤田 剛	病院	助教	病院 口腔維持修復歯科	講師
5.1	採用	加治屋 幹人			病院 口腔維持修復歯科	助教
5.1	採用	亀井 豪器			病院 皮膚・運動器診療科	助教
5.1	採用	卜部 祐司			病院 消化器診療科	特任助教
5.1	採用	岸川 暢介			病院 医系総合診療科	特任助教
5.1	採用	小林 賢惣			病院 消化器診療科	特任助教
5.1	採用	板井 純治			病院 高度救命救急センター	助教
5.31	退職	金井 昭教	原爆放射線医科学研究所	特任助教		
6.1	採用	大谷 敬子			原爆放射線医科学研究所 放射線影響評価研究部門	助教
6.1	採用	落合 博			原爆放射線医科学研究所 ゲノム障害医学研究センター	助教
6.1	採用	金井 昭教			原爆放射線医科学研究所 ゲノム障害医学研究センター	助教
6.1	採用	河野 一輝			原爆放射線医科学研究所 放射線障害機構研究部門	助教
6.30	退職	梶梅 輝之	大学院医歯薬保健学研究院	助教		
6.30	退職	永野 義人	大学院医歯薬保健学研究院	特任助教		
6.30	退職	大槻 俊輔	病院	講師		
6.30	退職	尾上 隆司	病院	助教		
7.1	昇任	武島 幸男	大学院医歯薬保健学研究院	准教授	大学院医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門(病理学)	教授
7.1	採用	永野 義人			大学院医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門(脳神経内科学)	助教
7.1	採用	青木 志郎			大学院医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門(脳神経内科学)	特任助教
7.1	採用	唐川 修平			大学院医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門(小児科学)	特任助教
7.1	採用	藤田 洋輔			大学院医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門(精神神経医学)	特任助教
7.1	配置換	大下 慎一郎	病院 集中治療部	助教	病院 呼吸器診療科	助教
7.1	昇任	信藤 肇	病院	助教	病院 皮膚・運動器診療科	講師
7.1	昇任	細見 直永	大学院医歯薬保健学研究院	助教	病院 脳・神経・精神診療科	講師
7.1	採用	中島 拓			病院 集中治療部	助教
8.1	採用	佐々木 由紀			大学院医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門(地域・在宅看護開発学)	特任助教
8.1	採用	松本 知也			大学院医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門(精神神経医学)	特任助教
8.1	採用	中村 吏江			病院 皮膚・運動器診療科	助教
8.20	退職	濱田 勝友	原爆放射線医科学研究所	助教		
8.31	退職	近藤 慎一	大学院医歯薬保健学研究院	講師		
8.31	退職	金本 聡自	大学院医歯薬保健学研究院	特任助教		
8.31	退職	高本 宗男	大学院医歯薬保健学研究院	助教		
8.31	退職	大久保 剛	病院	助教		
8.31	退職	津谷 康大	原爆放射線医科学研究所	助教		
9.1	昇任	高橋 真	大学院医歯薬保健学研究院	助教	大学院医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門(健康・スポーツ医学)	講師
9.1	採用	小川 知幸			大学院医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門(耳鼻咽喉科学・頭頸部外科学)	助教
9.1	採用	金本 聡自			大学院医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門(分子細胞情報学)	助教
9.1	採用	杉本 一郎			病院 感覚器・頭頸部診療科	助教
9.1	採用	見前 隆洋			原爆放射線医科学研究所 放射線災害医療研究センター	助教
9.30	退職	藤原 久也	大学院医歯薬保健学研究院	准教授		
9.30	退職	宮地 隆史	大学院医歯薬保健学研究院	講師		
9.30	退職	守田 貴子	大学院医歯薬保健学研究院	助教		
9.30	退職	Udjanto Tedjosasongko	大学院医歯薬保健学研究院	特任准教授		
9.30	退職	平田 英司	病院	助教		
9.30	退職	谷為 恵三	病院	助教		
10.1	配置換	小澤 修一	大学院医歯薬保健学研究院	特任准教授	大学院医歯薬保健学研究院 放射線治療連携学講座(寄附講座)	寄附講座准教授
10.1	昇任	吉子 裕二	大学院医歯薬保健学研究院	准教授	大学院医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門(硬組織代謝生物学)	教授
10.1	昇任	Amatya Vishwa Jeet	大学院医歯薬保健学研究院	助教	大学院医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門(病理学)	講師
10.1	採用	松下 毅彦			大学院医歯薬保健学研究院 医学部附属医学教育センター	准教授
10.1	採用	平田 英司			大学院医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門(産婦人科学)	助教
10.1	採用	Ketut Suardita			大学院医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門(国際歯科学連携開発学)	特任准教授
10.1	採用	明智 煥			大学院医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門(総合バイオ)	特任助教
10.1	採用	吉村 晋平			大学院医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門(精神神経医学)	特任助教
10.1	配置換	田口 香織	大学院医歯薬保健学研究院	教育研究補助職員	大学院医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門(口腔生物工学)	特任助教
10.1	採用	土井 歆子			大学院医歯薬保健学研究院 放射線治療連携学講座(寄附講座)	寄附講座助教
10.1	採用	竹原 和宏			病院 泌尿・生殖器診療科	准教授
10.1	採用	時 林			原爆放射線医科学研究所	特任助教
10.1	採用	長町 安希子			原爆放射線医科学研究所	特任助教

修士課程

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
24.3.23	医歯薬学総合研究科	医歯科学専攻	にしだ けいこ	西田 圭子	血管内超音波検査法 (IVUS) を用いた冠動脈拡張性の検討
24.3.23	医歯薬学総合研究科	医歯科学専攻	さるわたり たつろう	猿渡 辰郎	尿中ヒ素化合物の化学形態別分析法に関する研究
24.3.23	医歯薬学総合研究科	医歯科学専攻	かわもと あきこ	川本 明子	自閉症責任領域であるヒト染色体15q11-13領域重複モデルマウスの行動薬理学的研究
24.3.23	医歯薬学総合研究科	医歯科学専攻	ふるたに たくま	古谷 拓磨	Gemininの発現抑制による未分化造血細胞活性の誘導
24.3.23	医歯薬学総合研究科	医歯科学専攻	みやぎ たつひろ	宮城 達博	中枢神経系における恒常的Gs活性型受容体GPR3の発現と神経細胞内局在
24.3.23	医歯薬学総合研究科	医歯科学専攻	かつら ゆかり	桂 由香理	体節と表皮外胚葉間の相互作用遮断による遠位肋骨欠損胚における体節細胞の挙動
24.3.23	医歯薬学総合研究科	医歯科学専攻	とうほう ひろかず	當房 浩一	母乳中のDAMPs活性物質の探索とアトピー性皮膚炎
24.3.23	医歯薬学総合研究科	医歯科学専攻	こいずみ かずひさ	小泉 一久	眼科専門病院で分離された臨床分離 <i>Staphylococcus aureus</i> の解析
24.3.23	医歯薬学総合研究科	医歯科学専攻	かわしま あい	川島 あい	ポリコム複合体1の構成因子の1つであるScmh1の分子機能解析
24.3.23	医歯薬学総合研究科	医歯科学専攻	ふくもと けいた	福本 景太	大脳皮質の局所的ネットワーク形成に寄与するGABA作動性神経細胞特異的な遺伝子の探索および機能解析
24.3.23	医歯薬学総合研究科	医歯科学専攻	さかい ちえみ	坂井 千恵美	Telmisartan Inhibits Migration of Vascular Smooth Muscle Cells via PPAR-gamma-independent Mechanism
24.3.23	医歯薬学総合研究科	医歯科学専攻	おおくぼ ひろこ	大久保 紘子	レンチウイルスを用いた遺伝子導入システムの確立とiN細胞の作製
24.3.23	医歯薬学総合研究科	医歯科学専攻	てつぐち ひろき	鐵口 博貴	Hoxa9によるGeminin分解制御を介した造血幹細胞の活性制御機構の解析
24.3.23	医歯薬学総合研究科	医歯科学専攻	にしきおり あや	錦織 亜矢	歯牙形成におけるSlc20a1の役割 - Slc20a1 トランスジェニックラットの解析 -
24.3.23	医歯薬学総合研究科	医歯科学専攻	ありま ようすけ	有馬 陽介	人体解剖学実習における効果的解剖手技とその意義についての検討
24.3.23	医歯薬学総合研究科	医歯科学専攻	いしい ひとみ	石井 仁美	ヒト歯肉線維芽細胞における <i>Porphyromonas gingivalis</i> LPS誘導性炎症性サイトカインおよびケモカインの産生に対する乳酸菌由来バクテリオシンkog1の影響
24.3.23	医歯薬学総合研究科	医歯科学専攻	たかもと ゆうこ	高本 祐子	<i>Lactobacillus rhamnosus</i> L8020株由来バクテリオシンの抗真菌作用の検討

修士課程

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
24.3.23	医歯薬学総合研究科	口腔健康科学専攻	いわぐる しょうご	岩畔 将吾	ジルコニアと前装用陶材の焼付強度におけるアルミナプラスト処理の効果と焼成速度の影響
24.3.23	医歯薬学総合研究科	口腔健康科学専攻	たむら あや	田村 彩	顎変形症患者における顎矯正手術後の側貌および正貌の変化に影響を及ぼす因子の検討
24.3.23	医歯薬学総合研究科	口腔健康科学専攻	かわかみ まな	川上 真奈	歯科用CAD/CAMのための支台歯形成評価システムの開発 - テーパー, 削除量, 辺縁形態の評価方法の開発 -
24.3.23	医歯薬学総合研究科	口腔健康科学専攻	かわむら すぐる	河村 卓	ヒト胚性幹細胞における上皮間葉移行の分子機構の解明
24.3.23	医歯薬学総合研究科	口腔健康科学専攻	ふかだ えり	深田 恵里	口腔内圧測定による吸啜・嚥下運動の解析 - 気圧センサーを用いた臨床的口腔内圧測定装置の開発 -
24.3.23	医歯薬学総合研究科	口腔健康科学専攻	ともなり だいご	友成 奈悟	口腔用ミュージックスプリントの形態とその使用効果の定量的評価
24.3.23	医歯薬学総合研究科	口腔健康科学専攻	おかざき しょうた	岡崎 昌太	メカニカルストレスに対する破骨細胞の反応にカルシウムの流入が関与している
24.3.23	医歯薬学総合研究科	口腔健康科学専攻	おおくら えみ	大倉 恵美	口腔保湿剤のテクスチャー解析と官能評価

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
24.3.23	医歯薬学総合研究科	口腔健康科学専攻	たかやま ゆきひろ	高山 幸宏	歯原上皮細胞株の樹立とその特徴に関する検討
24.3.23	医歯薬学総合研究科	口腔健康科学専攻	いわた さとし	岩田 慧	Diamond-like carbon coating of dental implant fixture surface increases mature trabecular bone formation <i>in vivo</i>

博士課程前期

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
24.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	ききつ あや	喜々津 彩	Telomere DSE-FRET assay による TRF2 結合阻害物質の探索
24.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	のもと ゆうや	野本 裕也	新規化合物探索を目的とした南方系植物の成分研究
24.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	みやら まさつぐ	宮良 政嗣	パーキンソン病関連神経毒 MPP ⁺ 低濃度曝露によるオートファジーの誘導
24.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	こんどう やすひろ	近藤 泰博	キラリリチウムアミドによるアシルシランの不斉還元を利用した新規光学活性アレン合成法の開発と合成反応への展開
24.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	さこう はなか	佐光 華佳	食餌および化学物質が肝薬物代謝酵素系に及ぼす影響の網羅的解析
24.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	みやうち るみ	宮内 瑠美	Brevicin 174A 生成制御システムに関する 2 つの転写調節因子の機能解析
24.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	なかむら あゆみ	中村 亜由美	新規 HDAC2 転写活性化因子結合配列の同定と転写活性化因子の探索
24.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	かじたに なおと	梶谷 直人	抗うつ薬によるラット初代培養アストロサイトからの線維芽細胞増殖因子-2 (FGF-2) 産生機構の検討
24.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	やまぐち りえ	山口 理恵	Flurbiprofen の新規標的タンパク質の同定および機能解析 ～肥満・糖尿病治療への応用～
24.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	みやさこ まさし	宮迫 雅	<i>Enterococcus mundtii</i> 15-1A 由来の乳酸脱水素酵素の機能及び構造解析
24.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	おおば たつや	大庭 達哉	小胞体ストレスと免疫応答の PKC δ を介したクロストーク ～アルツハイマー病の病態メカニズムの解明～
24.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	やの りょうや	矢野 遼也	グリア細胞における抗うつ薬誘導性グリア細胞株由来神経栄養因子 (GDNF) 産生機構の解明
24.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	おかだ ゆみ	岡田 結実	ヒト腎近位尿管由来 HK-2 細胞における albumin の細胞内移行特性とその分子機構
24.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	さわだ たけし	澤田 健史	ヒト腎近位尿管由来 HK-2 細胞におけるアミノグリコシド系抗生物質のエンドサイトーシス非依存性輸送の分子機構解析
24.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	さんぶいち けいすけ	三分一 圭祐	肺上皮細胞の形態・機能制御因子に関する研究
24.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	のりまつ よしあき	則松 欣明	マスト細胞の炎症性サイトカイン mRNA 誘導を制御する PI3 キナーゼサブタイプの解析
24.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	とくはら まさと	徳原 昌人	培養脊髄ミクログリアにおける P2Y 受容体刺激による Monocyte Chemoattractant Protein-1 (MCP-1) 発現制御機構の検討
24.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	あんどう まさふみ	安藤 雅史	1,3-ジアミノイミダゾリジノン型触媒を用いた不斉 Diels-Alder 反応における不斉誘導機構の解明
24.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	すぎもと よしみ	杉本 好美	植物乳酸菌が産生する病原微生物制御分子の探索研究
24.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	ほりぐち あや	堀口 彩	ヒト肝細胞キメラマウスを用いた 2-アシルプロピオン酸系抗炎症薬の代謝動態に関する研究
24.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	うだ なるとし	宇田 成利	D-Cycloserine 生合成に関与する酵素群の機能解析
24.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	すずき さとし	鈴木 聡	哺乳類トランスポーターの低温忍容性に関する研究

博士課程前期

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	しま ちせ	島 千世	緩和ケア病棟に入院して間もないがん患者への看護における困難
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	なかよし ようこ	中吉 陽子	直接貼用温罨法の下肢の貼用部位の違いによる温熱効果の検討
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	おおもり ふゆみ	大森 冬美	高齢の造血器腫瘍患者において口腔ケアの継続を困難にしている要因
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	もりわき さとこ	森脇 智子	地域子育て支援における母子相互作用に対する支援の検討
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	たかはま あすか	高濱 明香	在宅酸素療法を行う慢性呼吸不全患者の教育に関わる看護師への教育介入の効果
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	たけした やえ	竹下 八重	健診で肝機能異常を指摘された人に対する受診勧奨を目的とした保健指導の効果とその方法の検討 - 企業に対して実施した結果から -
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	やまもと ようこ	山本 洋子	1歳6か月児を持つ母親が抱えている育児幸福感
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	きど ゆうこ	木戸 裕子	母親がNICUに入院した子どもの退院を決心するまでの経験 - 入院が長期化しやすい疾患をもつ子どもの母親に焦点をあてて -
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	やまぐち みわ	山口 美和	造血幹細胞移植患者の移植後のニーズに対する看護師の認識と実践
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	さい よんえ	崔 英愛	中国都市部における高年初産婦の産褥・乳児期の体験に関する研究
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	いとう きょうこ	伊藤 教子	在宅療養高齢者に対するホームヘルパーの食事支援実態調査
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	さかぐち さとこ	坂口 聡子	高齢がん患者に対するライフレビューを用いたコラージュ活動の有効性について
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	こにし かな	小西 華奈	中高年の2型糖尿病患者における心拍変動係数と静的ハンドグリップ運動時の循環応答の関連
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	よしおか あや	吉岡 亜耶	手指筋筋腱グライディングエクササイズ中の脳活動 - 利き手、非利き手の違いによる影響と運動学習効果についての検討 -
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	かわごえ だいすけ	川越 大輔	慢性腰痛患者に対する気晴らしの有効性に関する検討
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	すずき けんたろう	鈴木 謙太郎	脊柱屈曲姿勢持続後の立位体幹前屈運動 - 腰部ストレスと腰部筋活動の変化 -
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	ば ぎよくほう	馬 玉宝	足関節に対するテーピングがバランス能力および足関節周囲筋の筋活動に与える影響
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	もりかわ くみ	森川 久美	重力による筋細胞分化の促進と抑制
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	ささだい じゅんべい	笹代 純平	テーピングがサッカー選手のインステップキックに及ぼす影響
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	たぶち けいじ	田淵 啓二	血清カルシウム値および血清リン値が血液透析患者の生命予後に与える影響について
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	たかい さとし	高井 聡志	外反母趾に対する運動療法の考察
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	やぎ まさひで	八木 優英	足関節慢性不安定性を有する人の姿勢制御
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	どうめん さやか	堂面 彩加	中強度運動による喫煙者の血液中および肺局所の酸化ストレス反応に関する研究
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	むらき けんすけ	村木 健輔	臨床看護師の組織・キャリアコミットメントおよび私生活の充実度 - 雇用形態の相違による検討 -
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	うちだ あやか	内田 彩香	統合失調症者の幻聴体験に伴い見られる行動の特徴に関する探索的研究
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	つじ ゆきこ	辻 優紀子	曲の難易度、音の有無が鍵盤楽器演奏中の脳活動に与える影響の検討 - より有効な音楽療法への応用を目指して -
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	あおかげ よりゆき	青景 遵之	異なる運動学習様式に伴う脳活動変化の比較 - NIRSによる検討 -
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	おうりょうじ かずよ	押領司 和代	脳卒中急性期に重度意識障害を呈した患者への作業療法介入に関する探索的研究 - 回復した患者の記憶に焦点をあてて -
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	はやし しほ	林 志保	アスペルガー障害児者に聞く『自閉症スペクトラム障害児者と関わる時のコツ・具体的な接し方』について - 文献・インタビューによる検証 -
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	しんぐう みほ	新宮 美穂	海外渡航移植に伴う援助の実態と課題

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	なかにし はじめ	中西 一	健常者との比較によるパーキンソン病患者の運動イメージ想起能力の低下について-運動イメージ想起能力の低下が動作困難の原因となるのか-
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	ふじい えり	藤井 絵里	着地動作における足部接地方法が床反力および下肢関節運動に与える影響
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	おりた なおや	折田 直哉	膝後十字靭帯単独損傷による歩行時膝関節運動への影響
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	そう ぎよくは	曹 煜波	導引養生功が身体機能と精神的健康に及ぼす影響
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	いしい けい	石井 圭	Central command contributes to increased blood flow in the non-exercising muscle at the start of one-legged dynamic exercise in humans. セントラルコマンドは片脚運動開始時の非活動筋血流量増加に寄与する
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	よしだ あきひと	吉田 彬人	両手動作の両側同時三次元動作解析 -手関節スプリント固定がペットボトルキャップ開閉動作に及ぼす影響-
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	すずき さとし	鈴木 聡史	等尺性収縮による筋持久力とその持久時間の関係性の検討および任意の負荷における最大筋力の予測

博士課程

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
23.11.24	医学系研究科	外科系専攻	ひらた えいじ	平田 英司	Comparative histological study of levels 1-3 supportive tissues using pelvic floor semiseriate sections from elderly nulliparous and multiparous women (未産婦と経産婦の女性骨盤底準連続切片を用いたDeLanceyのレベル1-3における骨盤底支持組織の研究)

博士課程

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
23.11.24	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	たけなか じょうじ	竹中 丈二	Evaluation of rebound tonometer for measuring intraocular pressure at deviated angle and position (リバウンドトノメーターの測定する角度や位置がずれたときの測定眼圧値への影響) 1. Evaluation of rebound tonometer for measuring intraocular pressure at deviated angle and position (リバウンドトノメーターの測定する角度や位置をずらしたときの測定眼圧値への影響) 2. Intraocular pressure measurement using rebound tonometer for deviated angles and positions in human eyes (ヒトに対してリバウンドトノメーターの測定する角度や位置をずらしたときの眼圧)
24.1.26	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	こうだ しゅんたろう	甲田 俊太郎	Mechanism for multidrug resistance and increased prevalence and clonal dissemination of multidrug-resistant <i>Pseudomonas aeruginosa</i> in Hiroshima (広島地区における多剤耐性緑膿菌の耐性機序とその増加、クローンとしての拡がり) 1. Increased prevalence and clonal dissemination of multidrug-resistant <i>Pseudomonas aeruginosa</i> with the <i>bla</i> _{IMP-1} gene cassette in Hiroshima (広島地区における <i>bla</i> _{IMP-1} 遺伝子を保有する多剤耐性緑膿菌の増加とクローンとしての拡がり) 2. Sporadic isolations of a multi-drug resistant <i>Pseudomonas aeruginosa</i> clone during a 14-month epidemic in a general hospital in Hiroshima (広島の総合病院で14ヶ月の間に起こった多剤耐性緑膿菌の散発的流行)
24.1.26	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	ちよう くん	張 君	LST8 level controls basal p70 S6 kinase and Akt phosphorylations, and mTORC1 and mTORC2 negatively regulate each other by competing for association with LST8 (LST8発現量はP70 S6キナーゼとAktのリン酸化を制御し、mTORC1とmTORC2はLST8の含有を競合することによってお互いを負に調節する)
24.2.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	いしはら あいこ	石原 愛子	Relationship between 3-O-methyldopa and the clinical effects of entacapone in advanced Parkinson's disease (進行期パーキンソン病における3-O-メチルドーパとエンタカポンの臨床効果の関係)

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
24.2.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	かく えい	郭 瑩	Decreased SIRT1 expression and LKB1 phosphorylation occur with long-term high-fat diet feeding, in addition to AMPK phosphorylation impairment in the early phase (高脂肪食負荷によって初期にAMPKリン酸化が抑制され、その後SIRT1の発現低下とLKB1リン酸化の抑制が生じる)
24.2.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	こばやし けんそう	小林 賢惣	Assessment of trypsinogen-2 levels as an early diagnostic for post-endoscopic retrograde cholangiopancreatography pancreatitis (トリプシノーゲン2測定を用いたERCP後膵炎早期診断の検討)
24.2.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	さこぐち てつひこ	迫口 哲彦	Growth hormone receptor expression in brain tumors (脳腫瘍における成長ホルモンレセプターの発現)
24.2.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	でもと よしひこ	出本 吉彦	Neural and personality correlates of individual differences related to the effects of acute tryptophan depletion on future reward evaluation (急性トリプトファン枯渇によって及ぼされる将来的な報酬評価への影響と、神経学的基盤や性格傾向の個体差との関連)
24.2.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	はなおか りえ	鼻岡 理恵	The water-soluble extract from cultured medium of <i>Ganoderma lucidum</i> (Reishi) Mycelia (designated as MAK) ameliorates murine colitis induced by trinitrobenzene sulphonic acid (霊芝菌糸体培養基熱水抽出物(MAK)は、マウスTNBS腸炎を改善する)
24.2.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	ふじた やすたか	藤田 康孝	Asymmetric alternation of the hemodynamic response at the prefrontal cortex in patients with schizophrenia during electroconvulsive therapy: A near-infrared spectroscopy study (統合失調症患者における電気けいれん療法中の前頭葉血流の非対称性変化について～近赤外線スペクトロスコピーを用いた研究～)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	いとう よく	伊藤 翼	無血清培養系を用いたヒト口腔扁平上皮癌細胞株由来side population細胞群の細胞・分子生物学的特性
24.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	いまがわ ひろき	今川 宏樹	Improved visibility and detectability of the small intestine via capsule endoscopy with computed virtual chromoendoscopy (仮想色素内視鏡を用いたカプセル内視鏡検査による小腸病変の視認性と検出能の向上) 1) Improved visibility of lesions of the small intestine via capsule endoscopy with computed virtual chromoendoscopy (仮想色素内視鏡を用いたカプセル内視鏡画像に対する視認性の向上) 2) Improved detectability of small-bowel lesions via capsule endoscopy with computed virtual chromoendoscopy: A pilot study (仮想色素内視鏡を用いたカプセル内視鏡による小腸病変検出能の向上)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	おおはら えいじ	大原 英司	Elimination of hepatitis C virus by short term NS3-4A and NS5B inhibitor combination therapy in human hepatocyte chimeric mice (C型肝炎ウイルス感染マウスを用いたプロテアーゼ阻害剤およびRNAポリメラーゼ阻害剤の抗ウイルス効果の検討)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	おかやま たかしげ	岡山 幸誠	抗腫瘍剤であるスクレオシドアナログの消化管吸収に関与するトランスポーターの研究
24.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	おんじ けいいち	蔭地 啓市	Novel diagnostic examination for colon cancer (大腸癌に対する新しい診断法) 1) Quantitative analysis of colorectal lesions observed on magnified endoscopy images (拡大内視鏡画像における大腸腫瘍の定量分析) 2) Microvascular structure and perfusion imaging of colon cancer by means of contrast-enhanced ultrasonography (造影超音波検査による大腸癌の微小血管構造と灌流画像)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	かみがき みちひろ	神垣 充宏	Statins induce apoptosis and inhibit proliferation in cholangiocarcinoma cells (Statinは胆管癌細胞株をApoptosisに導き、増殖を抑制する)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	くらだ しんたろう	黒田 慎太郎	Rho inhibitor prevents ischemia-reperfusion injury in rat steatotic liver (Rhoキナーゼ阻害剤は脂肪肝虚血再灌流障害を軽減する)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	こうの ともゆき	河野 智之	Cancer-associated ischemic stroke is associated with elevated D-dimer and fibrin degradation product levels in acute ischemic stroke with advanced cancer (悪性腫瘍に関連した脳梗塞は悪性腫瘍の進行度、D-dimerとfibrin degradation product高値と関連する)

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
24.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	さのう せいごう	佐能 正剛	ヒト型肝臓モデルマウスを用いた医薬品のヒト体内動態予測に関する研究
24.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	さのむら ようじ	佐野村 洋次	Expansion of the criteria for curative endoscopic submucosal dissection of submucosal invasive gastric cancer (胃粘膜下層浸潤癌に対する内視鏡的粘膜下層剥離術後根治基準拡大) 1. Clinical validity of endoscopic submucosal dissection for submucosal invasive gastric cancer: a single-center study (胃粘膜下層浸潤癌に対する内視鏡的粘膜下層剥離術の臨床的妥当性) 2. Predicting the absence of lymph node metastasis of submucosal invasive gastric cancer: Expansion of the criteria for curative endoscopic resection (胃粘膜下層浸潤癌におけるリンパ節転移陰性予測: 内視鏡治療根治基準拡大に向けて)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	せがわ まさひろ	瀬川 昌弘	Electroconvulsive seizure, but not imipramine, rapidly up-regulates pro-BDNF and t-PA, leading to mature BDNF production, in the rat hippocampus. (電気痙攣発作刺激は、イミプラミンとは異なり、ラット海馬内でのpro-BDNF及びt-PAの発現を急速に亢進させ、成熟体BDNFの産生を導く)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	たけむら よしと	竹村 嘉人	Computer-aided system for magnified colonoscopic images (大腸拡大内視鏡に対するコンピュータ支援診断システム) 1) Quantitative analysis and development of a computer-aided system for identification of regular pit patterns of colorectal lesions (大腸病変のregular pit pattern分類に対する定量的解析とコンピュータ支援診断システムの開発) 2) Computer-aided system for predicting the histology of colorectal tumors by using narrow-band imaging magnifying colonoscopy (with video) (NBI拡大内視鏡による腫瘍・非腫瘍の鑑別に対するコンピュータ支援診断システム)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	とくなが まさかず	徳永 真和	Research on training for endoscopic surgery and assessment of endoscopic surgical skills (内視鏡外科手術トレーニングとその技術評価に関する研究) 1. The importance of stressing the use of laparoscopic instruments in the initial training for laparoscopic surgery using box trainers: A randomized control study (初期の内視鏡外科トレーニングにおいて鉗子操作に重きを置くことの重要性) 2. Approaching time is important for assessment of endoscopic surgical skills (Approaching timeは内視鏡外科手術の技術評価に重要である)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	とだ りょうたろう	戸田 良太郎	Comparison of drug permeabilities across the blood-retinal barrier, blood-aqueous humor barrier, and blood-brain barrier (血液-網膜関門、血液-房水関門および血液-脳関門における薬物透過性の相違)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	ふかの やすふみ	深野 泰史	プロスタグランジン誘導体タフルプロストの眼内動態およびその代謝物プロファイリング法の研究
24.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	ふるしょう ひさこ	古庄 寿子	<i>P.gingivalis</i> 菌性感染はnon-alcoholic steatohepatitis (NASH)の病態を増悪させる
24.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	まつお たいじ	松尾 泰治	Gastric cancer development without <i>Helicobacter pylori</i> infection in Japan (本邦におけるヘリコバクター・ピロリ陰性症例からの胃癌発生) 1. Low prevalence of <i>Helicobacter pylori</i> -negative gastric cancer among Japanese (日本人の胃癌においてヘリコバクター・ピロリ陰性胃癌の有病率は低い) 2. Gastric cancer development after <i>Helicobacter pylori</i> eradication therapy: a new form of gastric neoplasia (ヘリコバクター・ピロリ除菌後発見胃癌の特徴)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	みずまち えみり	水町 栄美理	バイオフィルム産生黄色ブドウ球菌についての研究
24.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	みまえ たかひろ	見前 隆洋	Upregulation of Notch2 and Six1 is associated with progression of early-stage lung adenocarcinoma and a more aggressive phenotype at advanced stages (転写因子Notch2とSix1は早期肺腺癌の浸潤部で高発現し、進行期肺腺癌に悪性形質を付与する)

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
24.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	もりおけ さとし	森桶 聡	Sulfated cellulose suppresses IgE production by murine B lymphocytes <i>in vitro</i> (硫酸化セルロースは <i>in vitro</i> でマウスB細胞からのIgE産生を抑制する)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	やまさき さちこ	山崎 佐知子	マウス人工多能性幹細胞 (iPS細胞) の単層無血清培養系の確立および同培養系を用いたヒトiPS細胞の樹立に関する研究
24.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	やまざき ゆう	山崎 雄	Histopathological examination of granulovacuolar degeneration in human hippocampal neurons (ヒト海馬における顆粒空胞変性に関する病理組織学的検討) 1) Immunopositivity for ESCRT-III subunit CHMP2B in granulovacuolar degeneration of neurons in the Alzheimer's disease hippocampus (エンドソーム関連蛋白CHMP2Bのアルツハイマー病海馬・顆粒空胞変性における免疫染色性) 2) Granulovacuolar degenerations appear in relation to hippocampal phosphorylated tau accumulation in various neurodegenerative disorders (顆粒空胞変性はさまざまな神経変性疾患において、海馬のリン酸化タウ蓄積と関連して出現する)
24.5.24	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	かじたに けいこ	梶谷 桂子	Mechanistic analysis of the antitumor efficacy of human natural killer cells against breast cancer cells (乳癌細胞に対するヒトNatural killer細胞の抗腫瘍効果のメカニズム解析)
24.5.24	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	くろぎ としあき	黒木 利知	A methyl-deficient diet modifies early B cell development (メチル欠乏食投与における初期B細胞分化の異常)
24.5.24	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	どひ えいすけ	土肥 栄祐	Hypoxic stress activates chaperone-mediated autophagy and modulates neuronal cell survival (低酸素負荷によりシャペロン介在性オートファジーは活性化し、神経細胞の生存を制御する)
24.5.24	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	ふじた ようすけ	藤田 洋輔	Vorinostat, a histone deacetylase inhibitor, facilitates fear extinction and enhances expression of the hippocampal NR2B-containing NMDA receptor gene (ヒストン脱アセチル化酵素阻害剤であるVorinostatは、恐怖記憶の消去を促進し、海馬のNR2Bを有するNMDA受容体遺伝子の発現を上昇させる)
24.5.24	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	やまぐち たけし	山口 剛	Preventive effect of G-CSF on acute lung injury via alveolar macrophage regulation (肺胞マクロファージ制御を介した顆粒球刺激因子による急性肺傷害予防効果)
24.9.6	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	おくはら こういちろう	奥原 宏一郎	Change in bilirubin level following acute myocardial infarction is an index for heme oxygenase activation (急性心筋梗塞患者のビリルビン濃度変化はヘムオキシネゲース活性の指標である)
24.9.6	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	ししど たかよし	宍戸 孝好	Clinical significance and usefulness of total enteroscopy for patients with obscure gastrointestinal bleeding (原因不明の消化管出血患者に対する全小腸内視鏡検査の臨床的意義と有用性) 1. Diagnostic yield of capsule endoscopy vs. double-balloon endoscopy for patients who have undergone total enteroscopy with obscure gastrointestinal bleeding (全小腸内視鏡検査を施行したOGIB患者におけるカプセル内視鏡とダブルバルーン内視鏡による小腸病変に対する診断能の比較) 2. Outcome of patients who have undergone total enteroscopy for obscure gastrointestinal bleeding (ダブルバルーン内視鏡にて全小腸内視鏡検査を施行したOGIB患者の診断と治療成績)
24.9.6	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	よしおか きょうこ	吉岡 京子	Role of natural killer T cells in the mouse colitis-associated colon cancer model (マウス消化管炎症性発癌モデルにおけるNKT細胞の役割)
24.9.25	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	いるま じよせふいな さふいとり	Irma Josefina Savitri	Irsogladine maleate inhibits the enhancement of Toll-like receptor 2 mediated by <i>Porphyromonas gingivalis</i> in human gingival epithelial cell (イルソグラジンマレイン酸はヒト歯肉上皮細胞において歯周病原性細菌 <i>Porphyromonas gingivalis</i> によって誘導されるTLR2の産生を抑制する)
24.9.25	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	いんたん すらいや めりかん あるじゅにっど めりかん	Intan Suraiya Merican Aljumid Merican	The role of nuclear Survivin in Head and Neck Squamous Cell Carcinoma (頭頸部扁平上皮癌における核内Survivinの役割に関する検討)

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
24.9.25	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	じりん	時林	A modified system for analyzing ionizing radiation-induced chromosome abnormalities (放射線照射により誘発された染色体異常解析法の確立)

博士課程

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
23.11.24	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	きよ ようこ	許 洋子	Identification of therapy-sensitive and therapy-resistant neuroblastoma subtypes in stages III, IVs and IV (Ⅲ期、Ⅳs期、Ⅳ期神経芽腫に対する「治療成績良好群」と「治療成績不良群」の識別)
23.11.24	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	しおた なおき	塩田 直樹	Association of airway inflammation with asthma control level evaluated by the Asthma Control Test (Asthma Control Testで評価した喘息コントロールレベルと気道炎症の関連)
23.11.24	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	せら さとし	世良 哲	Stem/progenitor cells in closed suction drainage fluid after hip arthroplasty (人工股関節置換術後閉鎖式ドレナージ回収血における自己由来幹細胞源としての研究)
23.11.24	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	たなか えいじ	田中 英司	Detection of large expansions in SCA8 using a fluorescent repeat-primed PCR assay (repeat-primed PCR法によるSCA8における異常伸長の検出)
23.11.24	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	にしの りょうへい	西野 亮平	Identification of Epstein-Barr virus-induced gene 3 as a novel serum and tissue biomarker and a therapeutic target for lung cancer (Epstein-Barr virus-induced gene 3は肺癌の新規血清・組織バイオマーカー及び治療標的分子である)
23.11.24	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	はらき としあき	原木 俊明	Mutated p.4894 RyR1 function related to malignant hyperthermia and congenital neuromuscular disease with uniform type 1 fiber (CNMDU1) (悪性高熱症とCNMDU1に関連した1型リアノジン受容体の4894番目のアミノ酸変異がもたらす機能変化)
24.1.26	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	いくた たくや	生田 卓也	Spontaneously hypertensive rats develop pronounced hepatic steatosis induced by choline-deficient diet: evidence for hypertension as a potential enhancer in non-alcoholic steatohepatitis (高血圧自然発症ラットはコリン欠乏食により著明な脂肪肝を生じる:非アルコール性脂肪性肝炎における高血圧症の増悪因子としての役割についての検証)
24.1.26	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	かわせ しげお	河瀬 成穂	Change in serum KL-6 level from baseline is useful for predicting life-threatening EGFR-TKIs induced interstitial lung disease (EGFR-TKIによる薬剤性肺障害における血清KL-6値モニタリングの有用性)
24.1.26	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	みやもと しんたろう	宮本 真太郎	Intra-airway administration of small interfering RNA targeting plasminogen activator inhibitor-1 attenuates allergic asthma in mice (プラスミノゲン アクティベーター インヒビター-1を標的としたsiRNAの経気道投与はマウスにおけるアレルギー性喘息を抑制する。)
24.2.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	ふじはら いさお	藤原 勳	血管性認知症高齢者のADL、認知症症状および口腔内状態との関連に関する臨床的研究
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	いずみ ぶんいちろう	泉 文一郎	MicroRNA-223 expression in neutrophils in the early phase of secondary damage after spinal cord injury (脊髄損傷後の二次損傷早期、好中球におけるmicroRNA-223の発現)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	いでい なおみ	出井尚美	Autologous bone-marrow mononuclear cell implantation reduces long-term major amputation risk in patients with critical limb ischemia (自家骨髄単核球細胞移植は、重症虚血肢患者の下肢切断の長期リスクを改善する。)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	おおはら ゆかり	大原 紫	口腔内環境因子がStreptococcus mutansの齲蝕関連遺伝子に及ぼす影響
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	おか としはる	岡 俊治	Association between epicardial adipose tissue volume and characteristics of non-calcified plaques assessed by coronary computed tomographic angiography (心外膜脂肪量と冠動脈非石灰化プラークの特徴との関連性-多列検出器型コンピュータ断層装置による評価-)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	おくい かく	奥井 岳	口腔扁平上皮癌における液性因子によるEMT誘導機構の解析
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	おくはら あつし	奥原 淳史	Changes in microRNA expression in peripheral mononuclear cells according to the progression of osteoarthritis (変形性関節症の進行に伴い、末梢血単核球におけるmicroRNAの発現量は変化する)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	おくむら としや	奥村 俊哉	新しい脂肪分解制御分子の発見とその分子基盤解明研究

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	かめい ごうき	亀井 豪器	Characteristic shape of the lateral femoral condyle in patients with osteochondritis dissecans accompanied by a discoid lateral meniscus (外側円板状半月に伴う離断性骨軟骨炎患者の大腿骨外側側の特徴的形態について)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	こんどう なる	近藤 成	Combined analysis of dihydropyrimidine dehydrogenase and human equilibrative nucleoside transporter 1 expression predicts survival of pancreatic carcinoma patients treated with adjuvant gemcitabine plus S-1 chemotherapy after surgical resection (膵癌におけるhENT1およびDPDの腫瘍内発現を複合評価することにより、ジェムシタビン+S-1による術後補助化学療法を受けた患者の予後を予測することができる)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	さかべ りゅうたろう	坂部 龍太郎	Prognostic significance of telomerase activity and human telomerase reverse transcriptase expression in ampullary carcinoma (テロメラーゼ活性とTERT発現は十二指腸乳頭部癌の予後予測指標となる)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	さら あべでい	Sara Abedini	Long-term Cryopreservation of Periodontal Ligament Cells and Pulp Tissues by Use of a Newly-developed Programmed Freezer with Magnetic Field (磁場を利用したプログラムフリーザーによる歯根膜細胞、および歯髓細胞の長期凍結保存法の検討)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	ながやす しんたろう	永安 慎太郎	ココアフラボノールの心血管イベント抑制効果機序の検討 ～脂肪細胞・マクロファージ相互作用の観点から～
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	なからい ひでお	半井 英雄	脂肪細胞-マクロファージ相互作用による内毒素誘導性微細炎症の増幅機序に関する研究
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	にいもと たくや	新本 卓也	MicroRNA-146a expresses in interleukin-17 producing T cells in rheumatoid arthritis patients (関節リウマチのIL-17産生T細胞におけるMicroRNA-146aの発現)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	はたの ひろこ	波多野 寛子	RHAMM/ERK interaction induces proliferative activities of cementifying fibroma cells through a mechanism based on the CD44-EGFR. (骨形成線維腫に特異的な細胞増殖・分化機構の解明)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	はやし ひでたか	林 英貴	機能的矯正装置を用いた下顎頭再生機序の解明
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	ふくい あきこ	福井 暁子	口腔粘膜上皮細胞、線維芽細胞におけるウイルス認識機構RIG-Iの機能解析
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	ふじい さきこ	藤井 紗貴子	歯髓細胞のマーカー遺伝子の探索および無血清培養
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	ふじむら のりたか	藤村 憲崇	Geranylgeranylacetone, heat shock protein 90/AMP-activated protein kinase/endothelial nitric oxide synthase/nitric oxide pathway, and endothelial function in humans (ゲラニルゲラニルアセトンによる熱ショック蛋白90/AMP蛋白活性化キナーゼ/内皮型一酸化窒素生成酵素/一酸化窒素経路とヒトにおける血管内皮機能についての検討)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	ふじもり じゅん	藤森 淳	Antitumor effects of telomerase inhibitor TMPyP4 in osteosarcoma cell lines (テロメラーゼ阻害剤 TMPyP4による骨肉腫細胞への抗腫瘍効果)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	ほり ともはる	堀 智治	二酸化塩素の義歯洗浄剤成分への応用に関する基礎的研究
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	まえだ しゅうさく	前田 修作	Associations between small dense LDL, HDL subfractions (HDL2, HDL3) and risk of atherosclerosis in Japanese-Americans (日系米人におけるsmall dense LDL, HDL亜分画 (HDL2, HDL3)と動脈硬化リスクとの関連)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	ますだ けん	益田 健	Chondrolectin is a novel diagnostic biomarker and a therapeutic target for lung cancer (コンドロレクチンは肺癌の新たな診断マーカー及び治療標的である)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	ますなが もりお	増永 守雄	上顎犬歯低位唇側転位に伴う叢生の新たな発現機序の探索:側方歯の歯軸傾斜と顎顔面骨格の垂直的の不調和の関わり
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	まつだ やよい	松田 弥生	矯正歯科治療中の歯根吸収に対する反復的矯正力の影響と発現機序の解明
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	みつば なおや	光波 直也	Deep echo attenuation without calcification increases the risk of periprocedural myonecrosis after elective percutaneous coronary intervention in patients with coronary artery disease (冠動脈疾患患者の待機的経皮的冠動脈インターベンションにおいて、血管内超音波で観察される石灰化を伴わない減衰エコーの存在は心筋傷害発症の危険性を増加させる)
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	みつよし ともみ	光吉 智美	ヒアルロン酸およびsuperficial zone protein (SZP) が関節潤滑に及ぼす影響
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	みやはら たけし	宮原 岳史	プロテインキナーゼCの酵素活性とトランスロケーションに対するプロボフォールの効果
24.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	ゆあさ よしお	湯浅 吉夫	Histological loss of pancreatic exocrine cells correlates with pancreatic exocrine function after pancreatic surgery (膵切除後の膵外分泌機能は、膵外分泌細胞の喪失割合と相関する)

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
24.5.24	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	いしかわ まさき	石川 雅基	Long-term outcomes of hepatic arterial port implantation using a coaxial microcatheter system in 176 patients with hepatocellular carcinoma (176人の肝細胞癌患者に対して留置されたcoaxial法を用いた肝動注用ポートの長期成績)
24.5.24	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	おおつぼ しん	大坪 晋	The therapeutic potential of ex vivo expanded CD133 ⁺ cells derived from human peripheral blood for peripheral nerve injuries (末梢血由来体外増幅CD133陽性細胞移植による末梢神経再生)
24.5.24	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	くにた えいじ	國田 英司	Association between plasma high-molecular-weight adiponectin and coronary plaque characteristics assessed by computed tomography angiography in conditions of visceral adipose accumulation (内臓脂肪蓄積下における血漿高分子量アディポネクチンと冠動脈プラークの特徴との関連性-多列検出器型コンピュータ断層装置による評価-)
24.5.24	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	やまざと りょう	山里 亮	Association between aortic valve calcification and myocardial ischemia especially in asymptomatic patients (大動脈弁石灰化と心筋虚血の関連性、特に無症候性患者において)
24.9.6	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	あごう りか	吾郷 里華	Morning blood pressure is useful for detection of left ventricular hypertrophy in hemodialysis patients (透析患者での左室肥大検出における朝血圧測定の有用性)
24.9.6	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	しぶや はやし	渋谷 早俊	Overexpression of microRNA-223 in rheumatoid arthritis synovium controls osteoclast differentiation (関節リウマチ滑膜に強発現するmicroRNA-223は破骨細胞分化を制御する)
24.9.6	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	つむら みゆき	津村 弥来	Dominant-negative STAT1 SH2 domain mutations in unrelated patients with Mendelian susceptibility to mycobacterial disease (STAT1 SH2ドメインにおける新規優性阻害変異の同定とMSMD発症の分子病態解析)
24.9.6	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	みやうち あきら	宮内 晃	Morphological features and clinical significance of epidural membrane in the cervical spine (頸椎におけるepidural membraneの形態的特徴と臨床的意義)
24.9.6	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	ゆのかわ まゆ	温泉川 真由	Efficacy of everolimus, a novel mTOR inhibitor, against basal-like triple-negative breast cancer cells (basal-likeトリプルネガティブ乳癌細胞株に対する新規mTOR阻害薬であるeverolimusの効果)
24.9.25	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	おおまつ ひであき	大松 秀明	遺伝子解析による食道がん化学放射線療法の適正化
24.9.25	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	こ いつぐん	胡 軼群	Characterization and application of Aml on the cariogenic streptococci (齲蝕原性レンサ球菌におけるAmlの特性と応用)
24.9.25	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	こにし まさる	小西 勝	嚥下造影検査における検査食に関する研究
24.9.25	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	た と とらん	Ta To Tran	Stability, localization and possible chloride channel activity of TMEM16E/GDD1 (TMEM16E/GDD1の安定性、細胞内局在、クロライドチャンネル活性の検討)
24.9.25	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	まれたにんていあす どうい ありあに	Maretaningtias Dwi Ariani	New development of carbonate apatite-chitosan scaffolds for tissue engineering (再生医学への応用に向けた新規炭酸アパタイト・キトサン複合体の開発)

博士課程後期

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
24.1.26	保健学研究科	保健学専攻	おおうえ たかし	大植 崇	看護師のバーンアウトに影響を及ぼす認知過程の明確化とバーンアウト低減に向けた認知行動療法プログラムの試み
24.1.26	保健学研究科	保健学専攻	こばやし ひろみ	小林 裕美	在宅で終末期を迎える人を介護する家族の予期悲嘆尺度の開発と実用可能性の検討
24.2.23	保健学研究科	保健学専攻	おかだ るりこ	岡田 ルリ子	片側手浴による温熱刺激が対側前腕部の皮膚角層へ及ぼす影響
24.2.23	保健学研究科	保健学専攻	かわごえ まさひろ	川越 雅弘	要介護高齢者の退院支援プロセスへのリハビリテーション専門職の介入効果
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	あなん まさや	阿南 雅也	Biomechanical characteristics of sit-to-stand motion with symptomatic knee osteoarthritis (症候性変形性膝関節症患者における椅子からの立ち上がり動作のバイオメカニクス特性)
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	さびとり さほこた	Sabitri Sapkota	The husband's attendance at childbirth in Nepal: Experiences of women and their husbands, and the impact on birth outcomes and maternal emotional well-being of a new mother during postnatal period (ネパールにおける夫の立会い出産が夫婦の感情や経験に及ぼす影響、および出産時と出産後の母親の生理的・心理的要因に与える効果)

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
24.3.23	保健学研究科	保健学専攻	よしだ いつこ	吉田 いつこ	Development and evaluation of Entertainment-Education for HIV/AIDS prevention using traditional folk songs 'lam' in Lao PDR (ラオスにおける伝統的民謡「ラム (lam)」を活用したエイズ予防対策のためのエンターテイメント・エデュケーションの開発とその効果評価)
24.7.26	保健学研究科	保健学専攻	みき えみ	三木 恵美	高齢がん患者の認知機能低下に対する速度フィードバック療法の有効性に関する研究

博士課程後期

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
24.3.23	医歯薬学総合研究科	薬学専攻	いけもと ひだか	池本 陽峰	共役性置換基に隣接するキラルカルバニオンの立体化学的安定性と求電子置換反応における立体化学
24.3.23	医歯薬学総合研究科	薬学専攻	おんざわ よりたか	隠澤 和恭	パーキンソン病治療薬L-DOPAの代謝物3-O-methyldopaの中枢機能に対する影響
24.3.23	医歯薬学総合研究科	薬学専攻	ほりべ さよ	堀部 紗世	ヒト肺がん由来A549細胞における光感受性物質の細胞内蓄積と細胞障害効果に及ぼすシスプラチン耐性化の影響

(注) 所属欄の(医)は医学分野、(歯)は歯学分野、(薬)は薬学分野、(保)は保健学分野を示す。

基盤研究(A)

研究課題名	所属	職名	研究代表者名	配分額(円) (直接経費)
CD47-SIRP αシグナルを介した癌細胞免疫回避機構の解明とその制御法の開発	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	大段 秀樹	10,900,000
磁性化前駆・幹細胞と外磁場装置による血管再生を介した組織再生への戦略的研究	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	越智 光夫	4,700,000
EMTによる口腔癌高度悪性化機構の解明と制御	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	教授	鎌田 伸之	5,600,000
口腔癌の浸潤・転移機構の解明とその悪性度診断ならびに遺伝子治療への応用	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	教授	高田 隆	5,600,000
看護師と医療保険者の役割機能拡大による新たな慢性疾患ケア提供モデルの構築	大学院医歯薬保健学研究院(保)	教授	森山 美知子	9,000,000
若齢期放射線被曝による晩発障害に関する社会医学的研究	原爆放射線医学研究所	教授	大瀧 慈	10,100,000

基盤研究(B)

研究課題名	所属	職名	研究代表者名	配分額(円) (直接経費)
複合体解析を駆使したインスリン抵抗性と慢性炎症の分子メカニズム解明	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	浅野 知一郎	3,100,000
微小重力環境を用いた下垂体幹細胞の培養技術の開発—人工下垂体への応用を目指して	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	栗栖 薫	3,700,000
ケミカルシャペロンを活用した難治性神経疾患の新規治療戦略の構築	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	酒井 規雄	3,100,000
画像誘導放射線治療システムを用いた最新体幹部位照射法と強度変調照射法との開発	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	永田 靖	1,600,000
シナプス前細胞の生後発達シナプス結合の再編成に与える影響	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	橋本 浩一	3,900,000
新規ストレス経路によるNF-κB活性制御機構と発癌	大学院医歯薬保健学研究院(医)	准教授	鎌田 英明	3,700,000
難治性呼吸器疾患に対する経気道的粉末製剤投与による核酸治療及び分子標的治療の開発	大学院医歯薬保健学研究院(医)	准教授	服部 登	2,700,000
気候変動が引き起こす原生動物の多様性減少モニタリングのための分類学的基盤の構築	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	名誉教授	重中 義信	3,500,000
旧ソ連邦セミアラタンスク核実験場周辺住民に多発する顎顔面口腔疾患の分子疫学的研究	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	教授	岡本 哲治	2,500,000
神経前駆細胞の機能制御のためのモジュール化バイオマテリアルの設計	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	教授	加藤 功一	1,900,000
転写因子DEC1による血圧制御機構の解明	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	教授	加藤 幸夫	3,900,000
ブラークエコシステムが齧蝕細菌遺伝子に及ぼす影響	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	教授	香西 克之	3,600,000
変形性顎関節症における関節潤滑能の改善と軟骨修復・再生の有用性	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	教授	丹根 一夫	4,500,000
歯周医学と不老医学の融合を目指す基盤研究	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	教授	西村 英紀	2,300,000
難治性がん性疼痛緩和のための痛みの病態生理に立脚した新たな治療法の開発	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	准教授	森田 克也	2,500,000
ヒト型肝臓動物モデルを利用した化学物質のヒトリスク評価	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	教授	太田 茂	4,100,000
蛍光性リン酸基結合タグ分子を用いたプロテインキナーゼ反応の解析法	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	教授	小池 透	2,200,000
遺伝子導入による新規肺上皮細胞モデルの作出と薬物の肺移行・肺毒性研究への応用	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	教授	高野 幹久	2,600,000
抗がん剤・耐性克服剤開発のためのタイ国産植物の調査・試料収集と薬効の科学的検証	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	教授	高野 幹久	2,900,000
アレン類のエナンチオ選択的合成法の開発とその合成反応としての展開	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	教授	武田 敬	3,200,000
がん細胞に老化を誘導し増殖・転移を抑制するマイクロRNAのメカニズムの解明	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	教授	田原 栄俊	5,300,000
有機スズによるGluR2発現減少メカニズムの解明とin vivo神経影響評価	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	准教授	古武 弥一郎	5,100,000
地域間「感染距離」に基づく学校感染症対策のためのWeb上双方向システムの開発	大学院医歯薬保健学研究院(保)	教授	梯 正之	1,300,000
随意運動に先行する脳活動の同定—セントラルコマンド発生機構の探索	大学院医歯薬保健学研究院(保)	教授	松川 寛二	3,900,000
神経機能再生におけるES細胞治療とリハビリテーションの相加効果	大学院医歯薬保健学研究院(保)	教授	弓削 類	4,400,000
ファミリーセンタードケアに基づいた新生児終末期ケアのための教育プログラムの開発	大学院医歯薬保健学研究院(保)	教授	横尾 京子	4,000,000
分泌型microRNAによる運動器疾患への治療戦略	病院(医)	准教授	安達 伸生	1,400,000
新規大腸癌転移マウスモデル実験系の構築と臓器特異的転移関連バイオマーカーの同定	病院(医)	講師	檜井 孝夫	3,500,000
日本小児肝がんスタディグループの新たな治療戦略のための分子基盤の構築	病院(医)	病院助教	上松瀬 新	1,500,000
NF-κBデコイをバイオプロセッシングした新しい核酸医薬型人工骨の創製	病院(歯)	講師	久保 隆靖	2,300,000
中心体成熟・維持メカニズムの機能不全が骨髄系腫瘍の発症・進展に果たす役割の解析	原爆放射線医学研究所	教授	稲葉 俊哉	5,000,000
低線量放射線被ばくのゲノム損傷を測る分子生物線量計の開発と発がんリスク評価	原爆放射線医学研究所	教授	神谷 研二	4,100,000
iPS細胞を用いた造血幹細胞の誘導法の開発とその分子基盤の解析	原爆放射線医学研究所	教授	瀧原 義宏	3,400,000
ゲノム修復関連高次構造体形成の分子メカニズムの解明	原爆放射線医学研究所	教授	田代 聡	4,300,000
ヒストン脱メチル化酵素Fbx10の脱制御による白血病発症機構の解析	原爆放射線医学研究所	教授	本田 浩章	5,000,000
カザフスタンのセミアラタンスク核実験場やウラン鉱山地域の被ばく線量評価と健康影響	原爆放射線医学研究所	名誉教授	星 正治	4,700,000

基盤研究(C)

研究課題名	所属	職名	研究代表者名	配分額(円) (直接経費)
高速カメラによる角膜硬性のセンシング	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	木内 良明	1,500,000
食細胞異常症のヒト化マウス作製と病態解析・治療開発への応用	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	小林 正夫	800,000
ハイレゾリューション映像伝送システム検証	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	谷川 攻一	700,000
分子生物学と医工学を用いた大動脈瘤病態への新規アプローチ	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	吉栖 正生	1,000,000
自然免疫応答からみた好酸球性副鼻腔炎の病態と一酸化窒素産生機構の解析	大学院医歯薬保健学研究院(医)	准教授	竹野 幸夫	500,000
汗アレルギーの抗原解析と簡易診断法の開発	大学院医歯薬保健学研究院(医)	准教授	三原 祥嗣	600,000
動脈硬化のDNA損傷・修復機構関連に基づく新規診断法の開発	大学院医歯薬保健学研究院(医)	講師	石田 万里	500,000
選択的除菌治療のための未分化型胃癌発症高危険群同定法の確立	大学院医歯薬保健学研究院(医)	講師	伊藤 公訓	400,000
心筋の発生分化機構	大学院医歯薬保健学研究院(医)	講師	小久保 博樹	900,000
胃癌幹細胞におけるWntシグナル機構の解明と制癌療法への応用	大学院医歯薬保健学研究院(医)	講師	田邊 和照	800,000
高ロイシン血症例における分枝鎖αケト酸脱水素酵素のチアミン反応性に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院(医)	助教	但馬 剛	400,000
グリオーマにおけるEGFR阻害剤の耐性克服	大学院医歯薬保健学研究院(医)	助教	山崎 文之	900,000
時計遺伝子DEC1およびDEC2の脂質代謝の日内リズムにおける役割の解析	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	准教授	能城 光秀	900,000

基盤研究(C)

研究課題名	所属	職名	研究代表者名	配分額(円) (直接経費)
咀嚼刺激による脳由来神経栄養因子を介した生活習慣病抑制効果に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	助教	河原 和子	700,000
間葉系幹細胞の多分化能を制御する転写因子の機能解析	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	助教	河本 健	800,000
粘液関連遺伝子制御による感染予防法の開発	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	助教	鶴田 圭伊子	1,000,000
転写因子Dec2とSoxファミリー蛋白の相互作用による軟骨分化制御機構	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	助教	藤本 勝巳	800,000
三叉神経傷害後の顎顔面領域における異所性疼痛発生メカニズムの解明	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	助教	渡邊 峰朗	1,100,000
小胞体ストレスを標的とした肥満への新規創薬ターゲットの創製	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	教授	小澤 孝一郎	900,000
銅イオン輸送タンパク質として発見したキャディによるチロシナーゼ活性化の分子機構	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	教授	杉山 政則	600,000
リン酸親和性水晶発振子マイクロバランス法を用いたリン酸化生体分子の解析	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	准教授	木下 英司	900,000
食食におけるイノシトールリン脂質の時空間的役割—RNA干渉を併用したイメージング	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	准教授	植木 薫	900,000
亜熱帯植物の含有成分の構造的多様性とその生物活性	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	名誉教授	大塚 英昭	500,000
褥瘡発症メカニズムの解明と褥瘡予防・治療法の開発	大学院医歯薬保健学研究院(保)	教授	川真田 聖一	900,000
定年退職と再雇用が労働者のメンタルヘルスに及ぼす影響に関する産業看護学的研究	大学院医歯薬保健学研究院(保)	教授	小林 敏生	1,100,000
新卒看護師の職場適応度と離職願望の関係:就職後1年間を通して	大学院医歯薬保健学研究院(保)	准教授	高瀬 美由紀	1,000,000
大腸腫瘍に対するNBI拡大所見分類の世界コンセンサス確立に関する研究	病院(医)	教授	田中 信治	500,000
糖尿病患者の血糖コントロールに影響を及ぼす精神的健康と家族機能	病院(医)	准教授	佐伯 俊成	1,000,000
肺機能的画像を用いた肺癌に対する高精度放射線治療計画法の開発	病院(医)	講師	木村 智樹	100,000
感覚細胞、神経血管系修復による加齢性内耳障害の予防、治療法開発の分子生物学的研究	病院(医)	講師	工田 昌也	1,300,000
Death receptorを標的とした胆管細胞癌・混合型肝癌の新規NK細胞療法	病院(医)	病院助教	天野 尋暢	500,000
C型慢性肝炎に対するIFN治療におけるIL28B多型とコア領域変異の影響	病院(医)	病院助教	今村 道雄	100,000
口腔習癖と精神的ストレスの関連性における生活習慣リズムの関与	病院(歯)	講師	安部倉 仁	800,000
薬物徐放制御能を有する高機能性生体材料の開発	病院(歯)	助教	二宮 嘉昭	1,000,000
変形性顎関節症に対する低出力パルス超音波刺激の有用性について	病院(歯)	病院助教	本川 雅英	700,000
リアルタイム細胞分子動態解析法による肺がんの低酸素バイオロジーの解明	原爆放射線医学研究所	准教授	宮田 義浩	1,000,000
DNA損傷修復蛋白を分子標的とした食道癌に対する新規化学放射線療法法の開発	原爆放射線医学研究所	講師	檜原 淳	1,000,000
治療関連血管腫瘍発症の予防を目指した病態および分子機序の解明	原爆放射線医学研究所	助教	原田 結花	1,100,000

研究活動スタート支援

研究課題名	所属	職名	研究代表者名	配分額(円) (直接経費)
ESCRT経路を介した蛋白分解系におけるアルツハイマー病の病変形成機序の解明	大学院医歯薬保健学研究院(医)	助教	永野 義人	1,200,000
肝癌死亡率の数理疫学的解析と将来予測	大学院医歯薬保健学研究院(医)	特任助教	秋田 智之	800,000
肝臓内NK細胞の移植際島に対する細胞傷害活性制御法の開発	大学院医歯薬保健学研究院(医)	特任助教	石山 宏平	1,200,000
新規経路を介した持続的NF- κ B活性化と炎症と発癌との関連	大学院医歯薬保健学研究院(医)	特任助教	土谷 佳弘	1,200,000
菌性感染による非アルコール性脂肪性肝炎病態増悪メカニズムの解明と歯科治療の効果	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	助教	古庄 寿子	1,200,000
ポリリン酸を用いたインプラント周囲炎治療法の確立を目指した研究	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	特任助教	原田 佳奈	1,200,000
DSB応答におけるATRの新規活性化機構及び機能の解析	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	特任助教	塩谷 文章	1,500,000
新生児疼痛管理の実践における個人的課題と組織的課題に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院(保)	講師	小澤 未緒	900,000
低分子リガンドによるTrkBトランスアクチベーションを用いた歯周組織再生療法開発	病院(歯)	病院助教	加治屋 幹人	1,200,000
ECによる心血管イベント抑制効果の詳細な分子機序の解明と生体における作用の検討	病院(歯)	歯科診療医	永安 慎太郎	1,200,000
顎整形力を用いた下顎骨の再生と成長発育治療の探索	病院(歯)	歯科診療医	林 英貴	1,100,000
潤滑機能蛋白SZPの発現調節機構の解明と顎関節症に対する新規治療薬の開発	病院(歯)	歯科診療医	光吉 智美	1,200,000
遺伝性顎口腔疾患特異的ヒトiPS細胞の無血清・無フィーダーでの樹立と発症機序研究	病院(歯)	歯科診療医	山崎 佐知子	1,200,000
顎骨骨髓に由来する未分化間葉系幹細胞の骨誘導能の解析と顎裂閉鎖治療への応用	病院(歯)	歯科診療医	吉岡 基子	1,000,000
新技術レーザープロテオミクスにより同定された乳癌浸潤突起特異的分子の解析	原爆放射線医学研究所	助教	見前 隆洋	1,200,000

若手研究(A)

研究課題名	所属	職名	研究代表者名	配分額(円) (直接経費)
外来化学療法を受けるがん患者と家族のQOL向上を目指す外来治療支援モデルの構築	大学院医歯薬保健学研究院(保)	講師	二井谷 真由美	1,200,000

若手研究(B)

研究課題名	所属	職名	研究代表者名	配分額(円) (直接経費)
上皮細胞が産生するIgG能動輸送タンパク質FcRnの機能解析と歯周炎治療への応用	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	助教	應原 一久	800,000
抗結核薬合成遺伝子の発見—抗結核薬の大量生産系の確立と抗癌剤生産への応用—	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	准教授	熊谷 孝則	700,000
多官能性求核的カルベンの創生と不斉反応への展開	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	准教授	佐々木 道子	900,000
植物乳酸菌174A株が産生する新奇バクテリオシンの作用機序と自己耐性機構の解明	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	特任講師	野田 正文	800,000
抗悪性腫瘍薬点滴静脈内注射中患者の核心温度の変動と湯たんぼ療法の適用	大学院医歯薬保健学研究院(保)	講師	藤井 宝恵	500,000
脳卒中後筋受容器反射の変化及び運動トレーニングによる効果	大学院医歯薬保健学研究院(保)	助教	梁 楠	600,000
気管支喘息・間質性肺炎モデルマウスにおける亜鉛キレート剤の効果の検討	病院(医)	病院助教	岩本 博志	600,000
多孔質セラミックスにおける骨芽細胞の骨形成分子メカニズムの解析	病院(歯)	歯科診療医	多田 美里	1,100,000
損傷乗り越えDNA合成の制御異常と放射線発がん、化学発がんの寄与	原爆放射線医学研究所	助教	笹谷 めぐみ	900,000



新学術領域研究

研究課題名	所属	職名	研究代表者名	配分額(円) (直接経費)
プロリン異性化酵素Pin1、PAR14標的蛋白の網羅的同定と病態への関与	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	浅野 知一郎	4,500,000
神経細胞におけるRNA障害と脳内環境の関連研究	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	内匠 透	16,400,000
活性酸素応答ホスファターゼに関連した細胞シグナル制御機構	大学院医歯薬保健学研究院(医)	准教授	鎌田 英明	10,400,000
固液界面におけるタンパク質間相互作用に及ぼす分子クラウディングの影響	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	教授	加藤 功一	3,000,000
蛋白質リン酸化修飾イメージングの超高感度化とオミクス技術への展開	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	准教授	木下 英司	2,900,000
MDS原因遺伝子の同定と解析を通じた細胞分化制御システムの解明	原爆放射線医学研究所	教授	稲葉 俊哉	23,000,000
オブチニューリン遺伝子異常による脳内環境の変化と神経変性の関わり解明	原爆放射線医学研究所	教授	川上 秀史	16,400,000
造血幹細胞の自己複製と分化の誘導を掛け分ける分子基盤	原爆放射線医学研究所	教授	瀧原 義宏	5,000,000
スモ修飾システムとクロマチン再構成による修復場形成制御機構の解明	原爆放射線医学研究所	教授	田代 聡	3,900,000
Geminin発現制御による白血病幹細胞の活性制御機構の解析	原爆放射線医学研究所	准教授	安永 晋一郎	3,300,000
RUNXファミリーの異常による細胞分化制御破綻と新たなMDS発症機構の解明	原爆放射線医学研究所	講師	原田 浩徳	1,700,000

挑戦的萌芽研究

研究課題名	所属	職名	研究代表者名	配分額(円) (直接経費)
血管閉塞による新しい抗腫瘍療法の開発	大学院医歯薬保健学研究院(保)	教授	出家 正隆	900,000

基盤研究(C)

研究課題名	所 属	職名	研究代表者名	配分額(円) (直接経費)
体節に由来する軸骨格の部位特異的形態と四肢形成の関連:その個体発生と系統発生	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	教授	青山 裕彦	1,300,000
1次リンパ組織の微小環境特異的エピジェネティック制御の解明	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	教授	菅野 雅元	1,600,000
メタボリック症候群を基盤とする非虚血性慢性心不全の病態解明と疾患概念の確立	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	教授	木原 康樹	1,300,000
悪性高熱症の発症予防に関する実験的研究	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	教授	河本 昌志	1,900,000
自然免疫を抑制するウイルス蛋白質の構造と作用機構の解析	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	教授	坂口 剛正	1,300,000
地域と出生年を考慮した肝がん死亡の経年推移と将来予測に関する国際数理疫学研究	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	教授	田中 純子	2,500,000
前立腺癌の神経内分泌分化に関わる新規バイオマーカーの同定と診断・治療への応用	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	教授	松原 昭郎	2,100,000
癌・間質相互作用を標的とした胃癌転移に対する新しい治療法の開発	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	准教授	北台 靖彦	1,900,000
miRNAを含むエクソソームを用いた骨腫瘍治療への応用	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	准教授	下瀬 省二	1,500,000
3次元ゲル培養法を応用した角膜神経誘導法の開発	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	准教授	近間 泰一郎	1,300,000
胆管癌の抗癌剤代謝関連酵素発現と感受性解析による個別化治療の確立	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	准教授	村上 義昭	2,300,000
遠隔脳卒中診断システムの基盤構築のための検討	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	准教授	山脇 健盛	1,200,000
間質性肺炎の新たな血清マーカーの開発と治療戦略の確立	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	講師	石川 暢久	1,100,000
酸化ストレス応答のマスター転写因子Bach1を標的とした心血管疾患治療の開発	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	講師	石田 隆史	1,400,000
オープン型ステントグラフト内挿術における脊髄虚血の成因と予防に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	講師	内田 直里	1,600,000
血液透析患者における肝炎ウイルス感染と生命予後に関する疫学研究	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	講師	片山 恵子	800,000
小胞体シグナリングの破綻による脳障害の解明	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	講師	近藤 慎一	1,600,000
メタボリック症候群と前立腺癌に関与するFGFの分子機構解明と新たな治療戦略確立	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	講師	亭島 淳	1,500,000
GPR3の神経分化メカニズム解析と脳虚血に対する新規神経前駆細胞移植療法への応用	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	助教	田中 茂	1,500,000
造血幹細胞・iPS細胞由来TRAIL陽性NK細胞による肝癌免疫細胞療法法の基礎研究	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	助教	田中 友加	1,400,000
細胞保護的ミクログリアの選別・機能解析と神経疾患治療への発展	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	助教	秀 和泉	1,700,000
リアノジン受容体が関与する先天性筋疾患が悪性高熱症を発症する可能性	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	助教	安田 季道	900,000
確率共鳴理論から開発した触覚が向上する内視鏡外科デバイスの臨床応用	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	特任講師	惠木 浩之	1,700,000
神経一層上皮細胞の共培養システムによる神経麻痺性角膜の病態解明	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	特任講師	高 知愛	1,700,000
ホウ素結合標的アデノウイルスベクターを用いた中性子捕捉療法の開発	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	研究員	濱 聖司	600,000
嚥下時の口腔内圧変化による臨床的嚥下能力診断システムの確立	大学院医歯薬保健学研究院 (歯)	教授	天野 秀昭	2,300,000
全身麻酔要素である鎮痛・筋弛緩・不動化における脊髄痛覚・運動ニューロンの役割解明	大学院医歯薬保健学研究院 (歯)	教授	入船 正浩	800,000
歯科衛生士の離職をもたらす因子の解析と、離職防止の方略の策定	大学院医歯薬保健学研究院 (歯)	教授	竹本 俊伸	1,000,000
骨・歯科疾患における多臓器連関「FGF23-可溶性型Klothoシステム」の研究	大学院医歯薬保健学研究院 (歯)	教授	吉子 裕二	1,300,000
呼吸と睡眠時義歯装着/非装着との関連	大学院医歯薬保健学研究院 (歯)	准教授	貞森 紳丞	700,000
形態付与可能な再生3要素複合体ビーズの重度破壊歯周組織再生における有用性	大学院医歯薬保健学研究院 (歯)	准教授	柴 秀樹	1,200,000
骨伝導性と破骨細胞吸収性を併せ持つ高機能型GBR複合膜の開発	大学院医歯薬保健学研究院 (歯)	准教授	武知 正晃	1,000,000
認知症高齢者の簡易口腔機能定量検査の開発	大学院医歯薬保健学研究院 (歯)	准教授	津賀 一弘	900,000
疾患責任遺伝子産物TMEM16Eタンパクの安定化による疾患オンセット機構の解明	大学院医歯薬保健学研究院 (歯)	准教授	飛梅 圭	900,000
最適とろみ濃度決定のための口腔・咽頭機能アセスメント	大学院医歯薬保健学研究院 (歯)	准教授	吉川 峰加	1,000,000
生体にやさしい菌冠用コンポジットレジン複合型ジルコニアクラウンの臨床応用に向けて	大学院医歯薬保健学研究院 (歯)	講師	下江 幸司	1,600,000
革新的モーショントラッキング解析に基づいた新しいエビテラーゼ製法法の開発	大学院医歯薬保健学研究院 (歯)	講師	田地 豪	800,000
ドパミン受容体サブタイプの選択的リガンドを応用した新しい全身麻酔法の開発	大学院医歯薬保健学研究院 (歯)	助教	清水 慶隆	2,500,000
唾液腺の管腔構造形成・維持におけるHippoシグナル伝達経路の機能解析	大学院医歯薬保健学研究院 (歯)	助教	北川 道憲	1,700,000
新規細胞内輸送調節分子を介した疼痛制御機構の解明	大学院医歯薬保健学研究院 (歯)	助教	北山 友也	1,600,000
バイオ再生歯実現への優れたエナメル質形成幹細胞を獲得する	大学院医歯薬保健学研究院 (歯)	助教	呉本 晃一	1,100,000
口腔癌細胞自身が発現するVEGF受容体シグナルを標的とした新しい治療法の開発研究	大学院医歯薬保健学研究院 (歯)	助教	小泉 浩一	2,000,000
放射線照射メカニズムによる骨代謝障害予防法の開発	大学院医歯薬保健学研究院 (歯)	助教	澤尻 昌彦	1,100,000
ヒト唾液腺腫瘍におけるRHAMM遺伝子の発現及び機能解析	大学院医歯薬保健学研究院 (歯)	助教	重石 英生	900,000
高付加型ポリリン酸を用いたインプラント周囲炎骨欠損に対する再生療法	大学院医歯薬保健学研究院 (歯)	助教	土井 一矢	900,000
機能的抗菌作用を有する歯科材料の研究・開発	大学院医歯薬保健学研究院 (歯)	助教	野村 雄二	1,900,000
う蝕原因菌を特異的に溶解する新規溶菌酵素Amlの作用メカニズムの解明	大学院医歯薬保健学研究院 (歯)	助教	林 幾江	1,100,000
顎整形力を用いた下顎頭再生機構の解明	大学院医歯薬保健学研究院 (歯)	助教	藤田 正	1,300,000
ホモ接合プロタイプ法による侵襲性歯周炎の疾患関連遺伝子同定	大学院医歯薬保健学研究院 (歯)	助教	水野 智仁	1,100,000
幼少期ストレスが発達期脳神経細胞の転写・翻訳制御に及ぼす影響・自閉症との関連	大学院医歯薬保健学研究院 (歯)	助教	光畑 智恵子	1,200,000
海洋生物由来生理活性物質の探索と口腔癌幹細胞をターゲットとした分子標的薬への応用	大学院医歯薬保健学研究院 (歯)	助教	吉岡 幸男	1,200,000
イノシトールリン脂質脱リン酸化酵素欠損細胞を用いた小胞輸送系の解析	大学院医歯薬保健学研究院 (薬)	教授	樋木 修	900,000
血中小麦アレルゲン定量法の開発とその臨床応用	大学院医歯薬保健学研究院 (薬)	教授	松尾 裕彰	1,000,000
沖縄亜熱帯植物由来の新規抗ウイルス活性化化合物の探索研究	大学院医歯薬保健学研究院 (薬)	教授	松浪 勝義	800,000
PK/PD理論と標的臓器の治療目標達成確率を指標とした抗菌剤の最適投与法の確立	大学院医歯薬保健学研究院 (薬)	教授	森川 則文	800,000
抗菌薬併用時の標的臓器PKモデル解析と微生物学的PD評価に基づく感染治療の最適化	大学院医歯薬保健学研究院 (薬)	准教授	猪川 和朗	2,100,000
アミノグリコシド腎毒性を導く初発分子の同定とそれを標的とした腎毒性防御法の最適化	大学院医歯薬保健学研究院 (薬)	准教授	永井 純也	1,200,000
ビエゾ振動ナノCIによる低極性分子標的LiveSingle-cellMS法の開発	大学院医歯薬保健学研究院 (薬)	講師	津山 尚宏	1,700,000
薬物治療最適化に向けたセルフマイクロモニタリング系の開発と在宅・薬局での実践	大学院医歯薬保健学研究院 (薬)	助教	池田 佳代	800,000

研究課題名	所属	職名	研究代表者名	配分額(円) (直接経費)
広域分子量タンパク質群のリン酸化動態を追跡できるリン酸基親和性電気泳動ゲルの開発	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	助教	木下 恵美子	1,200,000
薬物による肺胞上皮細胞障害とII型-I型分化転換および上皮間葉転移との関連解析	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	助教	湯元 良子	1,500,000
植物乳酸菌LP28による体内脂肪蓄積抑制の分子機構解明とヒト臨床試験による検証	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	特任准教授	東川 史子	1,700,000
膝前十字靭帯損傷のハイリスク選手に対する90度側方カッピング動作の分析	大学院医歯薬保健学研究院(保)	教授	浦邊 幸夫	2,600,000
脳科学的根拠のある利き手・非利き手別リハビリテーションプログラムの開発	大学院医歯薬保健学研究院(保)	教授	砂川 融	2,000,000
新たな呼吸リハビリテーションを展開するために必要な唾液中酸化ストレス指標の確立	大学院医歯薬保健学研究院(保)	准教授	関川 清一	2,400,000
高齢介護者の心理・社会的孤立予防のためのアセスメント方法と支援モデルの開発	大学院医歯薬保健学研究院(保)	准教授	永井 眞由美	1,100,000
母親退院から産後6か月間における母乳育児継続要因-母親の視点からみた検討-	大学院医歯薬保健学研究院(保)	講師	藤本 紗央里	2,400,000
膝関節回旋角度計の開発-膝前十字靭帯損傷による回旋不安定性の精密計測-	病院(医)	教授	木村 浩彰	3,600,000
滑膜線維芽細胞の脂肪分化誘導における上皮間葉移行分子機序の解明	病院(医)	教授	杉山 英二	1,400,000
治療効果予測システムの開発	病院(医)	教授	杉山 一彦	900,000
劣化脂質による胆道がん発症機構とその制御に関する検討	病院(医)	教授	田妻 進	1,500,000
ヒト脂肪組織由来幹細胞を用いた新たな骨格筋再生療法の開発	病院(医)	教授	横田 和典	1,100,000
発作時脳磁図データの周波数解析-非侵襲的臨床検査法としての確立-	病院(医)	講師	飯田 幸治	700,000
術中判断を可能にする心房細動外科治療時の電気生理診断法の確立と低侵襲術式の開発	病院(医)	講師	今井 克彦	2,700,000
異時相画像データおよび非剛体変形統合法を用いた低線量冠動脈CTの開発	病院(医)	講師	立神 史稔	1,400,000
脳血管性うつ病の神経回路網の異常と抑うつ気分、アパシーとの関連	病院(医)	講師	山下 英尚	1,100,000
インスリン抵抗性は冠動脈疾患と弁膜病変合併の促進因子である	病院(医)	講師	山本 秀也	500,000
胃癌の術前転移予測と分子病理マーカーによる新たな内視鏡的根治判定基準の開発	病院(医)	病院助教	岡 志郎	1,000,000
64列検出器CTを用いた海綿骨骨梁構造解析による骨粗鬆症性脊椎骨折のリスク評価	病院(医)	病院助教	高須 深雪	600,000
耐糖能異常および脂質代謝異常と死因-とくに悪性新生物死の関連の疫学研究	病院(医)	病院助教	中西 修平	1,500,000
微小重力環境で培養したヒト頭蓋骨由来MSCの神経分化能と機能評価	病院(医)	病院助教	山口 智	600,000
Th17細胞の分化に関わるmicroRNAを標的とした関節炎の治療戦略	病院(医)	助教	鈴木 修身	500,000
磁気ターゲティングを利用した脊椎再建材料による脊椎再生	病院(医)	助教	田中 信弘	1,000,000
大腸癌肝転移に対する新規分子標的治療法の開発	病院(医)	病院助教	小林 剛	1,300,000
分泌型マイクロRNAによる血管新生を基軸とした運動器損傷の新たな治療戦略	病院(医)	病院助教	中佐 智幸	1,800,000
脳磁図を用いた運動・感覚障害の客観的評価法の開発	病院(医)	病院助教	中西 一義	2,300,000
SAGE法による新たな消化器癌幹細胞特異的遺伝子の同定とその機能解析	病院(医)	病院助教	浜井 洋一	1,500,000
miRNAによる関節リウマチ滑膜細胞機能リプログラミングの誘導	病院(医)	病院助教	山崎 聡士	1,500,000
消化管内視鏡画像解析による客観的指標の構築と診断支援システムへの応用	病院(医)	病院助教	吉田 成人	2,000,000
紫外線によるアパタイトの高機能ナノバイオ界面制御法の開発	病院(歯)	講師	阿部 泰彦	1,700,000
睡眠時無呼吸症候群における新しい口腔内装置の包括的臨床展開	病院(歯)	講師	上田 宏	1,500,000
間葉系幹細胞移植による骨再生技術の最適化と顎裂閉鎖治療への応用	病院(歯)	講師	谷本 幸太郎	1,700,000
Wntシグナルを標的とした生体由来成分を用いた直接覆髄材の開発	病院(歯)	講師	藤井 理史	1,800,000
イルソグラジンマレイン酸による肉肉上皮細胞機能の分子制御メカニズムの解明	病院(歯)	講師	藤田 剛	1,200,000
多毛症を合併した先天性歯肉増殖症の病態解析	病院(歯)	助教	荒川 真	600,000
神経ペプチドの新規機能の解明と炎症性口腔粘膜疾患への治療応用	病院(歯)	助教	太田 耕司	1,200,000
口腔癌の浸潤における細胞間相互作用の解明	病院(歯)	助教	島末 洋	1,600,000
歯科初診医療面接の会話分析に関する基礎学的研究	病院(歯)	助教	田中 良治	1,100,000
NK細胞活性化受容体リガンドをターゲットとした口腔癌に対する個別化治療の開発	病院(歯)	助教	谷 亮治	2,100,000
骨強度を指標とするインプラント即時荷重診断システムの新開発	病院(歯)	助教	日浅 恭	1,000,000
ヒト骨髄由来間葉系幹細胞を用いた安全・安心な細胞治療を行うための基盤整備研究	病院(歯)	病院助教	岡本 康正	1,000,000
臨床データ・プロセッシングに基づいた残存歯咬合支持能力の簡易診断システムの開発	病院(歯)	歯科診療医	水町 亘	1,000,000
ヨード状態を軸とした新生児期化学物質暴露による甲状腺ホルモン系かく乱の定量解析	原爆放射線医学研究所	准教授	藤本 成明	1,000,000
DNA脱メチル化剤による翻訳効率向上が造血細胞の分化を促進するメカニズムの解明	原爆放射線医学研究所	准教授	松井 啓隆	1,600,000
Gemininタンパク質制御を介した造血幹細胞の活性制御機構の解析	原爆放射線医学研究所	准教授	安永 晋一郎	1,200,000
染色体転座形成におけるDNA組換え修復関連タンパク質の関与	原爆放射線医学研究所	講師	孫 継英	1,200,000
家族性MDS由来iPS細胞を用いたRUNX1変異によるMDSの分子発症機序の解明	原爆放射線医学研究所	講師	原田 浩徳	1,400,000
癌の治療標的としてのMnk-eIF4E経路に関する研究	原爆放射線医学研究所	助教	上田 健	1,200,000
口腔がん細胞のDNA損傷応答におけるHIF-DEC経路の意義	原爆放射線医学研究所	助教	谷本 圭司	1,400,000
心血管疾患におけるROCK活性の役割:トランスレーショナル研究	原爆放射線医学研究所	助教	野間 玄督	1,300,000
ALSにおけるOptineurinの神経細胞毒性に関する分子メカニズムの解明	原爆放射線医学研究所	助教	森野 豊之	1,000,000

若手研究(B)

研究課題名	所属	職名	研究代表者名	配分額(円) (直接経費)
ウイルスマトリクス蛋白質によるダイナミックな細胞骨格系の制御とその意義	大学院医歯薬保健学研究院(医)	准教授	入江 崇	1,600,000
胃癌における癌幹細胞の非対称性分裂時に生じる胃型・腸型形質発現の変化	大学院医歯薬保健学研究院(医)	准教授	大上 直秀	1,400,000
広島県における医師の地理的偏在の分析と効果的な医師供給に関する総合的研究	大学院医歯薬保健学研究院(医)	常勤講師	松本 正俊	1,600,000
ヒト肝細胞キメラマウスと次世代シーケンサーを用いた肝炎ウイルスゲノムの解析	大学院医歯薬保健学研究院(医)	助教	阿部 弘美	1,800,000
日本の地形を考慮した大気汚染曝露の時空間モデル構築と死亡への影響評価	大学院医歯薬保健学研究院(医)	助教	鹿嶋 小緒里	900,000
新規活性評価法を用いたシャペロン介在性オートファジーの神経変性疾患への関与解明	大学院医歯薬保健学研究院(医)	助教	関 貴弘	1,600,000

研究課題名	所属	職名	研究代表者名	配分額(円) (直接経費)
消化管転移の網羅的トランスクリプトーム解析と転移における癌幹細胞の意義	大学院医歯薬保健学研究院(医)	助教	仙谷 和弘	1,600,000
プロリン異性化酵素Pin1によるエネルギー代謝調節機構の解明	大学院医歯薬保健学研究院(医)	助教	中津 祐介	1,500,000
インスリン受容体基質のモノユビキチン化を介したインスリン活性調節機構の解明	大学院医歯薬保健学研究院(医)	助教	福岡 俊明	1,600,000
病院経営における意志決定システムの検討-EBM(根拠に基づく経営)の実践へ-	大学院医歯薬保健学研究院(医)	助教	村上 玄樹	900,000
霊長類の胸郭・前肢帯の骨格形態と立体配置:ヒト上科の運動適応の解明	大学院医歯薬保健学研究院(医)	特任助教	加賀谷 美幸	2,500,000
In vivoパッチクランプ法による発達期シナプス刈り込みに関わる活動実態の解明	大学院医歯薬保健学研究院(医)	特任助教	河村 吉信	1,500,000
分泌型microRNAを介した胃癌間質相互作用と上皮間葉転換(EMT)	大学院医歯薬保健学研究院(医)	特任助教	坂本 直也	1,600,000
自閉症モデルマウスを用いた自己認識機構の基盤的研究	大学院医歯薬保健学研究院(医)	特任助教	玉田 紘太	1,500,000
肺動脈性肺高血圧症早期診断マーカーの同定	大学院医歯薬保健学研究院(医)	特任助教	土肥 由裕	1,000,000
次世代シーケンサーを用いたHCVに対する3者併用療法中の耐性株の動態の解析	大学院医歯薬保健学研究院(医)	特任助教	Hayes C. Nelson	1,800,000
染色体工学を用いた精神疾患モデルマウスの統合的解析	大学院医歯薬保健学研究院(医)	特任助教	野村 淳	1,600,000
口腔癌における癌幹細胞と腫瘍間質内間葉系幹細胞の細胞間ネットワークの機能解析	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	助教	石田 康隆	1,400,000
Valsartanが代謝性内毒素誘導性インスリン抵抗性を改善する分子機構の解明	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	助教	岩下 未咲	1,800,000
顎顔面骨格の成長発育に性ホルモンと成長因子が及ぼす影響	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	助教	大谷 淳二	1,600,000
変形性顎関節症におけるHIF-1とBMP-2の役割	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	助教	白倉 麻耶	1,400,000
成体由来細胞を用いたエナメル芽細胞樹立と歯胚再生法の確立	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	助教	鈴木 茂樹	600,000
変形性顎関節症におけるCOX-2誘導性軟骨破壊機構の解明と消炎鎮痛薬治療の確立	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	助教	丹根 由紀	1,100,000
小児抗がん治療による口腔合併症の新しい評価基準と歯科支援プログラムの開発	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	助教	坪井 文	1,100,000
舌癌を画像診断する-脳機能画像を用いて	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	助教	土井 充	600,000
E-カドヘリンプロセ分子のNakedDNAを用いた口腔癌遺伝子治療法の開発研究	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	助教	浜名 智昭	2,000,000
bFGF・poly(P)・IP-CHA複合体を用いた新しい骨増生材料の創製	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	助教	林 和彦	1,400,000
骨代謝改善を担う破骨細胞の機能制御に関与するエストロゲンとその標的因子の解明	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	助教	樋山 伸二	1,800,000
無血清培地において自己組織化単分子膜が間葉系幹細胞の増殖・分化に及ぼす影響	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	助教	平田 伊佐雄	1,400,000
卵母細胞処理口腔扁平上皮癌細胞のエピジェネティックなプログラミングの検討	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	助教	福井 康人	1,700,000
顎骨骨幹形成症の原因遺伝子TMEM16Eの遺伝子改変マウスを用いた機能解析	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	助教	水田 邦子	1,700,000
硬組織におけるPTHの新規作用に着目したミネラル代謝異常に関する基礎的研究	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	助教	南崎 朋子	1,600,000
miRNAを標的とした歯周炎誘導性インスリン抵抗性の制御を目指す基礎研究	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	助教	山下 明子	2,200,000
局所リン酸化調節に基づく歯の形成機構の解明-エピゲノム解析からのアプローチ-	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	助教	吉岡 広陽	1,600,000
LDL受容体ファミリーを介したF-spondinの硬組織破壊調節機構の解明	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	特任助教	岡 広子	1,000,000
低酸素環境における腫瘍血管内皮細胞の異常性獲得機構に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	特任助教	北山 和子	900,000
小胞体ストレスを標的とした生活習慣病の新たな治療戦略	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	講師	細井 徹	900,000
慢性疼痛の治療標的としての脊髄アストロサイト-gap junctionの機能解析	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	講師	森岡 徳光	1,500,000
肝細胞3次元培養を用いた医薬品の代謝的活性化による毒性予測評価	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	助教	佐能 正剛	1,200,000
抗うつ薬の新規標的分子としての線維芽細胞増殖因子(FGF)受容体の機能解析	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	助教	久岡 一恵	1,600,000
NSAIDsの服用による食物アレルギーの吸収増加機構の解明	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	助教	横大路 智治	2,200,000
終末期がん患者の「家族への負担感」の概念化と尺度開発	大学院医歯薬保健学研究院(保)	講師	大塚 美樹	900,000
ヒトの運動時の心拍数調節機構の再検証-心電図P-P間隔変動周波数解析を用いて-	大学院医歯薬保健学研究院(保)	講師	高橋 真	900,000
知覚-運動ループの不一致が痛覚および変化検出機構に及ぼす影響	大学院医歯薬保健学研究院(保)	助教	大鶴 直史	1,800,000
新任保健師の職業アイデンティティ確立に向けたeラーニング教育システムの開発	大学院医歯薬保健学研究院(保)	助教	金藤 亜希子	900,000
褥瘡発生の主要因となる物質の同定と物理療法による発生・重症化予防	大学院医歯薬保健学研究院(保)	助教	黒瀬 智之	1,500,000
移植コーディネーターの質向上を目指す養成教育・継続教育プログラムの開発	大学院医歯薬保健学研究院(保)	助教	新宮 美穂	1,100,000
特別養護老人ホームにおける終末期ケアの質向上のための教育プログラムの開発	大学院医歯薬保健学研究院(保)	助教	那須 佳津美	1,100,000
CD47-SIRP α シグナル誘導による抗NeuGc抗体性異種障ラ氏島拒絶の克服	病院(医)	病院助教	井手 健太郎	1,400,000
exosomeは髄液のバイオマーカーになりうるか	病院(医)	病院助教	上野 弘貴	500,000
ヒト幹細胞の新生児医療応用への基礎研究	病院(医)	病院助教	大野 令央義	2,000,000
肝移植後アシトレスによる肝由来免疫寛容性の破綻機構の解明と拒絶制御への応用	病院(医)	病院助教	尾上 隆司	1,400,000
脊髄損傷に対する神経・血管特異的マイクロRNAを用いた新たな治療アプローチの開発	病院(医)	病院助教	亀井 直輔	1,400,000
角膜感染症に対する光線力学的療法	病院(医)	病院助教	佐々木 崇暁	1,500,000
チミジル酸合成酵素抑制を標的としたHER2陽性乳癌薬物療法の開発	病院(医)	病院助教	重松 英朗	1,600,000
うつ病における思考速度低下の脳磁図による検討	病院(医)	病院助教	志々田 一宏	900,000
腹腔鏡手術下非接触イメージャを用いた腫瘍局在のより正確な診断法の確立と臨床応用	病院(医)	病院助教	鈴木 崇久	1,300,000
ヒト腺癌に対する抗痛剤感受性制御腫瘍溶解性組換えワクシニアウイルスの開発	病院(医)	病院助教	橋本 泰司	1,200,000
有限要素法モデルによる前胸部ケロイドの生体力学解析	病院(医)	病院助教	宮本 純平	1,300,000
Wntシグナルとテロメラーゼからみた小児肝腫瘍の分子標的的探索	病院(医)	医科診療医	上田 祐華	1,900,000
ガドキシト酸ナトリウム造影MRIにおける抗痛剤の腫瘍描出能への検討	病院(医)	医科診療医	中村 優子	2,800,000
低線量多時相Dual Energy CTによる尿路系腫瘍検出能の改善	病院(医)	医科診療医	本田 有紀子	2,300,000
慢性尋麻疹の病態における組織因子の発現機構の解析	病院(医)	医科診療医	森桶 聡	1,500,000
グリオーマ細胞におけるPEA15の機能解析	病院(医)	医科診療医	渡邊 陽祐	1,800,000
機能的MRIを用いた膝前十字靭帯損傷患者の大脳固有感覚ネットワーク再構築の研究	病院(医)	理学療法士	平田 和彦	1,300,000
歯周組織の炎症と再生における低酸素環境が遺伝子転写活性へ及ぼす影響	病院(歯)	助教	岩田 倫幸	1,600,000
ビスフォスフォネート関連顎骨壊死に関与する分子の網羅的探索	病院(歯)	助教	中川 貴之	1,300,000

研究課題名	所属	職名	研究代表者名	配分額(円) (直接経費)
Toll-like receptorを介した難治性口腔粘膜疾患発症機構の解明	病院(歯)	助教	西 裕美	900,000
尿素を用いた光感受性試薬の開発-エルビウムヤグレーザー併用による歯周治療の確立	病院(歯)	助教	峯岡 茜	1,100,000
長鎖型ポリリン酸吸着アパタイト人工骨の骨再生能	病院(歯)	助教	森田 晃司	1,700,000
脳由来神経栄養因子による歯周組織再生における歯肉上皮侵入阻害メカニズムの解明	病院(歯)	病院助教	松田 真司	1,600,000
磁気分離自己高骨分化細胞含有人工骨の創製	病院(歯)	歯科診療医	鎌田 浩一	1,200,000
根尖病巣内のサイトカインプロファイル分析	病院(歯)	歯科診療医	北本 泰子	1,100,000
エナメル蛋白による歯の移動時の歯周組織誘導能の探索と臨床応用	病院(歯)	歯科診療医	國松 亮	1,500,000
在宅歯科診療に適した自浄作用を有する高耐久性ティッシュコンディショナーの開発	病院(歯)	歯科診療医	柄 博紀	2,100,000
アメロプラスチンによる歯根象牙質の形成促進機構の解明と歯根吸収治療への応用	病院(歯)	歯科診療医	廣瀬 尚人	1,500,000
口腔癌由来CD133陽性細胞群の機能解析と癌幹細胞を標的とした新規治療法の開発	病院(歯)	歯科診療医	藤井 良典	1,400,000
線形な変化係数の信頼区間の精密化と共分散構造分析への応用に関する研究	原爆放射線医学研究所	准教授	佐藤 健一	700,000
放射線誘発がんにおけるマイクロRNAの包括的理解	原爆放射線医学研究所	助教	飯塚 大輔	1,000,000
Bcl-2関連タンパクを標的とした食道癌に対する新規分子標的治療の開発	原爆放射線医学研究所	助教	恵美 学	1,900,000
白血病の病態制御におけるGemininの分子機能の解析	原爆放射線医学研究所	助教	大野 芳典	1,700,000
放射線照射条件と細胞に依存した細胞応答とゆらぎ機構によるP53機能の解析	原爆放射線医学研究所	助教	河合 秀彦	1,300,000
リアルタイム分子動態解析システムを用いた抗癌剤感受性因子の特定とその臨床応用	原爆放射線医学研究所	助教	津谷 康大	1,600,000
DNA損傷修復異常による遺伝性小頭症発症の分子機構	原爆放射線医学研究所	助教	宮本 達雄	1,100,000

挑戦的萌芽研究

研究課題名	所属	職名	研究代表者名	配分額(円) (直接経費)
INTS6による新規脂肪分化調節機構の解明と肥満治療への展開	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	浅野 知一郎	1,700,000
B細胞の分化・増殖機構に即した抗体関連拒絶反応制御法の開発	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	大段 秀樹	1,200,000
脱細胞化組織と末梢血単核球およびマイクロRNAを用いた関節軟骨再生	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	越智 光夫	900,000
抗KL-6抗体は分子標的薬の作用を増強しうるか	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	河野 修興	800,000
ハイコンテント顕微鏡イメージングを用いた新規神経変性疾患治療薬の自動検出法の開発	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	酒井 規雄	1,800,000
リズム中枢特異的発現系の構築	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	内匠 透	1,400,000
ヒト肝細胞キメラマウスと次世代シーケンサーによる肝障害誘起性新規病原体の探索	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	茶山 一彰	2,900,000
ヒ素化合物の形態別抽出による新規系統的GC/MS分析法の確立	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	長尾 正崇	1,000,000
表面プラズモン共鳴による血管肉腫細胞の機能的診断法の開発	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	秀 道広	1,600,000
ncRNAをコードする超保存領域T-UCRを標的とする消化管癌の診断・治療展開	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	安井 弥	1,600,000
クエン酸回路と遺伝子発現系のクロストークによる炎症と発癌の制御機構	大学院医歯薬保健学研究院(医)	准教授	鎌田 英明	1,900,000
吸収性胆管ステントによる胆管狭窄予防	大学院医歯薬保健学研究院(医)	准教授	田代 裕尊	900,000
小胞体ストレスセンサータンパク質による骨格系細胞分化制御機構の解明	大学院医歯薬保健学研究院(医)	助教	齋藤 敦	1,100,000
遺伝子プロモーターのメチル化を用いた自殺予測のためのバイオマーカーの開発	大学院医歯薬保健学研究院(医)	特任教授	森信 繁	1,100,000
アルツハイマー病と歯の喪失・咬合の関連メカニズムの分子基盤	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	教授	赤川 安正	1,000,000
無血清エンブリオイドポディ培養法によるマウス・ヒトiPS細胞からの顎骨・歯胚誘導	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	教授	岡本 哲治	1,700,000
無血清培地での間葉系幹細胞の分離、増殖、分化を促進する官能基配合培養皿	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	教授	加藤 幸夫	1,400,000
歯周組織再生のためのタンパク質性足場材料の設計	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	教授	加藤 功一	1,800,000
顎骨骨幹形成症モデルマウスの構築	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	教授	鎌田 伸之	1,700,000
劣性遺伝解析による侵襲性歯周炎関連遺伝子の同定	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	教授	栗原 英見	1,100,000
齶蝕原因菌が生成する新規タンパク複合体デグラドソームの環境適応に果たす役割	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	教授	香西 克之	1,400,000
味覚誘発情動の神経回路基盤の解明と心の科学への展開	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	教授	杉田 誠	1,200,000
リソソーム化ラクトフェリンを用いた新規慢性関節リウマチ予防法の開発	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	教授	高田 隆	1,700,000
マクロファージと共存する歯髓細胞で発現変動する分子群の網羅的解析	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	教授	西村 英紀	1,000,000
有床義歯のウェアラブルセンサー化による健康管理システム	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	教授	村山 長	600,000
創薬におけるヒト肝臓動物モデルを利用した体内動態の個体間変動予測法	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	教授	太田 茂	1,400,000
トランスポーターの低温忍容性解析と汎トランスポーター阻害剤の探索開発	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	教授	高野 幹久	900,000
共役性電子求引基の隣接位におけるキラルカルバニオンの発生と捕捉	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	教授	武田 敬	1,400,000
体液循環miRNA輸送機構を用いたがん特異的新規DDSの開発	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	教授	田原 栄俊	1,500,000
チューブリンは環境化学物質の新規毒性標的となりうるか?	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	准教授	古武 弥一郎	1,500,000
がん検診の有効性をめぐる混乱に終止符を打つ数理モデルで受診率向上を目指す研究	大学院医歯薬保健学研究院(保)	教授	梯 正之	700,000
睡眠・覚醒リズムと身体機能・能力の関係を解明し高齢者を健康的な日常活動へと導く研究	大学院医歯薬保健学研究院(保)	教授	新小田 幸一	1,600,000
運動イメージによる運動機能改善効果-大脳皮質脳活動バイオフィードバックの応用	大学院医歯薬保健学研究院(保)	教授	松川 寛二	1,600,000
過疎高齢化が進む地域での住民参加型ポピュレーション・ヘルス・マネジメントの展開	大学院医歯薬保健学研究院(保)	教授	森山 美知子	800,000
ニューロサイエンスに立脚した対麻痺歩行支援ロボットの開発	大学院医歯薬保健学研究院(保)	教授	弓削 類	1,000,000
乳児のシグナルに喚起される感情モデルに基づく体験型親準備教育プログラム構築の試み	大学院医歯薬保健学研究院(保)	講師	竹中 和子	2,400,000
変形性膝関節症患者における脳内の疼痛認知-fMRIを用いた評価方法の確立	病院(医)	准教授	安達 伸生	500,000
放射線療法、化学療法によるゲノム異常と遺伝的影響に関する検討	病院(医)	病院助教	上松瀬 新	3,000,000
産休・育休中の女性皮膚科医による在宅・僻地皮膚診療支援	病院(医)	病院助教	横林 賢一	2,100,000
口腔癌転移を制御する細胞接着因子を標的にした核酸医薬のデリバリーシステムの開発	病院(歯)	講師	林堂 安貴	800,000
浸潤突起を選択的に採取できる新技術レーザープロトオミクスによる肺癌浸潤機構の解明	原爆放射線医学研究所	教授	岡田 守人	1,400,000
新たな遺伝学手法による未知の脊髄小脳変性症遺伝子探索	原爆放射線医学研究所	教授	川上 秀史	1,000,000

研究課題名	所属	職名	研究代表者名	配分額(円) (直接経費)
心臓幹細胞の新たな同定法の開発と機能解析	原爆放射線医学研究所	教授	瀧原 義宏	900,000
ゲノムストレス記憶・継承システムの解明	原爆放射線医学研究所	教授	田代 聡	1,300,000
ATM阻害による放射線抵抗性のGO期癌細胞・癌幹細胞の放射線増感法の開発	原爆放射線医学研究所	教授	細井 義夫	800,000
革新的両方向性遺伝学的アプローチによる重度小頭症の病態解明	原爆放射線医学研究所	教授	松浦 伸也	1,200,000
ヒ素感受性関連遺伝子群の探索と毒性発現・生体防御機構の解明	原爆放射線医学研究所	准教授	信國 好俊	1,100,000

基盤研究(B)

研究課題名	所属	職名	研究代表者名	補助金	基金	配分額合計(円) (直接経費)
治療耐性・癌幹細胞克服に向けた消化管癌の新規診断・治療標的の包括的同定と展開	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	安井 弥	2,900,000	2,500,000	5,400,000
情動制御の脳内機構とその障害の修復機序に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	山脇 成人	3,900,000	3,300,000	7,200,000
バイオプロセシングを用いる機能性インテリジェント複合インプラントの新開発	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	教授	赤川 安正	2,600,000	2,200,000	4,800,000
口腔癌幹細胞ニッチにおけるサイトカインネットワークの解明とその診断・治療への応用	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	教授	岡本 哲治	3,500,000	3,000,000	6,500,000
骨髄間葉系幹細胞からセメント芽細胞への分化誘導と象牙質面へのセメント質形成誘導	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	教授	栗原 英見	3,500,000	3,000,000	6,500,000
水素量低減DLCを応用したインプラント周囲骨リモデリングの制御	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	教授	二川 浩樹	4,300,000	3,700,000	8,000,000
熱帯地域特異的神経変性疾患の現地調査と病因に基づく新規モデル動物作製	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	准教授	古武 弥一郎	2,500,000	2,200,000	4,700,000
E-カドヘリンのプロセシング抑制による口腔癌の浸潤・転移阻止療法に関する研究	病院(歯)	講師	林堂 安貴	3,300,000	2,900,000	6,200,000
口腔癌のEMTを介した局所浸潤機構の解明	病院(歯)	講師	東川 晃一郎	1,600,000	1,400,000	3,000,000
肺上皮癌における浸潤性肺腺癌への悪性化進展メカニズムの解明	原爆放射線医学研究所	教授	岡田 守人	2,800,000	2,400,000	5,200,000
放射線感受性の個人差を規定する遺伝子の探索と同定	原爆放射線医学研究所	教授	松浦 伸也	3,800,000	3,200,000	7,000,000
ホウ素中性子捕捉療法のための加速器ターゲットシステムと中性子線量評価法の開発	原爆放射線医学研究所	名誉教授	星 正治	3,100,000	2,700,000	5,800,000

若手研究(A)

研究課題名	所属	職名	研究代表者名	補助金	基金	配分額合計(円) (直接経費)
小胞体を起点とする骨軟骨代謝の制御と破綻	大学院医歯薬保健学研究院(医)	助教	齋藤 敦	7,100,000	3,100,000	10,200,000
変形性関節症における新規関節内コミュニケーション因子としての分泌マイクロRNA	病院(医)	講師	味八木 茂	5,900,000	2,500,000	8,400,000
p53制御によって正常組織への副作用を軽減する新規放射線防護剤の開発	原爆放射線医学研究所	助教	森田 明典	8,600,000	3,700,000	12,300,000

(注) 所属欄の(医)は医学分野、(歯)は歯学分野、(薬)は薬学分野、(保)は保健学分野を示す。

行政政策研究分野

事業名	研究課題名	所属	職名	研究代表者名	配分額(円) (直接経費)
地球規模保健課題推進研究事業 (国際医学協力研究事業)	アジアにおいて特に蔓延するウイルス性肝炎疾患の制御へ向けた日米共同ウイルス肝炎研究	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	教授	茶山 一彰	1,000,000

厚生科学基盤研究分野

事業名	研究課題名	所属	職名	研究代表者名	配分額(円) (直接経費)
創薬基盤推進研究事業	複数の作用メカニズムを同時に発現する革新的がん剤の開発	原爆放射線医科学研究所	助教	森田 明典	1,000,000

疾病・障害対策研究分野

事業名	研究課題名	所属	職名	研究代表者名	配分額(円) (直接経費)
エイズ対策研究事業	血液凝固因子製剤によるHIV感染被害者の長期療養体制の整備に関する患者参加型研究	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	教授	田中 純子	1,000,000
エイズ対策研究事業	HIV感染症の医療体制の整備に関する研究	病院 (医)	准教授	藤井 輝久	6,000,000
肝炎等克服緊急対策研究事業	自然免疫細胞リモデリングによるウイルス性肝炎の新規治療法の開発	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	教授	大段 秀樹	28,443,000
肝炎等克服緊急対策研究事業	創薬と新規治療法開発に資するヒト肝細胞キメラマウスを用いた肝炎ウイルス制御に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	教授	大段 秀樹	3,000,000
肝炎等克服緊急対策研究事業	肝移植後C型肝炎に対する治療法の標準化を目指した臨床的ならびに基礎的研究	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	教授	大段 秀樹	1,000,000
肝炎等克服緊急対策研究事業	肝炎ウイルス感染状況・長期経過と予後調査及び治療導入対策に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	教授	田中 純子	34,319,000
肝炎等克服緊急対策研究事業	自然免疫細胞リモデリングによるウイルス性肝炎の新規治療法の開発	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	教授	田中 純子	1,000,000
肝炎等克服緊急対策研究事業	創薬と新規治療法開発に資するヒト肝細胞キメラマウスを用いた肝炎ウイルス制御に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	教授	茶山 一彰	66,690,000
肝炎等克服緊急対策研究事業	ウイルス性肝炎における最新の治療法の標準化を目指す研究	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	教授	茶山 一彰	2,000,000
肝炎等克服緊急対策研究事業	自然免疫細胞リモデリングによるウイルス性肝炎の新規治療法の開発	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	助教	田中 友加	1,000,000
肝炎等克服緊急対策研究事業	自然免疫細胞リモデリングによるウイルス性肝炎の新規治療法の開発	大学院医歯薬保健学研究院 (薬)	教授	田原 栄俊	1,000,000
肝炎等克服緊急対策研究事業	B型肝炎ウイルスe抗体陽性無症候キャリアの長期予後に関する検討	病院 (医)	講師	高橋 祥一	1,000,000
肝炎等克服緊急対策研究事業	肝炎に関する全国規模のデータベースを用いた肝炎治療の評価及び肝炎医療の水準の向上に資する研究に係わる調査研究	病院 (医)	講師	高橋 祥一	2,000,000
肝炎等克服緊急対策研究事業	ウイルス性肝炎の病態に応じたウイルス因子の解明と治療応用	病院 (医)	病院助教	今村 道雄	2,400,000
肝炎等克服緊急対策研究事業	自然免疫細胞リモデリングによるウイルス性肝炎の新規治療法の開発	病院 (医)	病院助教	今村 道雄	2,000,000
肝炎等克服緊急対策研究事業	創薬と新規治療法開発に資するヒト肝細胞キメラマウスを用いた肝炎ウイルス制御に関する研究	病院 (医)	病院助教	今村 道雄	3,000,000
肝炎等克服緊急対策研究事業	B型慢性肝炎にたいする新規逆転写酵素阻害剤テノホビルの有効性・安全性に関する検討	自然科学研究支援開発センター	助教	柘植 雅貴	2,000,000
肝炎等克服緊急対策研究事業	B型肝炎の核酸アナログ薬治療におけるdrugfreeを目指したインターフェロン治療の有用性に関する研究	自然科学研究支援開発センター	助教	柘植 雅貴	2,000,000
がん臨床研究事業	標準治療抵抗性神経膠芽腫に対するペプチドワクチンの第Ⅲ相臨床研究	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	教授	栗栖 薫	1,000,000
がん臨床研究事業	小児がんの罹患患者数把握および晩期合併症・二次がんの実態把握のための長期フォローアップセンター構築に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	教授	小林 正夫	450,000
がん臨床研究事業	高悪性度骨軟部腫瘍に対する標準治療確立のための研究	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	准教授	下瀬 省二	190,000
がん臨床研究事業	頭頸部腫瘍に対する強度変調放射線治療の確立と標準化のための臨床研究	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	講師	村上 裕司	300,000
がん臨床研究事業	高齢がん患者の治療開始および中止における意志決定能力の評価およびその支援に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院 (保)	教授	岡村 仁	1,000,000
がん臨床研究事業	標準治療抵抗性神経膠芽腫に対するペプチドワクチンの第Ⅲ相臨床研究	病院 (医)	教授	杉山 一彦	1,000,000
がん臨床研究事業	進行・再発肝細胞癌に対する動注化学療法と分子標的薬併用による新規治療法の確立を目指した臨床試験 (PhaseⅢ) ならびに効果を予測するbiomarkerの探索研究	病院 (医)	講師	相方 浩	700,000
がん臨床研究事業	末梢小型非小細胞肺癌に対する縮小手術の有用性を検証する研究	原爆放射線医科学研究所	教授	岡田 守人	1,500,000
がん臨床研究事業	切除可能悪性胸膜中皮腫に対する集学的治療法の確立に関する研究	原爆放射線医科学研究所	教授	岡田 守人	1,000,000
がん臨床研究事業	神経芽腫における標準治療の確立と新規治療の開発に関する研究	自然科学研究支援開発センター	教授	檜山英三	350,000
障害者対策総合研究事業	精神療法の有効性の確立と普及に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	准教授	岡本 泰昌	600,000
障害者対策総合研究事業 (精神分野)	睡眠薬の適正使用料及び減量・中止のための診療ガイドラインに関する研究 (H24-精神-一般004)	病院 (医)	講師	山下 英尚	200,000
循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業	動脈硬化の多角的評価による脳卒中個別化治療開発に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	教授	松本 昌泰	400,000
循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策研究事業	保健指導の導入による脳卒中・心筋梗塞の再発予防効果に開発に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	教授	松本 昌泰	1,000,000
循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策研究事業	保健指導の導入による脳卒中・心筋梗塞の再発予防効果に開発に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院 (保)	教授	森山 美知子	2,000,000
循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策研究事業	日本人2型糖尿病患者における生活習慣介入の長期予後効果並びに死亡率とその危険因子に関する前向き研究 (JDCS)	病院 (医)	病院助教	中西 修平	500,000
成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業	母子コホート研究による成育疾患等の病態解明に関する研究	自然科学研究支援開発センター	教授	檜山英三	2,550,000
第3次対がん総合戦略研究事業	がん治療のための革新的新技術の開発及び臨床応用に関する総合的な研究	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	教授	永田 靖	2,000,000
第3次対がん総合戦略研究事業	放射線障害と宿主要因からみた発がんの分子基盤とその臨床応用に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院 (医)	教授	安井 弥	17,000,000

事業名	研究課題名	所属	職名	研究代表者名	配分額(円) (直接経費)
第3次対がん総合戦略研究事業	QOL向上のための、主に精神、心理、社会、スピリチュアルな側面からの患者・家族支援プログラムに関する研究	大学院医歯薬保健学研究院(保)	教授	岡村 仁	2,000,000
第3次対がん総合戦略研究事業	ゲノム・遺伝子解析情報に基づく、臨床応用可能な固形がんの予後予測法の開発と免疫遺伝子治療に資する研究	大学院医歯薬保健学研究院(医)	准教授	大上 直秀	3,000,000
第3次対がん総合戦略研究事業	高精度放射線治療システムの実施調査と臨床評価に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院(医)	助教	権丈 雅浩	200,000
第3次対がん総合戦略研究事業	がんの診療科データベースとJapaneseNationalCancerD(JNCDB)の構築と運用	大学院医歯薬保健学研究院(医)	助教	権丈 雅浩	250,000
第3次対がん総合戦略研究事業	放射線障害と宿主要因からみた発がんの分子基盤とその臨床応用に関する研究	原爆放射線医学研究所	教授	神谷 研二	1,500,000
難治性疾患克服研究事業 (免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業)	生命予後に関わる重篤な食物アレルギーの実態調査・新規治療法の開発および治療指針の策定	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	秀 道広	500,000
難治性疾患克服研究事業 (免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業)	アトピー性皮膚炎の発症・症状の制御および治療法の確立普及に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	秀 道広	900,000
難治性疾患克服研究事業 (免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業)	アレルギー疾患の全国全年齢有症率および治療ガイドライン普及効果等疫学調査に基づく発症要因・医療体制評価に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	秀 道広	1,200,000
難治性疾患克服研究事業 (免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業)	適切なスキンケア、薬物治療方法の確立とアトピー性皮膚炎の発症・増悪予防、自己管理に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	教授	菅井 基行	1,500,000
難治性疾患克服研究事業 (免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業)	皮膚バリア障害によるアレルギーマーチ発症機序解明に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院(歯)	教授	菅井 基行	2,000,000
難治性疾患克服研究事業 (難治性疾患克服研究事業)	びまん性肺疾患に関する調査研究	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	河野 修典	700,000
難治性疾患克服研究事業 (難治性疾患克服研究事業)	原発性免疫不全症に対する造血幹細胞移植法の確立	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	小林 正夫	2,000,000
難治性疾患克服研究事業 (難治性疾患克服研究事業)	原発性免疫不全に関する調査研究	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	小林 正夫	1,500,000
難治性疾患克服研究事業 (難治性疾患克服研究事業)	血液免疫系細胞分化障害による疾患の診断と治療に関する調査研究	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	小林 正夫	2,000,000
難治性疾患克服研究事業 (難治性疾患克服研究事業)	先天性顆粒放出異常性の病態解明と診断法の確立	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	小林 正夫	700,000
難治性疾患克服研究事業 (難治性疾患克服研究事業)	難治性血管腫・血管奇形についての調査研究班 患者実態調査および治療法の研究	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	田中 純子	200,000
難治性疾患克服研究事業 (難治性疾患克服研究事業)	好酸球性副鼻腔炎の診断基準作成と網羅的解析に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	平川 勝洋	400,000
難治性疾患克服研究事業 (難治性疾患克服研究事業)	リンパ脈管筋腫症に対するシロリムスの安全性確立のための医師主導治験	大学院医歯薬保健学研究院(医)	准教授	服部 登	2,300,000
難治性疾患克服研究事業 (難治性疾患克服研究事業)	神経フェリチン症の実態調査と診断基準の構築に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院(医)	准教授	山脇 健盛	800,000
難治性疾患克服研究事業 (難治性疾患克服研究事業)	希少性難治性疾患患者に関する医療の向上及び患者支援のあり方に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院(医)	講師	宮地 隆史	600,000
難治性疾患克服研究事業 (難治性疾患克服研究事業)	ミトコンドリア病に合併する高乳酸血症に対するビルビン酸ナトリウム治療法の開発研究-試薬からの希少疾病治療薬開発の試み	大学院医歯薬保健学研究院(医)	助教	但馬 剛	2,000,000
難治性疾患克服研究事業 (難治性疾患克服研究事業)	特発性大腿骨頭壊死症の診断・治療・予防法の開発を目的とした全国国際的研究	大学院医歯薬保健学研究院(医)	常務講師	安永 裕司	1,200,000
難治性疾患克服研究事業 (難治性疾患克服研究事業)	前庭機能異常に関する調査研究	病院(医)	講師	工田 昌也	1,050,000
難治性疾患克服研究事業 (難治性疾患克服研究事業)	神経変性疾患に関する調査研究	原爆放射線医学研究所	教授	川上 秀史	1,400,000
難治性疾患克服研究事業 (難治性疾患克服研究事業)	先天性異常の疾患群の診療指針と治療方法開発を目指した情報・検体共有のフレームワークの確立	原爆放射線医学研究所	教授	松浦 伸也	2,600,000
難治性疾患克服研究事業 (難治性疾患克服研究事業)	家族性血小板異常症に関する調査研究	原爆放射線医学研究所	講師	原田 浩徳	500,000
B型肝炎創薬実用化等研究事業	革新的な動物モデルや培養技術の創出初を通じたHBV排除への創薬研究	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	茶山 一彰	100,000,000
B型肝炎創薬実用化等研究事業	革新的な動物モデルや培養技術の創出初を通じたHBV排除への創薬研究	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	教授	田原 栄俊	5,000,000
B型肝炎創薬実用化等研究事業	革新的な動物モデルや培養技術の創出初を通じたHBV排除への創薬研究	大学院医歯薬保健学研究院(医)	助教	阿部 弘美	4,000,000
B型肝炎創薬実用化等研究事業	HBV cccDNAの制御と排除を目指す新規免疫治療薬の開発	病院(医)	病院助教	今村 道雄	3,000,000
B型肝炎創薬実用化等研究事業	B型肝炎の新規治療薬を開発するための宿主の自然免疫系の解析に関する研究	自然科学研究支援開発センター	助教	柘植 雅貴	18,000,000
慢性の痛み対策研究事業	慢性疼痛の多面的評価システムの開発と客観的評価法の確立に対する研究	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	越智 光夫	500,000

健康安全確保総合研究分野

事業名	研究課題名	所属	職名	研究代表者名	配分額(円) (直接経費)
医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業	献血推進のための効果的な広報戦略等の開発に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	田中 純子	3,000,000
医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業	薬剤製薬肺障害に関する包括的研究	大学院医歯薬保健学研究院(医)	准教授	服部 登	300,000
医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業	健康食品と称して販売される無承認無許可医薬品の調査・分析・有害性予測と監視に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院(薬)	名誉教授	大塚 英昭	1,000,000
地域医療基盤開発推進研究事業	救急医療体制の推進に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	谷川 攻一	120,000
地域医療基盤開発推進研究事業	被災地の再生を考慮した住宅医療の構築に関する研究	大学院医歯薬保健学研究院(医)	常務講師	服部 文子	1,000,000

健康長寿社会実現のためのライフ・イノベーションプロジェクト

事業名	研究課題名	所属	職名	研究代表者名	配分額(円) (直接経費)
難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業	肝炎ウイルス感染者に対する偏見や差別の実態を把握し、その被害の防止のためのガイドラインを作成するための研究	大学院医歯薬保健学研究院(医)	教授	田中 純子	2,800,000



○平成24年度受託研究受入・民間等との共同研究実績状況

外部資金の名称	受入状況	
	件数	受入金額(千円)
受託研究	54件	442,254
共同研究	25件	117,995
計	79件	560,249

医歯薬保健学研究院、原爆放射線医科学研究所、病院の平成24年4月1日から平成24年9月30日までの受入状況を示す。
(千円未満四捨五入)

○平成24年度奨学寄附金受入状況

受入状況	
件数	受入金額(千円)
679件	527,511

医歯薬保健学研究院、原爆放射線医科学研究所、病院の平成24年4月1日から平成24年9月30日までの受入状況を示す。
(千円未満四捨五入)

○寄贈図書一覧

寄贈者		書名等	著者	出版事項
所属	氏名			
広島大学名誉教授 (原爆放射線医科学研究所)	渡邊 敦光	味噌力 毎日の味噌汁で強い体をつくる	渡邊 敦光	株式会社かんき出版 2012年3月発行
医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 医薬分子機能科学研究室	小池 透	人は死なない	矢作 直樹	バジリコ株式会社 2011年9月発行
医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 医薬分子機能科学研究室	小池 透	夢と構造 フロイトからラカンへの隠された道	新宮 一成	株式会社弘文堂 1988年3月発行
医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 医薬分子機能科学研究室	小池 透	単位が取れる有機化学ノート	小川 裕司	株式会社講談社 サイエンティフィック 2005年5月発行
医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 医薬分子機能科学研究室	小池 透	高校の化学をイチからおさらいする本 有機化学編	宇野 正明	株式会社中経出版 2006年1月発行
医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 医薬分子機能科学研究室	小池 透	理系のためのはじめて学ぶ化学 物理化学	齋藤 勝裕	株式会社ナツメ社 2007年7月発行
医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 医薬分子機能科学研究室	小池 透	絶対わかる物理化学	齋藤 勝裕	株式会社講談社 サイエンティフィック 2003年11月発行
医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 医薬分子機能科学研究室	小池 透	絶対わかる有機化学	齋藤 勝裕	株式会社講談社 サイエンティフィック 2003年11月発行
病院 がん化学療法科	杉山 一彦	消化器病学の進歩 原点から未来への情報発信 第94回日本消化器病学会総会記念誌 消化管領域 1	飯田 三雄	財団法人 日本消化器病学会 2009年7月発行
病院 がん化学療法科	杉山 一彦	消化器病学の進歩 原点から未来への情報発信 第94回日本消化器病学会総会記念誌 肝胆膵領域 2	飯田 三雄	財団法人 日本消化器病学会 2009年7月発行
病院 がん化学療法科	杉山 一彦	消化器病学の進歩 原点から未来への情報発信 第94回日本消化器病学会総会記念誌 複合領域 3	飯田 三雄	財団法人 日本消化器病学会 2009年7月発行
病院 がん化学療法科	杉山 一彦	これだけは知っておきたい がん医療における心のケア 精神腫瘍学ポケットガイド	小川 朝生 編 内富 庸介	公益財団法人 医療研修推進財団 2010年3月発行
病院 がん化学療法科	杉山 一彦	震災が与えてくれた「町医者力」	長尾 和宏	株式会社エピック 2010年12月発行

編集後記

テレビ番組、週刊誌等の雑誌、デパートやショッピングセンターなど、様々な節目でリニューアルを行い、新たな内容で再スタートを切ることがあります。政権交代や、われわれ大学教員が授業内容を大きく変えることも、その事例の一つです。

そのような場合、当事者は十分に計画し用意周到に事を運びますが、それでも、リニューアル後の内容に対しては、旧来の内容を懐かしむ声、変化に対して批判的な声、新たな内容を評価し今後を期待する声など、いろいろな意見が出て、場合によっては大きな修正を迫られる場合もあります。

大学の組織再編で、医歯薬保健学研究科として霞の部局がリニューアルされ、本誌に関して言えば、第1回目の広報誌が4月に発刊されました。発刊号の内容は、研究科発足への記念誌的なものでしたが、いよいよ今回の第2号からは、リニューアルした広報誌の内容で編成しています。この内容を決めるにあたっては、どのような読者層があるのか、広報誌の位置づけは何か、研究科の広報誌としてふさわしい内容は何か、みなさんが手に取って読みたくなるような内容は何か、など、編集委員がいろいろな見地からの検討を行い、その結果、今号の発刊に到りました。

広報誌としての制約もある中、少しでも読みやすい内容にするよう心がけましたが、編集委員内でも、この内容で本当に興味深く読んでいただけるのか、という懸念も持っております。編集委員会としては、お読み下さる方々からのご意見をいただければ、今後の編集の大きな手がかりになると思っております。みなさまには、本誌のご愛読とともに、本誌への忌憚なきご意見を、よろしく願いいたします。

2012年10月 編集委員 竹本 俊伸

表紙写真説明

薬学部薬用植物園のナツメ（9月22日、秋分の日撮影）

熟して収穫した後、乾燥させると、大棗（たいそう）という漢方生薬となります。霞キャンパスには、実に多くの種類の植物があります。研究・教育の合間に散策し、これらの植物に出会うと、一種の清涼剤となります。

（写真・文 武島 幸男 医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 医学分野 病理学 教授）



2013年(平成25年)1月発行

編集発行 広島大学大学院医歯薬保健学研究科広報委員会

住所 〒734-8553 広島市南区霞一丁目2番3号

電話 (082)257-1598(総務支援グループ)

FAX (082)257-5615

E-mail bimes-bucho-sien@office.hiroshima-u.ac.jp

URL <http://www.hiroshima-u.ac.jp/bimes/>

印刷 株式会社ニシキプリント

研究科長 小林 正夫

□広報委員会委員(○委員長)

- 坂口 剛正(基礎生命科学部門教授(医学分野))
- 酒井 規雄(基礎生命科学部門教授(医学分野))
- 杉田 誠(基礎生命科学部門教授(歯学分野))
- 武田 敬(基礎生命科学部門教授(薬学分野))
- 服部 登(応用生命科学部門准教授(医学分野))
- 武知 正晃(応用生命科学部門准教授(歯学分野))
- 猪川 和朗(応用生命科学部門准教授(薬学分野))
- 宮下 美香(応用生命科学部門教授(保健学分野))
- 松原 昭郎(統合健康科学部門教授(医学分野))
- 片山 恵子(統合健康科学部門講師(医学分野))
- 竹本 俊伸(統合健康科学部門教授(歯学分野))
- 高橋 真(統合健康科学部門講師(保健学分野))
- 竹中 和子(統合健康科学部門講師(保健学分野))
- 松浦 伸也(原爆放射線医科学研究所教授)